二次元ゲームノベルズ1
CARNIVAL
原作 S.M.L
小説 瀬戸口廉也
挿絵 川原 誠
二次元ゲームノベルズ
CARNIVAL
—カーニバル—
原作 S・M・L
小説 瀬戸口廉也
挿絵 川原 誠
KTC

9784860321284

1920293008905

ISBN4-86032-128-6

C0293 ¥890E

株式会社キルタイムコミュニケーション
定価：本体890円
（消費税が別に加算されます）

「世界は残酷で恐ろしいものかもしれないけれど、とても美しい。思えば、そんなこと、僕らは最初から知っていたはずなんだ」殺人の容疑をかけられ護送中のパトカーから逃亡したマナブ。そんな彼と一緒に失踪する道を選んだリサ。あれから、七年――。二人は行方不明となりその安否も確認できないまま、七年の月日が流れた。ある日、リサの弟・洋一に一本の電話がかかってくる。姉・リサからの思いがけない電話だった。彼女たちの消息を追い、七年前の事件について調べ始める洋一。浮浪少女・サオリとともに、事件の真相に迫っていくが……。リサ、マナブの行方は？　事件に翻弄されたイズミ、エイミたちのその後は？　洋一が新たに見つけた希望の光とは……。

Coverdesign：FUSEBOX

Illustration : MAKOTO KAWAHARA

登場人物紹介

Characters

九条 洋一

温厚で篤実な人柄の青年。七年前に突如いなくなった姉の消息を追い、そのときに起こった事件について調べ始める。特殊な性癖を持ち、それをコンプレックスとしている。

サオリ

自分の身を売り、その援助金で浮浪生活をしている少女。貧困、複雑な家庭環境に生まれながら、明るく元気に生きている。特別天然な性格で一般的な常識を少し欠いているが、その容姿は端麗。

木村 学

七年前の事件を引き起こした犯人として、殺人・強姦・傷害の容疑がかけられている。当時は、典型的ないじめられっ子で、空想癖があり、理沙以外の人間には心を閉ざしていた。現在は、理紗とともに逃亡中。

九条 理紗

洋一の姉。七年前、幼馴染の学と一緒に突如姿を消す。当時は社交的で責任感が強く、成績優秀な学園のヒロインだった。父親に小さい頃から虐待を受けており、学に依存されることに幸福を見いだしていた。

渡会 泉

理紗の親友。理紗を尊敬し、彼女にずっと劣等感を抱き続けていた。七年前の事件では、警察に通報しなかったことが取り沙汰された。その後、事件に関与していないことが証明され、不起訴となった。今は大学を卒業し、新聞社に勤めている。

志村 詠美

学たちの先輩。七年前、後輩の学を高圧的な態度でいじめていた。そんな彼に、祭りの夜強姦されてしまった。

志村 麻里

詠美の妹。洋一とは同い年。七年前の当時は、町をふらふらしている好奇心の強い少女だった。現在、ビジュアル系のインディーズバンドを結成し、活動している。

CARNIVAL

原作 S.M.L
小説 瀬戸口廉也
挿絵 川原　誠

PROLOGUE

今思えば、いつかこうなってしまうと、はじめから解っていたのだと思う。
でも、もし駄目になってしまうとしても、その前にゴールに駆け込むことさえ出来れば、何も問題がないとたかをくくっていたんだ。
ゴールはまだ見えない。あの頃想像していたより、僕たちは長生きしすぎてしまったんだろう。

一時停止ボタンなんかどこにもなくて、力一杯全部を出し切った、その瞬間に都合良く存在が消えてなくなったりもしない。疲れ切ってしまって、戦う気力なんか全然なくなって、勇気とか希望とか自分を守ってくれるものが全部失われてしまって、映画だったら「終」とテロップが出るような場面が過ぎても、生活は続いてしまう。けして止まらない。
そこからが本当に人間が生きるということなのだろうと、最近はそう思ったりもする。
ドラマが終わって、興奮から冷めて、何も心を守ってくれなくなって、これからはもっと大変な毎日が続くだろう。でも、どんなに苦しくても、心が死んだようになって、痛み

も喜びも何も感じることが出来なくなってしまって、何をしても無意味に感じられて、もう駄目だと思っても、諦めないで、自分に耐えて、もう少しだけがんばって欲しい。

小さな頃に見ていたものは、まだ何も知らなかった時代のまぼろしなんかではなくて、いまでも見ることが出来るずっとそこにある変わらないものだった。辛くなるからって無理に忘れてしまわなくても良かったんだ。僕は気がつくのが遅すぎた。必要なものを、自分で隠していたんだ。でも、こんな僕でもまだ全てを失ったわけではなかった。
世界は残酷で恐ろしいものかもしれないけれど、とても美しい。
思えば、そんなこと、僕らは最初から知っていた筈なんだ。

時間が過ぎて、僕のことは忘れてしまっても構わないけれど、僕が今ここに書いている言葉のいくつかをときどき思い出してくれるなら、それより嬉しいことはない。

追伸。今までありがとう。
出来ることならば、誰も憎まないで生きてください。

CHAPTER－1

太陽が青空高く燃えている。
空気が陽炎に揺らめいている。
道路の向こうに、追っても追っても追いつけない黒い水たまりが貼りついている。
僕は熱く焼けたアスファルトの上を自転車でひた走っていた。日差しは肌を焦がし、脇を通り過ぎるトラックは排気ガスを容赦なく浴びせかけてくる。走り出して十分もしないうちにシャツが背中にへばりついた。
暑かった。往路の時点でバスを使えば良かったなと後悔しはじめた。復路となったいま現在、暑気にやられて意識がかすみ、ほとんど忘我の域に達している。どうにもくらくらする。頭の中で原色のメリー・ゴー・ラウンドが回っている。
暑気をおしてこんな炎天下に自転車のペダルを漕いでいるのは、通院のためだった。僕はだいぶ前から眠れなくなっていて、睡眠を補助する薬を貰うために病院に通っていた。いや、最初は僕だってそんなことで医者に通うなんて想像もしていなかった。眠れないなんて誰にだってあることだし、特別なものではない。しかし、そうして不眠不休の日常生活を続けていたら、気がつかないうちに体力が落ちていたらしい。体育の授業でバスケッ

た。

トボールをしていると倒れてしまった。そして目を覚ましたら僕は病院のベッドの上にい

そこで僕はやむなく医者に問われるまま最近の体調を話し、結果として病名をつけられ、眠剤を処方されるようになった。世の中にはもっと深刻な病気があるし、ちょっと眠れないくらいで病気扱いされてしまうのは本当に病気で苦しんでいる人に申し訳なかったけれど、確かに突然倒れたりして日常生活に支障を来すようでは病人と言われても仕方ないのだろう。もっと強くならなくてはいけない。「僕はそんなに弱いのでしょうか」と口にしたら、医者は「若い人は悩み事が多くて繊細な人は疲れてしまうと眠れなくなったりしがちですよ、すぐに全てを解決するのは難しいですが、今は規則正しい生活をしてきちんと食事をとることを心がけるのが大事です。受験も控えていることだし」と言った。

今日も診察日で、眠るための薬を貰った。医者から言われたことは真面目に守っている筈だけれど、これまでの診察で薬が減量となったためしがない。今日も従来の薬があまり効かなくなっていたので、少し強いものに替えられてしまった。どんどん薬が強力になってゆく。治るどころか悪くなっているような気さえする。薬がなくても平気な自分を証明しようと、ときどき何も飲まずに布団の中に潜り込むのだけど、いつだって天井を見つめているうちに朝を迎えてしまう。少しも平気ではない。体調には気をつけているので、そんなに悪くはない筈なのだけれど、まだ管理が足りないのだろうか。ただ自分の力で眠り

たいだけだというのに、なかなか難しい。受験どころの騒ぎではない。
汗がだくだくと流れて、目にしみた。手で拭うと粉塵を吸って茶色く濁っている。国道の空気は汚れていて、喉がいがらっぽくなる。肺にもたくさん埃を吸い込んでいるだろうと想像すると不快だ。
耐え切れなくなったので、国道を行くのをよして遠回りになるが環境の良い別の道を選んだ。林と住宅の混じる木陰の多い田舎道をアブラゼミの声に打たれながら自転車を走らせていると、気分が回復してくる。強力な太陽の日差しが木々の緑を鮮明に照らし出して目に美しい。自然というのは心が安まるなと実感する。植物の多いところの空気を吸うと清々しくなる。一時期話題になったのはマイナスイオンとか言うのだっけ。
神社の赤い鳥居を見つけて、疲労を感じはじめていた僕はここで休憩を取ろうと自転車を停めた。石段を上り、境内に足を踏み入れると広葉樹が生い茂り太陽の光が葉を透かして緑色の光線を落としている。そう広くはない林だが、スポンジが水を含むように、森林特有の清廉な空気を孕んでいる。
砂利を敷きつめた境内のあちこちを、水を求めて歩いたけれど水道が見あたらない。かわりに、これみよがしに井戸があるのだが、困ったことに注意書きのたぐいがなく、飲めるとも飲めないとも判断がつかない。のぞき込んだくらいでは何もわからない。釣瓶を繰って水をすくってみると、特に怪しい匂いもしなければ濁りも見えない。

一般的に考えたら、得体の知れない水なんか飲まないほうが良いのは当たり前なのだけれど、僕はひどく喉が渇いていた。このあたりには良質な地下水があって、有名な清酒の醸造元があるのも知っている。あるいはこの水もとても美味しいかもしれない。井戸なのだから、水が腐っているということもないだろう。水は透明に澄み、光をきらきらと反射していて、それが喉を通る清涼な感じを思い浮かべると我慢が出来ない。

思い切って釣瓶に唇をつけると、

「飲まないほうがいいよ」

と声をかけられて、動作をやめた。振り返ると、少女が立って微笑んでいる。年齢は僕と同じくらいだろうか。

あ、と思った。どこかで見たことがある、ような気がする。だけれど、どこで見たのかが思い出せないから、もしかしたら気のせいかもしれない。

それにしても、少女はとても美しかった。思わず見とれていると彼女は重そうに下げていた白いビニール袋から、ウーロン茶の2リットル入りのペットボトルを取り出し「飲む？」と僕に押しつけた。ボトルを差し出す白くてしなやかな腕が太陽の光に輝いている。

「いいの？」

「うん」

彼女が答えるのが早いか、僕はボトルを受け取った。もちろん、安全な飲み物があるな

ら、自分を騙してまで得体の知れない水を飲む必要なんかない。空腹にウーロン茶を飲むのは良くないらしいけれど、野ざらしの井戸の水よりはマシだろう。僕はキャップを外すとラッパの要領で飲んだ。

「うわ、ずいぶんのど渇いてたんだね。すごい勢い」

言われてみると、もう半分近くも飲んでしまっている。

「あ、ごめん。ちょっと飲みすぎた」

1リットル近く飲んだものだから、胃の中で水が揺れているのがわかる。水分を摂りすぎて体が重くなる。

「もっと飲んじゃってもいいよ、でも私の分も残しておいてね」

「もう大丈夫」

手渡すと彼女も同じように直接ボトルから飲んだ。細い喉がこくこくと律動している。僕からすればほんの少しの量だけれど、本人は満足したらしい。飲み終わると、口のまわりを手のひらで拭ってから彼女は言った。

「私もこの間井戸の水飲んだんだけどね、お腹壊しちゃって大変だったんだ。あなた、もう少しでお腹壊すところだったんだよ」

彼女はからかうような口調だった。

「それは、飲まないで良かったなあ」

というか、冷静になって考えると、こんなところの水を飲もうとするなんて、僕は相当阿呆なことをしようとしていたのじゃないかと自分を疑っていたのだけれど、仲間がいて良かった。

「ねえ、私に感謝してくれた？」

彼女は僕の顔に顔を近づけて、そう言う。鼻先で幽かに女性の香りがする。近づきすぎたので僕は少し後ずさりながら、

「うん。元気になったし、新しいの買ってくるよ」

と言った。水を飲んで、元気を取り戻していた。

「それよりも、ちょっと手伝って欲しいことがあるかも。いいかな？」

「別にいいけど、何をすればいいの？」

「ついてきて、あとで説明するから」

彼女は僕の返事も待たずに歩きはじめる。茶色い髪の毛が、太陽の光で金色に輝いている。

木漏れ日がまだら模様を作る石畳の上を、彼女のミュールがカツンカツンと叩く。彼女は途中で一度立ち止まり、くるりと振り返ると、

「そうだ、あなたの名前教えてよ」と言った。

「オレは九条洋一（くじょうよういち）。洋一でいいよ。きみは？」

「サオリって言うの」
「サオリかあ」
　僕が反復すると、彼女は微笑んだ。そうして、僕とサオリは出会った。
　神社の社殿の中に、それを運び込んだ。
　それというのはベッドのマットレスの部分で、粗大ゴミ置き場のあたりにゴミと並んで解体して放置してあったものだ。要するに粗大ゴミだ。本気でこんなものを運ぶのかと尋ねたらサオリは当たり前とでも言うような笑顔で頷いた。
　手伝って、という言葉は、普通なら頼んだほうが主として運び、頼まれた僕が従となって手助けすることを意味すると思うし、僕もそれを想像したのだけれど、実際のところは僕一人で運んだ。サオリは女の子としてもかなり非力だったから二人で運ぶとどうしてもバランスが悪い。しかも神社の石段を登るとなるといつひっくり返って落ちてしまうのかと気が気でなく、一人で運んだほうがまだ気が楽だった。
　重い、というよりも持ちにくくて、言われた場所についたころには汗だくになっていた。ウーロン茶1リットルくらいじゃ見合わないような気がしたけれど、親切の対価はいつだって高くつくものだから仕方ない。
「前に通りかかったときに見つけてからずっと欲しいなって思ってたんだけれどね、私一

人じゃどうしても無理だから、諦めてたんだ。ホント嬉しい」
　サオリは喜んでいるけれど僕は不審だった。大体にしてここはなんなのだろう。少なくとも彼女の家ではない。
　床が埃だらけだったり扉が壊れかけていたり、手入れもされず荒れ果てた部屋に、彼女の私物らしいものが詰め込まれたビニール袋が散乱している。薄暗くて、灯りもなく、戸を閉めると真っ暗になってしまうだろう。懐中電灯が転がっているが、これを照明にしているのだろうか。いかにも勝手に住み着いています、といった風情で、まさかそんな筈もないよなと考え直したが、そのそばから彼女自らここに住んでいるのだと告白した。
「こんなところで暮らしてるの？」
「うん、そうなの。埃っぽくてくしゃみがたくさん出ちゃう」
　彼女は頷く。こんな場所で寝起きをするだなんて、昔の修行中の剣豪か、芥川龍之介の羅生門みたいだな、と僕は思った。少なくとも年頃の女の子がすることではない。
「虫なんかもいそうだなあ」
「そうだね。でも、暗くて見えないから大丈夫だよ。とにかく床が硬かったのが大変だったんだ。やっと柔らかいところで眠れるよ。ヨウイチのおかげだよ。ありがとう」
　嬉しそうにマットレスの上で飛び跳ねる。こんなもので喜べるのは不思議だったけれど、感謝してくれるのなら僕の疲労も報われる。

もう手伝うこともなさそうだし、なかなか珍しいものが見られて満足もしたし、帰ろうとしたら、いつの間にか雨が降りはじめていた。先ほどまで晴れていた筈の空が僅かの間に嘘みたいに暗くなっている。そして、眺めている間にも、雨が不安になるくらい急速に激しさを増して地面に叩きつける。どこかで雷が鳴る。夕立だ。

「あちゃあ」

僕は呆けてしまった。

「雨宿りしていきなよ。そんなに急がなくたっていいじゃん。私も退屈してたんだ」

彼女の言葉に従って、マットレスに並んで腰掛けると、僕たちはなんとなく雑談をはじめた。彼女は思いつくままを口にするタイプで、話題が次々と飛ぶ。まとまりのつかない言葉を交換していただけで、どんなことを話したか覚えていない。たわいもない笑い話が多かったような気がする。僕は会話には上の空で、早く雨が止まないかなとそればかり考えていた。彼女が動くと、汗で湿った肘や二の腕が僕の腕に触れた。

僕は彼女に見覚えがあった。最初に薄々気がついていたけれど、確信が持てずに、気のせいだと思い込もうとしていた。しかし、こうして間近で見ているうちにどんどん思い出してしまって、もはや気のせいともいえず、どんどん僕の居心地を悪くしている。だって、その記憶は、僕にとっては少しも好ましくないものだったのだもの。

学校の同じクラスに広田(ひろた)というやつがいる。まあ名前はどうでも良いのだけれど、この

広田は普段無口で無愛想な男で、学校外のあまり良くない連中とつきあってあまり良くないことを日常的にしているらしいとまことしやかに噂されている。実際良くないことをしているのだろう。優等生が多いうちの学校では珍しい種類の人物で、必然的にクラスでも少し浮いた存在となり、彼の粗雑な挙動は常日頃から見て見ぬふりをされている。

入学したときはもう少し大人しい生徒だったらしい。そもそも、でなければこの学校には入れなかった筈だ。二年生のときに家が破産したとか、両親が離婚したとか、憶測は飛んだが噂の域を出ない。とにかく、その頃彼に変化があったのは確かなようだ。人間変わるときはあっという間に変わってしまうものだ。ついでに言うと広田は顔のつくりといい、肌の質感といい、魚のハゼにそっくりだ。

その日は何故かその広田の席に男子生徒が集まっていた。普段は広田の席のまわりには人間などいないのだからこれは珍事だ。ついに味気ない学園生活に嫌気がさした広田が打ち解けるためにみんなの心を惹きつける面白い芸でも身につけたのかと嬉しくなったけれど、そうではなかった。携帯電話を見せているようだ。さては話題の最新機種を買って見せびらかしているのかとも思ったが、それはとっくに型落ちした古い機種だった。僕も気になって、ついにみなと一緒に広田の手元をのぞき込んだ。

綺麗な女の子が写っている。広田と一緒に写っている。それだけでも相当な衝撃だったけれど、写っている姿が尋常ではない。驚いた。とてもそんなことをしそうにない嫋やか

な女の子が、まさにそんなことをしている真っ最中なのだ。そんじょそこらでは見かけないような端正な容姿をした少女の、汗にまみれた白い裸体が画面一杯に展開されている。しかも相手は広田だ。繰り返すけれど広田はハゼにそっくりだ。

広田はみなの前で画像を切り替える。そのたびに画面に見入っている男子どもは低いどよめき声を上げる。体勢が様々に入れ替わり、広田とその子がいろんな形で組んずほぐれつな感じになっている。どの角度から見ても女の子はとても可愛い。実際はそれほどでもないのだけれど、いくつか条件が揃ってしまうとものすごく美しく写真に写ってしまう女性が世の中にはいる。だけれど、この少女はどの角度でも可愛い。実物も間違いなく文句なしに美しいのだろう。すごいな。それが広田とこんなことを。そしてもう一度繰り返すけれど広田は本当にハゼにそっくりなのだ。

広田は自慢げに画像一枚一枚について、その状況を説明する。どんな感触だったか、どんな声を上げたか、どんなに気持ち良かったか。そしてどうやって彼女を汚したか。彼がこんなにたくさんの言葉を喋るのは初めてだったが、意外に話がうまい。見かけによらず頭の良いやつなのだろう。画像も説明も、とても生々しく克明で、リアリティに満ちあふれている。実に悪趣味きわまりない状況が次々と頭の中に具体的で鮮明な映像として浮かんで、気分が悪くなってしまった。

一連の連続画像の最後は、アダルトビデオのクライマックスさながらのシーンでしめく

くられている。それを見せつける主演男優その人広田。画面をみなに向け、その場の全員が確認すると彼は携帯をしまった。自然に彼の顔に視線が集まる。何度見てもハゼそっくりだ。なのに。おもわず一同からため息がもれる。

これどうしたの、と誰かが尋ねた。広田は得意げに、三千円でなんでもやらしてくれるんだぜ、なんでもだぜ、ホントになんでもだ、と三度繰り返して笑った。そして、俺も俺のダチ連中も何回もやったよと言った。三千円とはいかにも噓くさかったし、ダチ連中なんて言葉を生で聞いたのはおそらく生まれて初めてだったけれど、こんな画像を教室で見せびらかしてしまうという噂通りのタフガイ、あるいはアウトローぶりを見せつけたあとに言われると、その変な言葉遣いにも妙な説得力があった。誰かが女の子の詳細を尋ねたが、広田は薄く笑って秘密だと言った。なんでこんなのとあの女の子が。僕は理不尽な現実にただ言葉を失って、その日はふさぎ込んで、一日中そのことばかり考えていた。

そして、その画像の女性が、いま目の前でマットレスに腰掛けて笑っているこのサオリと名乗る少女とそっくりだったのである。印象としては同一人物としか思えない。やっぱり同一人物なんだろう。広田の話と画像だけでも落ち込んでしまったのに、こうして実際に見てしまったならば尚更だ。しかも二人っきりとなっては、いよいよ気まずい。思い出さなければ良かった。

なるべく触れないでいたかったけれど、結局、黙っていることに耐え切れなくなって僕

は言ってしまった。こういうときに喋ってしまうのが僕の弱いところだろう。
「でも、他人のそら似だよね」
と語尾に付け足したのは、そうであって欲しい僕の願望だった。万が一そんな偶然もあるかもしれない。あるいは写真は合成だとかなんだとか、そういったものだという可能性もありえる。今は誰でも容易にパソコンが扱える時代だし。
しかし僕の期待は簡単に打ち砕かれる。
「そうかな、たぶん私だと思うよ。だって、写真撮ってたの覚えてるもの。でも、恥ずかしいなぁ。あのとき寝不足だから変な顔だったでしょ」
サオリは「昨日デパートで買い物してたのきみでしょ？」と質問された場合に答えるような気軽な調子でそう言った。もちろんデパートで買い物してたのとは訳が違うから、僕のほうが動揺してしまった。この子があんなことやそんなことを。画面の中でくねらせていた裸体を思い浮かべる。
「えっ、でもほんと？　三千円とかっていうのも？」
「うん」
こともなげに頷く。僕は、えーっ、と、大きな声を上げてしまってから、
「ねえ、それって、事情はしらないけれど、自暴自棄になってるの？」
「自暴自棄？　どうして？」

彼女は目をぱちくりして僕を見る。
「だって」僕は納得できない。「いくらなんでも三千円は安すぎると思う」
それが問題の最重要要素ではないのは解っているけれど、思わずそう訊いてしまった。
「えっ、そうなんだ。普通はどれくらいなの？」
「オレも詳しくはないけど、その十倍くらいじゃないの」
「へー、そうなんだ、知らなかったよ」
サオリは感心したように、しきりに頷いている。本当に知らなかったのだとすれば、無知にもほどがある。今どきそんな話はありふれていて、たとえ興味関心がなくても噂話として耳に入ってしまうものだ。ましてや自分でやろうとするのに知らないだなんて、もしや嘘をついているのではないだろうか。僕を騙そうとしてるのではないだろうか。大がかりな仕掛けで。みんながみんなグルになって、どこかで僕が動揺するのを見ている。ただ、そんなことをして誰になんの利益があるのか解らないけど。
「でも、今まで誰もそんなの教えてくれなかったんだよ。本当なの？」
サオリは言った。そりゃ、金払うほうは安い分には文句などあるわけはないし、万一余計なことを言って値段を上げられても困る。言う筈はないだろう。
とにかく、それは途轍（とてつ）もなく安いし、そこまで安売りするのはあまり良くないんじゃないかな。それなりの事情があるんだろうから、僕みたいな今日ちょっと会ったくらいの人

間がやめろとは言わないし言えないけれど、そこまで自分を貶めなくても良いと思う。人間にとって尊厳は大事だよ。そう僕は言った。
「自分をオトシめる？」
「きみだったらもう少しマシなやりかたがあるんじゃないかな。綺麗なんだし」
「綺麗って、私が？」
「そうだよ。はっきり言ってすごい綺麗。それも教わってないって言うの？」
僕は皮肉のつもりで言ったのだけれど、
「うん。こんなにいろいろ教えてもらったのははじめて。ヨウイチって親切だね」
サオリは笑ってる。肩すかしを食らったようで、言葉が続けられない。僕が言ったのを冗談だと思っているのか、それともこの話題全部がサオリの冗談なのか。僕をからかっているだけならもちろんそれが一番良いに決まってるけれど。
「つうか、今までどんなところで生活してたの？」
「あのね、ずっと家にいたんだ」
「そりゃ普通は家を出るまでは家にいるよ。そうじゃなくて、どんなところで生活してたのって訊いてるの。たとえば、どこか山奥の人里離れた場所で暮らしてたとか。狼に育てられたとか」
「狼？」

「学校の友達とかは何も言わないの？」
「学校なんか行ったことないよ。何年も家から出してもらったことないもの」
「えっ、なにそれ？　どういうこと？」
つい質問してしまい、そうして僕は彼女の身の上について聞くことになってしまった。
彼女の、時間をかけたわりにはあまり要領を得ない話をまとめると、サオリの年齢は僕と同じ。両親は居ないのだそうだ。彼女は死別してしまったと聞かされているけれど、あまりにも小さかったので定かではない。保護者を失った彼女は養子として親戚の家に引き取られた。しかし、家の主人はまだ年端もいかないうちから彼女を家に閉じ込めて、この歳になるまでずっと、学校どころか、外出さえほとんどさせてもらえずに過ごしてきたのだと言う。部屋には頑丈な鍵までついていた。
「なんでそこまでして閉じ込められてるの？」
「小さいときは体が弱かったから、怪我しないようにだって」
「それにしたってやりすぎ。不自然だと思う。なんかその人おかしいんじゃないの？」
「えーっ、そんなことないと思うけど、退屈してると遊んでくれたし……」
「遊びって、ずっと家の中にいたんでしょ。どんなことしてもらってたの？」
「えーと、そうだね、そういえば、義父さんは昔っからえっちがすごい大好きだったよ」
「あ……そうなの……」

「別に変じゃないでしょう？　あのね、すると義父さん喜んでくれたのはたとえば……」
「いや、もう大体解ったからいいよ。そんな詳しく聞きたくないから」
なんかいやな話だな。うかつに訊くと僕のほうがなんだか傷ついてしまいそうだ。その時点で、僕は人の身の上話を気軽に尋ねてしまったことを後悔しはじめたけど、かといってここでやめるわけにもいかない。話の先を促す。
「あのね……」
彼女の話はたどたどしいが、話の要点から推測すると、そんな生活が、数字にするとどうも十年以上続いたらしい。十年と簡単に言うけれど、同じ状況がずっと継続すると考えるならばそれは気が遠くなるほど長い数字だ。いかにサオリが従順で大人しい性格だったとしても、さすがに退屈を感じていたようだ。少し前から外の世界を見たいと思いはじめた。そうして彼女は養父が鍵をかけ忘れたときに家から逃げた。それがつい二ヶ月前の話。
そして街をあてもなく歩いてみたけれど、世間のことなんか知らないし、ましてやお金の稼ぎ方など見当もつかない。すぐに行き詰まって街で途方にくれていると男に声をかけられ、ついていったら酒を生まれて初めて飲まされて眠くなり、その間に乱暴をされた。翌日安ホテルで目が覚めるとベッドの上にお金が置かれている。初めて自分の力でお金を手に入れた彼女は、こんなことでお金が貰えるのか、これなら自分にも出来ると、それから体を売って生活しているのだと言う。

サオリは以上の事柄を実に屈託なく話した。
義父のこともそうだけど、全般的に自分の身の上についてあまりにも自覚がなさすぎる。世間から隔離されて特殊な人に育てられたら誰しもこんなふうに育ってしまうのだろうか。素直なのは確かに美徳かもしれない。しかし、そのせいで彼女はこんな薄汚い場所で春をひさいで生活するような事態になっているのだ。率直に言って彼女のこれまでの人生は無知につけ込まれて好き放題食い物にされたことの連続だ。世間ではそれなりに聞く話だとはいえ、こうして目の当たりにすると衝撃を受けてしまう。実に胸が痛い。なんでそんなことされるのだろう。心が腐る。聞かなきゃ良かったと思う。
「どうしたの？」
彼女は黙り込んでしまった僕の目をのぞき込む。
どうしたもこうしたも、きみの話を聞いて僕は悪い食べ物を呑み込んでしまったが吐くに吐けないような気持ちだ。
「お腹とか痛いの？　大丈夫？」
心配そうに言うサオリ。いや、心配なのはきみだと思う。
「そんなんじゃないよ。平気。それより、これからどうするとか決めてるの？」
「しばらく表でいろんなもの見て、満足したら家に帰るよ。ちょっと外を見てみたかっただけだしね。義父さんも怒ってる筈だから」

「え？　帰るの？　せっかく出てきたのに？」
「だって、家には帰らないといけないって決まってるじゃない。そんなの常識じゃん」
「でも、そんな酷いことされたんでしょ、なんで？」
「ん、酷いことってなに？」
サオリは不思議そうに首をかしげている。
「解んないのか。それにしたって、きみって物事を辛いとか苦しいとか思わないんだね」
「え、そりゃ、嫌なことはいっぱいあるけど、でも生きるっていいことばかりじゃなくて悪いこともあって、それが普通だって聞いたよ？」
「確かにそれはそうなんだけど……」
ものには限度がある。
帰ったらどうせまた義父にあんなことやそんなことされるんでしょう。サオリは小さい頃から慣らされてるからそれが当たり前だと思って素直に受け入れてる。それが普段からの習慣的な日常だったら特別辛くもないんだろう。もしかしたら意外と幸福だったりするのかな。義父さんとやらは、こんな美少女を好き勝手にしている。しかも本人も疑問を感じないなんでも言うこと聞く子に育ってしまい、さぞ満足だろう。
義父という人がどんな人だか知らないけれど、全部その人の思いのままじゃないか。やきもきするなあ。人の人生を肉体をおもちゃにしてるなんて僕には納得がいかない。ああ、

でもそれは僕の偏見で、もしかしたら、性癖の部分をのぞけば結構いい人なのかもしれない。だって、普通に育ててもこんなに明るく成長するとは限らないものなあ。悪意や下心を浴びせかけられながら育ったらもっと屈折するものだろう。いや、今のサオリの印象は充分おかしいけれど、そういう意味ではなく、それとはまた違う感じになるような。

とにかく、僕には理解が出来ない。解らない。ただ不愉快だった。

「また黙り込んじゃって、どうしたの？」

サオリは僕を心配そうに見つめる。

「大丈夫、なんでもない。ついでにもう一つ訊いてもいいかな？」

「いいよ、なんでも訊いてよ。私、質問されるの好きなんだ」

「あのさ、きみ将来の夢とかあるの？」

彼女は満面に笑みを浮かべて、

「私の夢はね、お嫁さん。結婚してずっと幸せに暮らすんだ」

無邪気に言った。彼女がウェディングドレスを着ている姿を想像しかけて、さぞかし似合うだろうと思ったけれど、それは今考えることではない。

「え、誰と？　義父さんと？」

僕はさらに訊いた。

「あはは、何言ってるの。家族と結婚なんか出来るわけないじゃない」

まあそうなんだけどね。でもサオリだからあるいはと思って。それに普通は、家族とセックスなんかもしないと思う。それとも、案外普通なのかな。そんなの言わないだけで、結構当たり前にやってるものなのかな。当たり前なら、僕のほうが変なのかな。そんなこと他人と話したことがないから確信が持てない。サオリと話してると僕のほうが変になりそう。変なのは彼女の筈だ。

それにしたって、彼女は家に閉じ込められたまま誰を相手に結婚するつもりなんだろうか。このままで行ったら誰とも結婚なんか出来るわけないじゃない。

きっと、あまりリアルに考えていないのだろう。漠然と、結婚したらなんとなく幸福になれると思ってるんだ。おとぎ話のハッピーエンドは大抵結婚で終わるし。具体的で現実的な幸福を想像することが出来ない小さい子供なんかも、よくお嫁さんになりたいとか無邪気に言ってるね、そういえば。それと同じなんだろう。ただなんとなく幸福になりたいだけで何が自分の幸福だか解らないのかな。

なんだかなあ。

僕が投げやりに「それは良い夢だね」と言うと、彼女は嬉しそうに「そうでしょ」と言い、そして屈託のない顔で笑った。僕はいたたまれなくなって、視線を彼女の顔から外して大きく息を吐いた。

いつの間にか雨が止んでいて、蝉が鳴きはじめている。

尿意に目を覚ますと夜中だった。僕は部屋を出て、ひんやりした廊下を足の裏で感じながらトイレに向かう。途中、姉の部屋の前を通ると内側から声がするのに気がつく。聞いたこともないおかしな声で、悲鳴だか唸っているのだかわからない。初めそれが人の声だとは思わなかったほどだ。僕は前に見た幽霊のテレビ番組を思い出した。寝ている間に幽霊が、生きている人間から精気を吸って、やつれさせてしまうのだ。

ドアがほんの少しだけ開いていたので、姉の様子が気になってそっと隙間からのぞいた。幽霊は怖かったけれど、姉を守らなければいけないという義務感のほうが強かった。男の子は勇気を出さなければいけないと教わっている。僕はそれを思い出して勇気を振り絞った。

しかし、そこに居たのは幽霊ではなかった。薄暗いベッドの上に父の裸の背中が見えた。その父の下にやはり服をまとわぬ姉がいて、足を腕を父に絡みつかせている。声は姉の口からもれているらしい。ベッドのきしむ音が聞こえる。

それは父と姉との情交の場面だったのだけれど、そのとき僕はほんの小さな子供で、自分がいま見たものを理解出来なかった。ただ姉や父の様子が普段とは全く違っていて、異様なものを見てしまったと、フィルムが感光するように光景だけが強く脳裏に焼きついた。

姉は口うるさいけれど綺麗で、僕にとっては面倒見が良くて、世間では誰からも誉めら

れる立派な女性だった。僕はそんな姉が大好きだった。いつか結婚してお嫁にいってしまうと聞かされていたけれど、それは想像もつかないずっと先のことだと思っていた。でも結果から言うと、姉と別れる日は思っていたよりも早くやってきてしまう。それはお嫁にいってしまったわけではないのだけれど。そのことについてはもう少しあとで話そう。

とにかく、普段の優等生の姉のイメージと、その夜見てしまった姿はあまりに食い違っていて、僕は混乱してしまった。そうでなくても、女の子は裸をとても恥ずかしがって隠すものだし、それを勝手に見たり興味を持ちすぎるのはいけないことだと教わるような年頃で、僕は言われた通りそう信じていた。今でも心のどこかでそう思い込んでいて、これがかなり問題になっている。当時は尚更だ。見せても平気なのは何も知らない小さい女の子だけで、大人の女性は肌を隠すものだと思っていた。姉だって、普段はスカートがちょっとめくれただけで真っ赤になってしまう。それなのに。

そのとき僕はセックスの意味さえ知らなかった。そして、父と娘でそれをするのがどういう意味になるかも解らなかった。でもそれは歳をとるにつれて理解してしまうもので、数年後に当然のなりゆきとして僕は気がついてしまう。そして解ってしまうと、その事実は忘れられない、より一層強い記憶になってしまった。

あれからずいぶん年月が過ぎた今でも、二人の息遣いや動作の細やかな部分まで鮮明に再現出来る。その風景のうち幾分かはあとになって想像で付け足したものだろうが、いず

れにせよおぞましくて不快なイメージで、時には夢で見てうなされさえする。なんで当人でもない僕が勝手に苦しんでるのかと思うと滑稽だが。

いくら想像しても僕には本人たちの気持ちは解らない。よくそんなことが出来るなと、気持ち悪く感じる。僕には思いもよらない事情や喜びが存在するのかもしれないけれど、しかし、たとえば想像の手がかりとして、自分の立場に置き換えて母親とセックスする場面を想像しても気色悪いとしか感じられない。想像してしまったことさえ不快になる。姉もその不快さを感じながら、しかし父には逆らえず、といったごく当たり前の風景を僕は想像している。真実は知らないけれど。

もちろん、この事実を明らかにして父に問い詰めるなんてことはしていない。僕は誰にも話さずに知らぬふりをしている。だから、父は僕の目の前では、もちろん当たり前に立派な父親を振る舞っている。ただ、それを見る僕の心境は複雑だ。あんた娘を抱いてた男じゃないか、気持ち悪い人だな、よく平気で毎日笑ったり食べたりゴルフに行って日焼けしたり出来るな、と思う。その父と夫婦でいられる母も気持ち悪い。そりゃ母は知らないのかもしれないけど、こんな父を好きになって結婚するなんておかしいよ。そして僕はその二人の子供で、知りながらも父を糾弾することもなく、当たり前の顔をして一緒に暮らしているのだから、これもやはり真っ当ではないんだろう。そして、もう一人の子供の姉は今家に居ない。僕は姉が好きだから、父に強制されたのだとか、そんなやむにやまれぬ

事情があって姉はそんなことをしていたのだろうと推測しているけど、根拠もなく思い込んでるだけだから、あるいは実際は姉も楽しんでその行為をしていたのかもしれない。それなら姉も同罪だ。気分が悪い想像だが、もしそうだったら僕のまわりは異常なものばかりで、綺麗なものなんか全然ないのだなと思う。
そんなことを考えながら、テレビが流す野球のナイトゲーム中継を眺めていた。野球は好きではないが、なんだか夏の日常っぽくて良いと思う。そしてバスルームから、シャワーの音が幽かに聞こえてくる。父はずっと前から海外に出張してるし、母は先週から友達とのつきあいで旅行に行っているから、いまこの家で生活しているのは僕一人だ。そしてシャワーを使っているのはサオリ。
僕が姉のことなど思い出してしまったのは、彼女が居るからだろう。あのまま置いていったら、また三千円で客を取りはじめそうな気がして、僕はなんとなく誘ってしまったのだ。そんなことしたって一時しのぎにしかならないのだとは解っていたけれど。
やがてサオリが風呂から出てきた。僕が出してあげたジャージとTシャツを身につけている。肌がピンク色に火照っている。
誘っておいてなんだけど、この子はこんな簡単に見知らぬ男の家に来ていいのだろうか。あんまり警戒心がなさすぎて心配になってしまう。この子はおそらくこんな感じでついていった変な男に乱暴されてしまい、そして今みたいな状況になっている筈なのに少しも学

習していない。鼻歌など歌って「お腹がすいた」とか言っている。これから先大丈夫なんだろうか。誰かまともな人が彼女を導いてやらなければいけない。僕以外の。
「なんか、下着がなくてスースーするよ」
サオリは眉をひそめて言う。彼女の持っていた服は全部洗濯機に入っている。女物の下着は家を探せば母のがあると思うけれど、母の下着を物色する気にはなれなかったので、直接服を着てもらっている。だからちょっと我慢してもらいたい。
それはともかく、下着がないとかスースーするとか、いちいち報告するのも良くないと思った。元々ゆるめの良心のタガしか持ってない人間だったら、こんなこと言われたら理性を失うきっかけに充分なりうる。僕はそのあたりを説教したくなる気持ちをぐっと抑えながら、
「食事用意しといたから、そこ座ってよ」
僕は、あり合わせの野菜で作ったサラダとスープを出した。そして食事が終わると、部屋に案内した。
「これ、誰の部屋なの？　女の子の部屋？」
部屋に入ると、サオリは目を丸くして、僕に尋ねた。
「オレの姉さんの部屋」

正確には、姉が帰ってきたときのために用意してある部屋だった。ベッドや本棚などの調度は姉が居なくなってしまうまで使っていたものをそのまま配置している。CDラックにはクラシックや、姉がいた当時に流行っていた曲が並んでいる。机にはだいぶ色あせた学校の集合写真が立てかけてある。
「お姉さんの部屋、勝手に使っちゃっていいの？」
「いいよ、今は使ってないから。多分もう使わないと思うし。家に居ないんだ」
「もしかして、結婚しちゃったの？」
「そんなもんかな」
「いいなあ、うらやましいなあ」
本当は結婚とは少し、いや大いに違うが、話せば長くなるし人に話すようなことでもないので僕は黙っていた。姉はいま何をしているのだろうな。元気なんだろうか。
「お姉さんの名前なんていうの？」
「理紗」
「どういう字を書くの？」
携帯電話で字を表示して見せると、サオリは難しい字だね、と言った。
サオリをそこに残して、僕は自分の部屋に戻った。まだ眠るには少し早い時間だ。親が居ない間に女の子を連れ込むだなんて、話だけ聞くとずいぶん楽しそうだな。実際楽しけ

れば良かったのだけれど。複雑な境遇を持った彼女に、安易に関わってしまってこれで良かったのか、僕は自分の軽薄さを思った。あのままじゃいけないとは思うが、かといって僕に何が出来るというのだろう。

なんだか落ち着かず、僕は今日病院で処方された薬を机の上に取り出し、新しく追加された錠剤の成分を調べることにした。落ち着かないときに勉強だとか調べ物をするのは好きだ。薬の説明書を見ると、強力だとだけは知っている錠剤が追加されている。主成分はクロルプロマジンだそうだ。

効用が強いなら副作用も強いのだろうけれど、そこで副作用の欄を見て気になったのは手の震えという記載。以前別の薬でこの作用が出た。口の中が乾くとか、かゆみが出るとか、そういった副作用のほうが肉体的には辛いけれど、この副作用は精神的に辛い。その時はクーラーが強すぎるのかと思い、冷房を止めてみたが、いつまで経っても止まらなかった。肌には汗がうっすらとにじみはじめて、いくらなんでも寒いはずがないと気がつく。手に持った鉛筆がふるふるしていた。

ほら、映画とかテレビで見るからに物語の悲惨シーン担当の薄汚い衣装を身につけた俳優が手の震える演技をしていたりするでしょう。あんな感じ。手が震えてどうしようもない。ヤク中そのまんまだな。ついに僕も来るところまで来たなと一人で笑ってしまった。まるで夢みたい。もちろん悪夢だけど。

副作用なんか出るなら出ればいい。どうせ飲まなきゃならないのだ。グラスに水を汲んできて、飲み込んだ。そしてベッドに横になり、目をつむる。せめて楽しい夢が見られたらいいなと意識を失いかけたところで、ドアがノックされる。

ドアを開けると、サオリが眠れないと言って部屋に入ってきた。髪の毛からシャンプーの香りがする。眠れないくらい、子供じゃないんだから一人でなんとかしなよ、と、僕は自分を棚に上げて言ってみた。

「でも、はじめての家だし、人のものがいっぱいある部屋だとなんだか落ち着かないんだもん。眠れないとなんだか怖くて」

その気持ちは身に染みて理解出来たので、僕はベッドに彼女の座るスペースを空けた。それから僕らは雑談などをしたらしい。僕は薬で参ってしまってあまりよく覚えていないのだ。

そして翌朝、目覚めてしばらくは薬が残って意識が朦朧としていた。布団の中に邪魔くさいものがあって、それはつまり昨夜話したまま同衾してしまったサオリだったんだけど、そんな事情はすっかり忘れていたものだから、なんだこりゃと思った僕は寝ぼけた頭のまま、まさぐりにまさぐり、さわりにさわり、どうも良い匂いだな、それに「あ、あん、うー」と、か細い声がする、妙な話だと思っていたら、女の子が目の前にいて驚愕。僕は目が覚めて、血の気が引いてしまう。まず思ったのは、僕は知らないうちに誰かを口説いて

しまったのか。そしてベッドに連れ込むなんて、破廉恥にもほどがある。やたらめったら女性に手を出すなんて。しかし、そんな最悪の事態ではなく、徐々に昨日のサオリを思い出して、僕はほっとした。

いまさわってしまったことについて、焦って弁解したのだけれど、彼女は動じず「ん、そうなの？」と言った。「そうなの。気づかなかったとはいえ、ごめん」「いいよ別に」「良くないよ駄目だよ」「うん？　気にしないでいいよ」あんまり彼女が普通だから、僕のほうが真剣、というか気になってしまって、

「なんで平気にしてるの。言おうと思ってたんだけど、きみそんなんだからいけないんだよ。あのね、女の子っていうのは……」

意を決して説教をはじめたのだけれど、サオリはそのまま寝てしまった。ため息をつく。僕だってもう少し眠りたかったが、手足を伸ばしてベッドを占領しているサオリに密着して横になるのも躊躇われたので部屋を出た。まだ朝は早い。やたらと喉が渇いていたので冷蔵庫の中のよく冷えた麦茶を飲んだ。一晩経ったせいか昨日よりはだいぶん冷静になっていた。薬の安静作用も働いているのかもしれない。

昨日は身の上話を聞かされて共感しすぎていたので、何も出来ないかもしれないけれどなんとかしなくちゃいけないそれは自分だろうきっと、などと変な使命感にかられて勢いで家に連れてきてしまった。しかし、よく考えればそんなことしてはいけなかったと今な

らはっきり結論出来る。第一、僕みたいな親のすねをかじりながら学校に通っている半病人に出来ることなぞたかがしれてる。なんとかしてあげたいのは確かだけれど、なんにも出来ないのも確かだ。

部屋に戻るとサオリは僕の居なくなったスペースを一人で大胆に占領して、穏やかな顔で寝ている。さっき起こしてから時間は過ぎていないのに、すぐに平和に眠れてうらやましい。僕もこれくらい簡単に眠りにつければもっと明るく生きていけるのに。

椅子に座って窓から差し込む光のカーテンの下で、白い布団を子供みたいに強く抱きしめて寝ているサオリの顔を眺める。こうしていると本当に無垢で清潔で美しくて、世の中の様々な幸福を享受しているか、そうでなかったなら今すぐそうなるべき権利のある選ばれた人間のように思える。つうか、天使みたい。いやホントに。

そして僕は暗くなる。この美しい少女は、いずれは閉ざされた家に性的な玩具として扱われるために戻っていくのだろうなあ。こんなに綺麗なのに誰の目にも触れることなく、部屋に閉じ込められたまま人生そのものを個人の慰みものとして終わらせてしまうのだろうか。もっと多くの人の目に触れていかないと勿体ないのではないだろうか。なんだか不合理だな。可哀想だなと思う。こんなとき、真っ当な人間だったら彼女を解放しようとするのが普通ではないだろうか。しかし僕は真っ当な人間ではない半人前なのだ。

考えていると胸が痛くなってきたので僕は椅子を立った。僕に必要なのはドラマとか情

熱ではなくて、規則正しい生活と、栄養バランスのとれた食事なんだ。自制しなければいけない。

サオリが起きたら一緒に楽しく朝食を食べて、そしてさりげない笑顔で彼女を自分の人生に送り返してあげよう。僕も自分の生活に帰る。寝ているサオリの頭を少しだけ撫でさせてもらうと、朝食の準備に立ち上がった。せめて美味しい朝食を作ってあげよう。

気合いを入れて冷蔵庫の食材を調べていると電話が鳴った。こんな朝早くに、いやな相手だったら取らないでやろうとリビングに設置してあるその電話の液晶モニターを見たら、その表示に僕は驚いた。そしてすぐに受話器を取った。緊張で喉がこわばる。受話器を持つ手が震える。相手は沈黙したままで、幽かに呼吸が聞こえる。一度唾液を飲み込んで気持ちをほぐし、そして僕はこう言った。

「ねえ、姉さん？　姉さんなの？」

CHAPTER－2

駅の周辺はすっかり様変わりしていて、まるで知らない街に来た感があったけれど、少し離れて住宅街までやって来ると、そこは記憶とさほど変わらない風景で安心することが出来た。思えば僕がこの街を出てからもう七年になる。

子供時代の思い出に浸りながら街を歩き、坂を上り、そうしてたどり着いた僕の家は記憶と比べてすっかり古くなっていた。人の住まない家はすぐ老朽化してしまうと言うけれど、確かにまわりの建物と比べると目立ってくたびれていて、なんだか家が可哀想だ。

合い鍵で玄関のドアを開け、中に入ると、埃が白く積もった廊下には最近のものと思われる人の足跡があり、スリッパが揃えてある。これはまだこの家に家族みんなが住んでいた頃、姉が専用にしていたスリッパだ。

僕は土足のまま家に上がり込み、リビングルームに入る。家の中は空気が停滞していてサウナのように蒸している。テーブルの上に目立つように電話が置いてあって、その脇には母の筆跡で書き置きがあった。

姉へ向けて、僕たちが今の街に引っ越した旨と、電話番号が記してある。もし姉が何かの理由でこの場所に帰ってきたとしたら、すぐさま連絡がつくようにとの母の配慮だ。用

がなくなってもこの家を処分せず、子供のときからの隠し場所には今でも合い鍵が置いてあり、電話も電気もまだ生きているのもそのためだ。東京大空襲とか広島原爆とかを題材にした映画で、被災した家族が疎開するときに家の焼け跡に家族あての張り紙をするシーンがあったのを連想させる。ただの哀しい気休めにすぎないのではと思っていたけれど、どうやらその配慮は役に立ったようだ。今朝、姉はここから電話をかけてきたんだ。

「姉さん？」

そう電話口で僕は言ったが、沈黙しか返ってこなかった。構わず僕は洋一だと名乗り、重ねてもう一度姉かと尋ねた。

「あなた、洋一なの？」

返ってきた声は記憶よりも潤いを帯びて大人っぽくなっていたが、それは間違いなく姉だった。僕はため息をついた。

「声変わりしてて誰かと思ったよ。元気なの？」

僕に尋ねる姉の言葉に、僕は元気だと言った。

「私も元気だよ。ごめんね、迷惑かけちゃって。大変だったでしょう」

そんなことはないと僕は返した。

そして僕はいくつか尋ねたけれど、姉は言葉を濁してあまり多くを語らなかった。

「みんながどうなってるか、気にかかってて。それでちょっと見に来たら、うちがそのま

まだったから懐かしくなったの」
「懐かしいなら帰ってくればいいじゃん」
「そういうわけにもいかないんだ。でも、洋一と話せて良かった。じゃあね」
「ちょっと待ってよ、理紗」
「こら、お姉ちゃんを呼び捨てにしないの」姉は少し怒ってみせて「じゃあ、元気でね」電話は切れる。
それが今日の朝の電話の内容。あまりに唐突で、通話が終わったあともちょっと信じられずにしばし呆然とした。だから、本当に姉からの電話だったと、それを実感したくてここまでやって来た。それにもしかしたら、姉に会えるかもしれない。この家の電話をいじると、発信履歴には、六時二十四分発信と記録されている。確かに今朝の僕との通話だった。やはり姉はここに来たのだ。
掃除などずっとしていなかったものだから、すっかり死んだようになってしまった部屋の中を見回すと、姉の痕跡が目につく。テーブルの上には姉の手が触れた跡があるし、他にも部屋の色々なものをさわり、あちこちを歩き回ったらしいことが、家具や床に降り積もった埃の乱れから想像出来た。
当時姉がよく弾いていて、それを見ていた僕がどうしても同じことがしたくなって練習したあのピアノにも手を触れた跡がある。僕は結構上手くなったのだけれど、姉が居なく

なるとやる気がなくなってしまった。母が居ないときは姉が料理を作ってくれて、向かい合って食べていた。そのときのままのテーブルクロス。姉は洋食ばかり作るので和食が好きだった僕はいつも文句を言っていた。

そんな具合に、見るものにいちいち昔の思い出を重ねながら、久しぶりに家の中を見て回った。ほとんどの家具は新しい家に持ち去っていたので、どの部屋も空っぽになっている。そのいずれにも人の立ち入った痕跡があるのは、おそらく姉だろう。姉もここへ来て、やっぱり懐かしかったのだろう。

そして、二階の廊下に上がったところで、指一本分くらいの穴が穿たれているのが目に入る。その正面にあるドアもやはり鍵の部分が破損している。これは、姉が居なくなるきっかけとなった事件のときに出来たものだと聞いている。ここで拳銃が使われ、その銃弾で破損したらしい。

そうなのだ、僕の姉は結婚して出ていったわけではない。男と逃げていったのだ。駆け落ちと言えば綺麗かもしれない。でも、実情はもう少し陰惨なものだ。

相手は姉の小さい頃からの知り合いで同じ学校の生徒、と、ここまではまだ平凡な説明だけれど、この事件の前に姉の学校で殺人事件があって、その容疑者として警察に逮捕されていたのだというから尋常ではない。要するに殺人犯だ。警察から逃げ出して姉を頼り、そして二人で逃げていったらしい。そのときこの家で二人で何日か生活し、その間にいろ

いろあった。その「いろいろ」の過程でこの銃痕も出来たのだという。ちょっと突飛すぎて、にわかには信じがたいけれど。

その男は精神異常だったなどと噂されていたみたいだが、真偽のほどを僕は知らない。あれから七年も過ぎて、今も一緒に居るのだろうか。そうだとしたら、今日ここにも二人で来たのかな。よくテレビドラマでは犯人は必ず現場に舞い戻ると言うけれど、こんなに時間が経ったあとでも適用されるのだろうか。

彼らは今どんな気持ちでいるのだろう。名探偵明智小五郎よろしく二人の内面を想像しようとしたが、あまりうまくいかない。

情報が足りないのだ。考えてみるとそもそも僕は事件についてそれほど詳しくはない。事件のとき僕は実家に帰省していたし、状況が一段落ついてからも、まだ幼かった僕に事情を詳しく説明してくれる人は居なかった。ただ姉が居なくなってしまったことだけを伝えられ、すぐにこの土地から引っ越したんだ。訳が解らず、大声でずっと泣いて、母にたしなめられたのを覚えている。

何故あの優等生の姉がそんなことをしたのだろう。いや、理由は想像出来るが、それが当たっているかどうかはわからない。もし機会を得られるのならば、姉からもっと詳しい話が聞きたいなと思った。でも、人を捜索するなんてしたことがないし、やり方も知らない。警察に今日電話があったことを連絡したら、もしかしたら手っ取り早く見つかるだろ

うけれど、どうもその気にもなれない。
密閉された家から出ると外は風が吹いていて、いつの間にか汗で濡れていた首筋を冷たくした。僕はこの長い間姉の事件について調べようとしたことがなかった。正直、心のどこかでもう死んでしまっている気がしていたし、あるいは忘れて過去のことにしたかったのかもしれない。あの夜の父と姉の光景を思い出してしまうのもいやだった。しかし、きっとそれではいけないのだろう。

僕はまず図書館に行って、当時の新聞を調べた。地方紙ではあったが、存外詳細に書かれているところを見ると、事件はそれなりに注目されていたのだろう。全国紙にも記事が載っていたが、それほどは詳しくない。
警察が通報を受けてその家に駆けつけると、三人の若い女性を発見。現場から消えた容疑者は若い男女の二人組。そんなセンセーショナルな書き出しで、記事の一つは始まっていた。
姉の相手は木村学（きむらまなぶ）というらしい。名前は聞いた記憶がある。記事によると彼は成績は良いけれど陰気であまり目立たないタイプの生徒。校舎の屋上で同じ学校の三沢友昭（みさわともあき）が頸部を切り裂かれた死体となって発見されたとき、現場に血に汚れた姿で居るのを生徒に目撃され、通報を受けてやってきた警察に逮捕された。凶器のナイフから木村の指紋が見つか

り、殺人容疑がかけられる。
　木村は以前から上級生である三沢にいじめを受けていたらしく、その報復が殺害の動機になったと推測されたが、取り調べにおける態度が不明瞭で事情がはっきりしない。精神鑑定を受ける手はずになっていたのだけれど、しかし鑑定結果が出る前に木村の乗り合わせたパトカーが事故を起こし、彼は逃走してしまったので結局のところ何も明らかにはならなかった。
　この精神鑑定のくだりから彼が精神に異常があると噂されるようになったのだろう。ついでに、その三沢の殺害現場で同じく気絶したまま発見されたのが、この事件において木村とともに行方不明になっている少女、というから姉のことだ。こんな事件にも関わっていたなんて僕は知らなかった。
　警察から逃げた木村は姉のところへやって来た。姉と出会い、それからすぐ二人で逃げたのかといえばそうではなく、木村は祭りで賑わう街に繰り出し、やはり同じ学校に通う女子生徒を拉致して家に監禁して暴行を加える。被害者の生徒は木村の上級生で三沢と一緒にいじめに参加していた女性らしい。それから、偶然家に訪問した婦人警察官を捕らえ、彼女にも暴行を行った。
　ここで書かれている暴行というのは、はっきりとは表現されていないが記事の微妙なニュアンスからすると性的なものだろう。もし恋人同士だったとしたら、姉はそんなことに

まで協力したのだろうか。木村学もやることがメチャクチャだけど、それを受け入れる姉も正常とは思えない。

その現場を、姉の友人が訪ねたらしい。名前は新聞には記載されてなかったけれど、確かこの人はワタライなんとかって人だったと記憶している。姉が家でもよく口にしていた名前だ。木村はワタライさんに向けて警察から奪った銃を発砲し、姉を引きずるようにして逃げていった。銃弾は彼女に当たらなかったが、かわりに床に穴が空いた。その銃声を不審に思った付近の住民が警察に通報して、駆けつけた警察が見た光景が、さきほどの記事の書き出しに繋がる。その家には女性が三名。

翌日警察は警戒線を張ったが結局捕まえることが出来ず、あとになって二人の目撃情報も出るには出たがどれも逮捕には結びつかなかった。

精神に異常があるかもしれない殺人犯と、その幼馴染みで評判の良い美しい少女との、若い二人の過ちと明日なき逃走劇。そんなロマンチックな雰囲気がある事件だと、まさか新聞に直接書いているわけではないけれど、文脈の裏側では匂わせている。

とにかく、これなら小学生だった僕に当時誰も詳しい説明をしなかったのはよく解る。確かにちょっと小学生にはハードな内容で、教育上よろしくないし、たとえ説明されたとしても半分も理解出来なかったろう。

それにしたって、まさかあの家に女の人を閉じ込めてなんちゃらとまでは知らなかった。

当時、家の中に幽かに残った血の汚れを見つけてははしゃいでいたのを覚えている。知らなかったとはいえ子供とは恐ろしいものだ。それにしても、これだけのことをした男によく姉はついていったものだ。僕には解らないけれど、もしかしたらそれが愛なのかしら。

記事をあらかた読み終えてしまっても、まだ日は明るかった。僕はついでだから姉が当時通っていた、そしてまた三沢殺害の現場でもある学校に行った。バスで十分ほど揺られると到着した。

敷地に足を踏み入れると正面に校舎が見える。このあたりでは優れた進学校だという話で、建物は古いが全体のたたずまいにもそれらしい雰囲気がある、ような気がする。そんな目で見てるからそう感じるのかもしれない。荘厳で厳粛で、確かに殺人の現場としてはふさわしい、ような気もする。これは確実にそんな目で見ているからそう感じるのだろう。

そうした僕のミステリーじみた想像とは無関係に、ユニフォームを着た生徒が爽やかな声を掛け合ってグラウンドでスポーツをしている。それを横目で見ながら僕は校舎へ歩いていたのだけれど、足下にボールが転がってくる。拾い上げると、ソフトボールで使用するボールだった。

「すいませーん、大丈夫でしたか？」

Tシャツにグローブと帽子といったスポーティな格好の女の子がこちらに向かって言ってる。足元はスパイクを履いている。

「ソフトボール部？　夏休みだっていうのに運動部は大変だね」
言いながら、僕は拾って女の子にボールを放り投げた。彼女はグローブを慣れた手つきで扱いボールをキャッチすると、
「大会があるんですよ。だからみんな張り切ってて」
「そう、頑張ってね」
「ありがとうございました」
「あ、ちょっといいかな」
立ち去ろうとするその子を呼び止めて僕は名乗り、この学校で七年前に起きた殺人事件、つまり三沢が殺されたあの事件について何か知っているか訊いてみた。
「あー、なんか、子供のとき聞いたことありますけど、それって本当の話なんですか」
「そうだって話だけれど。結構前の話だし、やっぱり知らないかな。オレ、今ちょっと調べてるんだけれど」
「どうしてそんなこと調べてるんですか？」
「いや、ほら、大学のレポートとかそういったものが関係しないこともないらしいよ」
関係者の家族だと話すのも気がすすまなかったので、つい嘘を言ってしまった。
「うーん、わからないですね。そうだ、友達に訊いてみて、詳しく知ってる人がいたら連絡しますよ」

「いや、そこまでしてくれなくても良いけど」

「遠慮しないでください」

彼女の好意に甘えることにした。僕は手帳に電話番号を書きそれを切り離して渡す。別れを告げて歩き出すと、後ろで、多分ソフトボール部のメンバーがきゃあきゃあ騒ぐのが聞こえる。どこの学校でも女子って同じ感じなんだな。

勝手に校舎に入り込み、すれ違う教員に私服を注意されるたび内心ドキドキしながら笑って誤魔化し、閉館間際の図書室に向かう。目的は卒業生名簿。姉が卒業する筈だった年を調べて、渡会泉（わたらいいずみ）という名前を発見。多分これが姉の友達で、事件にも関係していたワタライとかって人だろう。卒業アルバムを見ると、一人だけつまらなそうにカメラを見つめているのが目につく。僕は手帳に彼女の住所と電話番号を写し取る。

それから、出来れば被害者の一人で、木村学をいじめていた上級生というのも調べたかったけれど、こちらは名字さえ聞いた記憶がない。卒業アルバムを眺めて顔つきでそれらしい人を探したが、いくらなんでも見つかるはずもなく、閉館の時刻となる。帰る前に殺人事件の現場となった屋上を見ておきたいと思ったがドアが施錠されていて入れず、諦めて学校を出た。

思ったより早く学校での用事が済んでしまったので、その足で卒業生名簿に記された通りの場所を訪ねた。引っ越していたらどうしようかと考えていたが、果たして渡会と表札

のかかった家があった。

インターフォンを押すと中年のおばさんが出てくる。僕は名前を告げ泉さんに用があるんですと話すと、彼女は泉さんの母親だと言い、本人は今は居ないのだと言った。東京で一人暮らしをしているらしい。明日か明後日に帰省する予定だから、帰ってきたら伝えてくれるそうだ。

「理紗さん、元気だと良いわねえ。今は、どうしているのかしら。あなたのお姉さんは本当に可愛くて、いい子だったのよ。うちの泉も今でもときどき懐かしそうに理紗さんの話をしてるの。きっと弟さんが来てるって訊いたら喜ぶから、会ってあげてね」

そう渡会さんは言った。

いきなり訪ねてそう簡単に本人と連絡がつくとは思っていなかったので、渡会さんのその申し出は有り難かった。場合によっては、娘を事件に巻き込んだと、怒られてしまうのではないかとさえ想像していたのだ。

渡会さんは話し好きな性格で、そのあと僕は姉や泉さんの昔話を聞かされ、同意を求められたが、当時僕はほんの子供だったので、言われてもほとんど知らないことばかりで、ただ頷くしかなかった。

礼を言って辞去すると、空が暗くなっている。時計を見ると二十時。ここから家に帰ると電車でも一時間半ほどかかる。今日は移動が多かったので、疲労していた。お金は母が

置いていったカードがあるし、この街のどこかで一晩休もうと駅前を歩いていたら携帯電話が鳴った。公衆電話からの着信だった。

「ヨウイチ？」

誰かと思えば、サオリの不安げな声が受話器から聞こえた。

「そうだけど、どうしたの？」

今朝姉からの電話があったあとに二人で食事をして、当座をしのげそうな少しばかりのお金と、そしてもし何かあったらと僕の携帯電話の番号をメモに書いて渡し、サオリと別れていた。こうして電話してくるところを見ると、さっそく何かあったのだろうか。サオリのせっぱ詰まった声の感じからすると、どうもそんな気配がある。

「よかった、繋がった。私サオリだよ」

「うん、声でわかる。何かあったの？」

「あのね、なんか怖いの」

「怖い？」

彼女はあれから昼を散歩して過ごし、夜になってから神社に帰ったのだけれど、持ち物が荒らされていたのだという。そして、普段誰もいない筈の神社なのに何者かがいて、ひそひそと話し声を立てている。気になって顔を出したら、三人ほど男がいて彼女と目が合うと追いかけてきた。普段ならなんとも思わないが、僕に前もって気をつけるよう言われ

ていたものだから、怖くなって、神社を逃げ出してきたのだそうだ。
「ねえ、どうすればいいのかな。あの人たち、何しようとしてるの。ヨウイチ言ってたよね、変な人が来たら怖いことされるから逃げたほうが良いって。あの人たち、変な人なのかな。ヨウイチはどう思う？」
「わからないけれど、逃げたのは正しかったと思うよ。僕に連絡したのも正しい」
「ねえ、私、これから何かされちゃうのかなあ？　どうなるの？」
「そうならないようになんとかしよう。とりあえず、いまはその連中はいないの？」
「わかんない」
「今どこにいるの？」
「よくわからないけど、あのね……」
サオリのたどたどしい説明から場所を想像する。僕の記憶の風景と彼女の話が一致したところで、僕はサオリに駅までの道順を説明する。何度か繰り返し話して彼女がそれを覚えると、駅に到着したらまた僕に電話をかけ直してくれるよう伝えた。言いながら、僕はすでに駅まで歩きはじめている。
切符を買い、改札を通り、ホームに降りたところでサオリから再度の電話。僕はすぐに、といってもここからだと一時間半ほどかかるが、とにかく迎えに行く旨を伝えた。彼女には改札の前にある喫茶店で僕を待つように指示して電話を切る。そして、ホームに滑り込

んできた電車に乗った。
　駅の近くには交番もあるし、人目のあるところならサオリが一人で居ても騒ぎを起こすこともないと思うけれど、でも変な人の思考は僕には解らない。
　それより、深く関わらないつもりでいた自分がこんなに懸命になっているのが不思議だった。でも、今は緊急時だし、これは例外でいいよな、と自分を説得してみる。
　いくら焦っても電車は決まった速度でしか走ってくれないからもどかしい。そわそわしながら一時間以上を過ごし、僕は帰ってきた。そして指定の場所に向かうと、サオリは喫茶店のカウンター席に所在なげに座っていた。僕は安堵のため息をつき、
「待たせたね」
　声をかけると、彼女は振り向いた。
「ごめんなさい、私知ってる人がヨウイチしかいなくて……。普段だったら気にしなかったんだけれど、なんか怖くなっちゃって」
　上目遣いで申し訳なさそうに言った。
「そんなの気にしなくていいよ。こんなこともあるかと思って電話番号渡したんだし。思い出してくれてありがとう。とにかく、もう神社には帰らないほうが良いと思うよ。もしかしたら、変な連中にきみの噂が広まっちゃったんじゃないかな」
「噂？」

そう、おそらくは「すぐやらしてくれる家出女が住んでるんだぜ」みたいな感じで噂されたのだろう。ちょうど、僕が聞いたときのように。

「今日から寝る場所を変えるべきだと思う。もし行く場所がないのなら、今夜はまたうちに泊まる？」

「いいの？」

「いいよいいよ、好きなだけ泊まるといい。どうせ誰もいないしね」

夏休みの間くらいなら、良いかな、と僕は思った。いや、甘いかな、と考え直したが、いまさら訂正も出来ない。

「ありがとう、うれしい」

サオリは、こわばった顔に、少しだけ笑顔を作る。

空が曇っているのか、月も星もない暗い夜だった。駅を離れてしまうと街灯もまばらになって、いよいよ暗い。僕らは寄り添うようにして二人で並んで歩いている。サオリは黙り込んでいる。僕に迷惑をかけてしまったと、気まずい思いをしているのが見て取れたが、僕も僕で考え事をしていたので黙っていた。自分はどういうつもりなんだろうと。

家までの道のりを半ばほどまで来たところで、

「待てよ」

と低い声。僕は待たない。

もしまともな相手だったら、こんな場所でこんな声で人を呼び止めるはずがない。どうせろくでもない相手のろくでもない用件で、相手をしたらろくでもないことをされてしまうに決まっている。そう断定して、振り返ろうとするサオリの手を強く引っ張って走るが、

「きゃ」

十歩も走らないうちにサオリが躓いて転んでしまう。抱き起こしていると足音はすぐ背後まで追いついてくる。

「待てっつってんだろ。そこのお前だっ」

声はますます荒くなる。

「あ、オレに言ってるんだ、気がつかなかったな」

言いながら振り返ると、驚いたことにそこに居たのは見知ったハゼこと広田。

「九条、ふざけるなよ。お前らしかいねえだろ」

必要以上にドスを利かせた声で広田は言った。他に二人の男がいる。広田同様、いずれの人物もいかにもガラが悪い、あるいは頭が悪い、といった服装ならびに態度で薄笑いを浮かべて睨みつけてくる。見るからに暴力が大好きそうな人たちで、歳は僕よりいくつか上だろう。広田が筋のよろしくない連中と付き合って無法な行為を行っているというのは本当の話なんだな、と、なんだか感心してしまった。

「あれ、なんだ広田か。こんな夜中に散歩？　何してんの？」

「お前こそ、なんでその女と居るんだよ。とにかく、その女を渡せよ」
「なんで？」
「お前には関係ないだろ」
「袖振り合うも多生の縁って中学校の頃習わなかったか？　世の中に全く無関係なものってそんなにないんだぜ。関係ないこたないだろ」
「ふざけるなって言ってるだろ」
「ふざけてないよ。あ、そういえば、神社でみかけたのってこの人たち？」
尋ねると、サオリは頷いた。「そうなんだ」僕は彼女を自分の後ろに隠す。
「へえ、しつこく追いかけたり荷物をあさったりする変質者がいたって聞いてたけど、お前らなんだ。男が三人も揃ってずいぶん暇なんだな。もっと有意義なことをしたらどうだ？　駅前の空き缶拾うとか」
「馬鹿にしてんのかお前？」
「馬鹿にされて当然のことしてるって自覚ないのか？」
僕は鼻で笑ってみせた。
「なんだと」
広田の右側にいた男が、一歩前に踏み出す。
「趣味だとしてもあまり誉められたものではないな。もうほっとけよ。だいたい、今まで

好き勝手やってたんだから、もういいんじゃないかな。話は聞いてるんだ。犯罪だよ。でもまあ、これまでのことは黙っておいてあげるから、今日はお引き取り……」
「きゃっ」
サオリが悲鳴を上げたのは、僕が前に出た男に顔を殴られたからだ。まあそうなるだろうなと、警戒していたのでまともには貰わなかったけれど、頬の内側が切れて血の味がする。あまり人に殴られた経験はないのだが、結構何も感じないものだ。それとも僕が興奮しているせいだろうか。気が立っている。むかついている。僕はこういう連中が嫌いだ。男が三人も揃って何をしているんだろう。
「あ、よしてください。こいつ、俺と同じ学校のやつで、きっとチクります」と広田が抑えると「知ったことじゃねえよ、あぁん？」「こんなクソガキになめられて黙ってられるか。ベラベラとご託を並べやがって、コラ」などと言い、二人は頭を傾けて妙な角度をつけて至近距離から僕を睨みつける。
なるほど、これがいわゆるメンチを切るってやつだな。昔のテレビドラマで見たことがある。首を上下させて、まるで会津の名産品赤べコみたいだ。鼻息が顔に触れてあまり気分が良くない。そう思っていると広田が間に割って入り、僕に言う。
「いいか、九条、俺だって普段からお前のすかした態度にはむかついてるんだ。俺がこうして止めてるからって、いい気になるなよ。それに、この女にとっても悪い話じゃねえん

やったんだ。お前が邪魔する必要なんかねえよ」

「なんの仕事だよ？　大体、仕事の話をしにきて、お前は持ち物荒らしたりすんの？」

「うるせえな、そんなことどうだって良いだろ。この乞食女に仕事持ってきてやったんだから、感謝されるのが筋ってもんだ」

「どうせろくでもない仕事だろ」

「アホか、ろくでもある仕事がこいつに出来ると思ってんのか？」

「出来るんじゃねえの」

僕の言葉に、比較的冷静だった広田が急に興奮しはじめ、言った。

「誰もがお前みたいに夢一杯の将来があると思ってんじゃねえぞ。そのどうしようもねえ馬鹿女に出来ることなんか、股使うことしかねえじゃんか？　それが順当なんだよ。お前はなんにも解ってねえんだ。高いところから恵んでやって気分が良いだろうが、どうせそれだけだろ？　いい気になってんじゃねえよ。それとも、この公衆便所と結婚でもする気か？　出来るわけねえよな？　こんな薄汚ねえ女と。怪我したくなかったらさっさと帰ってクソして寝ろ」

「そんないい気でもないけれどな。でも、お前も結構大変なんだな」

広田の言ってる言葉のところどころに彼の実感のようなものを感じてしまったので、思

わず同情してしまった。こんな状況で、いけないな。
「うるせえな、とにかく俺たちに関わるんじゃねえよ。お前のお友達がたくさんいる幸せ一杯テーマパークに帰れよ」
随分と荒んでるんだな、どんな目に遭ったのだろう、と僕は思ったがそれは言わず、
「それならオレこの子と結婚するよ。それでいいだろ？　だからお前ら帰れ。おとなしくするって約束したら結婚式にも呼んでやるから」
そう言った。
「ざけんなっ」
すると、メンチを切っていたうちの一人が叫ぶ。
もう広田も止めない。彼らは殴りかかってきて、あとで追いつくからとサオリを突き飛ばし、走っていくサオリを追いかけようとする男の足にしがみつき、ついでに噛みつくと男は悲鳴を上げる。別の誰かが僕の頭を殴り、僕はしがみついたまま蹴り返すが、しかしすぐに引きはがされて、広田がサオリを追いかけ残り二人は僕を殴りつける。
少し経って「くそ、逃げられちまった」と、帰ってきた頃には僕はすでに抵抗むなしく半殺し。「畜生、邪魔しやがって」と一同が怒り、どうやらこのまま全殺しにされてしまうのかな、と思いかけた頃にサイレンの音。
「警察だぁ」と三人が逃げていったけれど、いやこのサイレンの音は警察と違うでしょう。

ほら、現れたのはパトカーではなく救急車。立ち上がると足下がふらつく。
救急車から降りてきたサオリが言う。「大丈夫？」まあ生きてるよ。「110番したの」いや、きみがプッシュしたのは多分119だと思う。「え、110番って119じゃないの？」違う110。まあ、助かったから良かった。でも間違えたのによく呼べたね、電話でなんて言ったの？「なんか、殴られてる人が居るって言ったの」なるほど、確かにそれなら救急車も来てくれるかも。ありがとう。「あっ、血が出てる」本当だ。

「今は興奮しているから平気だろうけど、時間が経ったらもっと痛くなるから」
そんな医者の不吉な予言通り、家に帰ってしばらくすると尋常でなく体中が痛くなってきた。体が汚れていたのでシャワーを浴びたけれど、勢い良く温水が肌を叩くのがまさに拷問。かといって不潔にしていると怪我に良くなさそうなのでボディソープで体を洗うと、痛すぎてよだれと涙がこぼれた。すごいな、こんなの初めて。さすがに湯船は断念して、半死半生でベッドまでたどり着くとサオリが部屋にやってくる。
「ごめんなさい」
涙ぐんでいる。いや、大丈夫だよ。僕が好きこのんでやったのだから。それより、もしかしたら、お金をたくさん稼げたかもしれない仕事を勝手に断ってごめん。僕がそう言ったのを彼女が聞いているのかどうか、ついにえぐっえぐっと泣き出してしまう。

ホントに平気だからお風呂入っておいで着替えとかは脱衣所に用意してあるから、風邪ひかないようにちゃんと体を拭いてから着るんだよ。下着は相変わらずないけれど。僕は立ち上がって送り出し、そしてまたベッドに倒れ込む。痛くて辛い。

そういえば痛み止めを貰っていたなあと、腹這いになって鞄のところまで移動し、袋を開けると、実際に目にするのは初めてだな、座薬だった。これ、お尻の穴から入れるヤツでしょ。こんなの使ったことがない。お尻の穴から入れるのって、なんだかちょっと恥ずかしいなあ。僕の自尊心が耐えられない。考えた末に結局放り出し、見なかったことにしてみたけれどやはり痛くてたまらず、僕泣き濡れてじっと座薬を見つめる。

背に腹はかえられない。僕はついにそれを手に取り、包装をはがし、ベッドに横になったままズボンをパンツごと膝まで下ろす。そして、おそるおそる肛門に挿入する。変な感じだ。何これ、こんなの初めて。今日二回目。僕は未体験の感覚に怯えながらなんとか最後まで指で押し込む。

思ったより大したことなかった、なせばなる、と、少し誇らしい気持ちになっていたら、スルッと出てきた。入れたはずの座薬が戻ってきた。もう一度トライしてみてもまた出てしまう。そういえばかなり強く押し込まないといけないと聞いたことがある。あと姿勢も重要だとか。どんな姿勢だったか忘れたけれど、とにかく奥まで突っ込めば良いだろうと痛む身を丸めて奮闘していたら、ドアの外に気配。

「ちょっと待って！　入らないでっ！」
いつ以来だか思い出せないほど真剣に叫んでしまった。
「えっ、えっ、どうしたの？　怒ってるの？」
「そうじゃなくて、今ちょっと取り込み中だから、あとで話すから今はちょっと」
僕は突き出した尻の向こうにあるドアに向けて言った。指先では座薬を指先で肛門に押し込んでいる。今ドアが開けられると、ちょっとばかり面白すぎるポーズでサオリを迎えることになってしまう。もしそんな姿を見せたらこの先の人生がかなり困難なものになるだろう。それは避けねばなるまいと、二度と戻ってこないように力強く、そして手早く座薬を押し込んだ。着衣を整えて声をかけると、サオリが部屋に入ってきた。
「怪我、いたい？」
「少しね、でももう大丈夫」
肛門のあたりに異物感を抱えながら人と話すのはなんだか変な感じだ。
少し、熱が出てしまったらしく意識が薄らぐ。僕はサオリに断って、ベッドに横たわった。すると、彼女は僕のシャツをめくって肌を見つめ、
「うわ、痛そう」
と言っている。
僕は少し恥ずかしかったけれども抵抗するだけの気力がなく、なすがままにしている。

もう意識も限界だ。脱力した僕の、痣をさする、サオリの柔らかい手のひらが心地良い。怪我を処置するのを手当というけれど、ただ手を当ててもらっているだけでも癒される気がするもんだ。そんなことを考えていると、そのうち彼女は顔を寄せて、赤い舌と唇で肌を優しく舐めはじめる。さすがに僕はびっくりして起き上がってしまう。腹筋が痛い。
「あっ、痛かった？」
「痛くないけど、そんなことしないでいいよ」
「でも、何か役に立つことしたいんだもん……」
いや動物ではないのだからいきなり傷口を舐めるなどという発想はどうかと思う。
「そんなふうに思ってくれるだけでいいよ」
「あのね、ヨウイチがさっき結婚してくれるって言ってたから、嬉しかったの。だから、ヨウイチのためになにかしてあげたくて」
サオリは恥ずかしそうに言う。僕は困った。
「あ、それは、ほら、そう言ったら相手が納得してくれるかなって思ったから。言葉のあやというか、その場のノリっていうか、なんていうか……」
「嘘なの？」
「うん」
「そっか、でも嬉しかったからいいんだ。あんなの言われたのはじめて」

言葉とは裏腹に、彼女はがっかりした顔で呟く。
「オレも結婚するとか言ったのはじめて。まあでも、全部でたらめってわけでもないよ。さっき考えてたんだけれど、オレは多分サオリを好きだよ」
「えっ？」
「オレ他人のこういうのに関わるの普段なら好きじゃないんだけど、首突っ込んでるってことはそうなんだろうなあと思うんだ。普段だったら多分この状況でも家に来いなんて言わないもの。自分でも今ひとつ信じられないけれど、そうじゃないと説明出来ない」
「え、好きって、私を？」
「うん」
「え……」
あ、真っ赤になった。
「うれしい。私、これからは一生ヨウイチのために生きる。ヨウイチのためだったらなんでもする」
サオリは、喜色を満面に浮かべて、そう言った。
「いや、あの、そこまで盛り上がってくれなくてもいいから。だって、お互いまだよく知らないしね。オレの勘違いかもしれない。ちょっとそう思っただけなんだ」
「でも、ヨウイチ私のせいでこんな怪我しちゃったもの。それは本当だよね。ねえ、私に

何が出来るかな」
「それなら、立派に成長して幸福になってよ。それが嬉しいなあ」
「そうじゃなくて、いま何かしたいの」
「特にないな」
「でも……」
サオリが黙り込むと部屋は静かになる。お腹に触れているサオリの手のひらの体温がなんだか落ち着く。目を閉じると、薬が効いたのか、熱のせいか、普段眠れない僕がいつの間にか眠っていた。だけれどそれは少しの時間で、すぐに僕は覚醒した。
なんだか温かくて、気持ちがいいなと思ったら、それはサオリが僕の股間に顔を埋めて、その口に柔らかいままの僕のものを含んでいるのだった。って、どういうことなんだろうこれは。
「うわっ！」
僕は上着をめくり上げられているだけではなく、いつの間にか下半身もずり下ろされている。僕の先祖は侍だったというが、侍だったらこんな不覚があるだろうか。むざむざと衣服をはぎ取られてしまうなんて侍だったら切腹ものではないだろうか。江戸時代でなくて良かった。あまりにびっくりしたので、座薬がまた抜けてしまった。
「ヨウイチは動かなくて良いよ。じっとしてれば私がやってあげるよ」

「あー、もう、サオリはこれだからなあ」
「めいわく？」
「そんなことないけど。でもそういうことは好きな人にしなよ」
「そうなの？　でも、私ヨウイチのこと好きなんだよ」
「あっ、そうなんだ」
じゃあ良いのかな、と思いかけたけれど、いや、やはり良くないだろう。男女交際というのは、もうちょっと初歩的なところからはじめ、段階を経ていったほうが良いと僕は信じている。その手間暇が深い愛情とかそういったものを育むのではないだろうか。詳しくは知らないけれど。
そもそも僕はこんなことをしてもらっても嬉しくはない。逆になんだか申し訳なくて、いたたまれないのだ。
ぺちゃぺちゃと音を立てて口に含み、サオリは熱心にやってくれるけれど、僕は何も感じない。さわられている素肌や体温は気分が落ち着いて気持ちがいいけれど、それだけだ。おそらく他の人間だったら感じるはずの性的な興奮はない。あればいいなと思うが、残念だけど、僕はそうなのだ。
「一生懸命ありがとう。でも、もういいよ、こんなことしてくれなくたっていいんだ。今日は寝よう」

「でも、何かさせてよ。このままじゃいやだ」
「意外と頑固だな。じゃあ、一緒に寝てもらえる？」
「そんなので良いの？」
「いいって」
不機嫌な顔のサオリを引き寄せて、僕は胸の中に顔を埋めた。心臓がトクトクと鼓動しているのを感じる。
「うわあ、嬉しいなあ、落ち着くなあ」
僕が言うと、「ホント？」とサオリは言い、僕の頭を抱きしめる。
「うん、なんか小さい頃に戻ったみたい。ありがとう、実に幸せだなあ」
「じゃあ、良かった」サオリが穏やかに言う。
良かったと思ってくれるなら僕も良かった。僕は彼女の柔らかい胸の感触を感じながら、パンツに手を突っ込み、こっそり崩れかけた座薬を詰め直した。
そのまましばらくじっとしていた。やがてサオリがすっかり寝付いて、僕はベッドから抜け出す。
僕は変に興奮していた気持ちを静めようと思った。本棚の裏に隠してある雑誌を取り出して、ページを繰ると、断裂した死体や、首を絞められた死体、様々なかたちの死体を撮影した写真が目に飛び込んでくる。すでに生命を失いただの物質となった肉体を眺めてい

ると、サオリがあれだけ刺激してもまるで無反応だった僕の性器が硬くなる。我ながら気色の悪い性癖だと思うが、望んでこんな人間になったわけではない。気がついたときにはもうそうなっていたのだ。

一番気に入っている首のない女性が写っているページで性欲を処理して、その後使ったティッシュを丸めてゴミ箱の底のほうに押し込んだ。痕跡を隠すと、すっきりした僕はベッドに戻りサオリの体温を感じながら眠った。

電車の中、揺れに敏感に反応してつり革が息の揃ったラインダンスを踊っている。僕はかつて家で起きた事件について話し、姉について話し、それをサオリは難しそうな顔で相槌を打つ。

「それで、ヨウイチは理紗ちゃんを見つけたいの？」

サオリは何故か姉のことを理紗ちゃんと呼んでいる。

「出来れば。でも難しいだろうな。この際事件の詳細だけでもわかればいいなと思ってる。今までちょっと知らなすぎたからね」

「でも、理紗ちゃんと会えるといいね」

「そうだね」

「私も会いたい。どんな人なんだろう。写真はすごく可愛かったよね」

僕たちは、箱形の座席に向かい合って座っている。
　昨日学校で話したソフトボールの子から今朝電話があって、当時の事件について詳しく知っている友人がいるので紹介出来るがどうだろうと言われた。僕に異存などある筈もなく、これから会う予定になっている。
　昨夜のこともあるし、サオリを一人で家に残してゆくわけにはいかないので、一緒に行動している。サオリと歩くと通り過ぎる人が間抜けな顔で振り返る。誰もが振り返る美人、という言葉はただの修辞ではなくて現実にあるものなのだなあと思う。
　こうして黙っているのを見ると、肌は白くて日本人離れしているし、化粧っ気のない顔は少し幼く見えるけど整っていて、そして細めだけれど均整の取れたプロポーションで、容姿に関していえばそれを露出することを生業としている女性と比べてもなんの遜色も感じさせないどころか、ほとんどの相手になら勝てるのではないだろうか、もしかしたらそれは僕のひいき目かもしれないけれど。喋ると急に子供っぽくなってしまうが、それはまあ愛嬌かな。
「どうしたの？」
　じっと見ていると、サオリが尋ねた。
「顔に鼻くそがついてる」と僕は言った。
「えっ、嘘っ」

彼女は大慌てで顔をさする。
「うん、うそ」
「ヨウイチのばかっ！」
サオリは泣き顔になりながら、ミュールを床に置いた裸足のつま先で僕の向こうずねを蹴った。柔らかいつま先で蹴られても、大して痛くもない。
「ごめんごめん」
「そんな変なこと言って、ヨウイチほんとに私のこと好きなの？」
「うん、好きだよ」
「そっか……」
自分で訊いておいて、返事をするとサオリは瞬く間に赤くなる。僕は苦笑して窓の外に視線をやった。今日も太陽が燦々と大地を照らしていて、たくさん汗をかきそうだ。
待ち合わせの場所は駅ビル内の喫茶店。サオリにはお金を渡して、昨日なくしてしまった洋服や私物のかわりと、あと下着も多めに買っておいでと『カジュアル・婦人服』と書いてあるフロアで別れ、喫茶店には僕一人で向かった。席に座っている子が、僕を見つけて手を振る。
「怪我したんですか？」
開口一番、そう指摘された。昨夜殴られながら僕は頭を抱えていたから、体はともかく

顔にはあまり傷がなかったのだけれど、それでも口の端が切れていたので絆創膏を貼っているのだ。僕はちょっと転んでしまったと話した。
「あっ、九条さん。この子が言ってた子です」
紹介されたのはまるで児雷也か助六か、そう思ってしまいそうな、ビジュアル系というよりは歌舞伎といったほうがより正確な表現となるメイクの女の子で、大きな目でじっと僕を見つめながら正面に座っている。僕が挨拶をしても、むすっとしている。何か怒っているのだろうか。メイクのせいで顔がさっぱりわからないが。
「とても個性的な人だね」
僕は褒め方が解らない人に向かって使われるお決まりのフレーズでお茶を濁した。
「この子、同じ学校の生徒なんですけど、ちょっと変わってるんです。バンドやってて、普段はいつもこんな変なカッコで」
「変わってないよぉ。変なカッコじゃないもん。マリを馬鹿にしないでよぉ」
その言葉に即座に反応して彼女は抗議の言葉を大きな声で言う。
「あ、マリさんっていうんだ」
僕が話しかけると、彼女は頬をふくらませて黙り込んでしまう。なんだか知らないけれど、どうも嫌われているらしい。
「ええ、この子、志村麻里っていうんです。その事件の関係者だったとか言うんで」

「えっ、きみ関係者なの？」
志村麻里と呼ばれた子に言ったけれど、やはり彼女はそれには答えず、
「ねえ、あなた、九条っていうの本当なのぉ？」
と、質問で返した。
「うん、そうだけれど。きみ、関係者ってどういう？」
「九条って、九条理紗って人と関係あるの？」
僕の言葉にはやはり答えない。僕はとりあえず頷く。
「やっぱり、そうなんだ！　むかし私のお姉ちゃんに、酷いことしたでしょう？　あんたのせいで、お姉ちゃん大変だったんだから！　このウンチ！」
言うなり、彼女は立ち上がってグラスを手に取り、中に半分以上残っていたメロンソーダを僕にぶちまける。店内の話し声がやみ、視線が僕に集中するのを感じる。頭から甘い液体をかぶってしまった僕はズブ濡れだ。
「もうほんと、許せないよ！　あんたのせいで、お姉ちゃんおかしくなっちゃったんだよ？　暴力ふるったり、無理矢理いやらしいことさせたりして、人間をなんだと思ってるのぉ？　そんなことして、なんでまだ平気で生きてるの？　私たちがどれだけ辛い目に遭ったと思ってるのよ、あんたなんか死んじゃえ！」
一息にまくし立てながらだんだん涙ぐんだ志村麻里は、次はグラスを投げつけた。それ

は僕の鼻を直撃して、ショックで目がチカチカとする。グラスは床に落ちると派手な音を立てて割れる。

「もういやっ！　気持ち悪いっ！　馬鹿！　うわーん！」

涙を腕で乱暴に拭うと、鞄を掴んで後ろも振り返らずに大声で泣きながら店を出ていく。

僕は、ぶつけた場所を押さえてうずくまる。鼻血が指の隙間から流れ落ちる。

そして残った僕たちも、間もなく店員に追い出された。

「すいません。なんだか、訳がわからないけど、いつもはあんな子じゃ……ああ、えっと、ときどきあんな感じですけど、物を投げることなんかほとんどないんです」

「関係者なら興奮しても仕方ないよ。オレこそ、詳しく話さなくてごめん」

恐縮する彼女に、僕はおおまかに事件の概要を話した。そして、その主犯者の一人と思われる人物が僕の姉であるとも。

「学校のレポートとか言ったけれど、本当は姉さんのしたことを知りたくて調べてたんだ。オレもよく知らなかったから。話からすると志村さんは被害者の家族なんじゃないかな。だとしたら当然だと思う。無神経なことして悪かったなあ。それに前もって言っておけば良かった」

なおも謝る彼女だけれど、思慮が浅かったのは僕だから謝られるのも気まずい。少し僕は甘く考えていたのだろう。怒鳴られるくらいは覚悟していたけれど、まさかグラスを投

げつけられた上に号泣されるとまでは想像していなかった。彼女に礼を言って、僕はその場を辞した。鼻血の勢いがひどくて喫茶店から持ってきた紙ナプキンを次から次へと詰め替えながら歩いた。鼻は痛いけれど、それより僕は他人の猛烈な悪意に直面して、ただただ衝撃を受けていた。

「うわ、どうしたの？」

サオリは僕を見つけると、目を丸くした。そりゃ驚くよなあ。ほんのちょっと離れていた間に、僕は緑色の液体で髪もシャツもベッタリと濡らし、鼻からはとめどもなく血を流すという、なんだか極めて愉快な姿に変わり果ててしまっている。指を差して笑ってもいいところだ。

「なんか甘くていい匂いがするよ。おいしそう」

サオリは顔を近づけて、僕の匂いを嗅いでいる。

「メロンソーダは好き？」

「う、うん、好きだけど……」

「クリームソーダとどっちが好き？」

「私、クリームソーダ大好き」

「じゃあ、二人で飲みに行こうか。僕も飲もう」

僕はやけくそに言って、サオリの腕を取った。

ているのだろう。

僕たちが歩きはじめると、行き交う人々が振り返る。今はサオリではなくて僕が見られ

「すごく大丈夫。さぁ行こう」

「え、でも、ちょっと、大丈夫なの？」

夜になった。僕は緑色に染まったシャツを着替え、彼女もついでに今日買った服に着替えた。鼻血はとっくに止まっているけれど鼻筋に新しい傷が出来てしまい、顔の絆創膏が二つに増えた。

サオリの新しい服は夏らしく爽やかで、今までのジーンズ姿のラフな感じも良かったけれど、なかなかどうしてこんな格好をしていると良いところのお嬢さんみたいだった。何かを見て参考にしたのかと訊いたら、姉の部屋にあった昔の写真を思い出して、似た感じの服を探したのだと言う。

「なんで？」「理紗ちゃんがすごく可愛かったから」「そうなんだ」「それに、ヨウイチは理紗ちゃんが好きでいつも気にしてるでしょう」「そんなこと言ったっけ？」「だって、理紗ちゃんのこと話すとき感じが違うもん」「意外と鋭いね」「ねえ、私似てるかな？」「全然似てない」「もう」「つうか、真似しないでいいから」「なんとなく髪の毛が違うかなあ」「それで良いんじゃないの」「やっぱり違う」

サオリがどうしても髪の毛の感じが変だと主張するので僕は美容室へつれていってやり、明るくしていた髪を黒く染め直すとかやっている間、ただぼんやりと待っていた。

美容室が初めてらしく、場所をわきまえない大きな声で美容師さんにいろいろと質問しているのが外にいても聞こえる。美容師さんも大変だなあと思いながら佇んでいると携帯電話が鳴って、それは渡会泉さんからだった。今さっき東京から帰ってきて話を聞いたのだけれど、なるべく早く、出来ることなら今すぐ会いたいと言ったので、サオリの髪が終わると二人で会いにいった。

「あなたが洋一君？　いきなり呼び出してごめんね。お休みの時間そんなになくて」

そう言った泉さんは知的な印象のある綺麗な人で、卒業アルバムで見た感じよりもだいぶ大人びている。

「言われてみればどことなく理紗ちゃんに似てるわね。髪質とかそっくり」

「ヨウイチは似てるの？　私はどうですか？　理紗ちゃんに似てますか？」

僕が返事をする前にサオリが割り込む。髪を黒く染めてストレートパーマを当てたサオリは、すっかり見違えてしまったけれど、それは彼女が望むように姉に近づいたとは思えず、むしろ前よりも離れてしまったように僕には思える。

泉さんは少し狼狽して言った。

「え、えっと、あなたも理紗ちゃんの親戚なの？」
「いや、彼女は赤の他人です。無視してください。ちょっと駄目な子なんです」
「赤の他人！」
サオリはむくれてしまう。
「じゃあ、どこかお店入りましょうか？」
「赤の他人なの？」
サオリの言葉を無視して、泉さんを促す。
「馬鹿！　私行かない」
とサオリは言って立ち止まったけれど、店の入り口まで来るといつの間にか後ろに追いついていた。
飲み物を注文してから「ごめん、お酒大丈夫だった？」と泉さんが言い、僕は平気ですと答えた。サオリにはウーロン茶を注文させている。飲み物が届くまでの間、サオリは店内のものに興味を示してきょろきょろしている。そして、さっきのことなどすっかり忘れた顔で僕に質問してくる。
「ヨウイチ、これは何？」「箸置き」「チャージって何？」「席に座ったらお金とられるの」「お冷やって？」「水のこと」「じゃあ、あそこに書いてある冷ややっこっていうのも関係あるの？」「そうだよ。あれも水」「牛刺しってなあに？」「牛を刺すの」「どうして刺す

の？」「だって、牛が暴れたら危ないじゃん」「あっ、そうか」「血が一杯でるよ」「なんか怖い」「そうだね」やりとりを見ていた泉さんは苦笑した。
泉さんには日本酒、僕にビール、サオリにウーロン茶が来た。乾杯、とやりかけてから「とりあえず今日の出会いに」と泉さんは言い、小さくグラスをぶつける。見よう見まねでサオリもグラスを掲げた。
そしてまず泉さんは自分のことを話す。彼女は大学を出て今は都内で新聞社に勤めているのだと言った。姉とは中学校時代からの友人で、ずっと仲良くしていたらしい。事件のときは確かに姉や木村と出会い話した。その内容については今でも覚えている、と。
泉さんの自己紹介が終わると、僕も自分について話し、それから今まで調べたことを言った。今日志村麻里という子に会ったことも告げた。
「ああ、きっとそれは志村先輩の妹さんね」
木村に監禁されていた上級生、志村詠美の妹だろうと泉さんは言った。事件の概要はほぼ新聞に書いてある通りだけれど、何について詳しい話を訊きたいのかと泉さんは僕に尋ねた。
お酒が回りはじめたのか、泉さんはほんの少し頬がピンク色になっている。夏休みの居酒屋は喧噪に満ちていて、小さな声で喋るとかき消されてしまうが、大きな声で話せる話題でもない。僕たちは運ばれた唐揚げやサラダを挟んで、顔を近づけて話し合っている。

僕が木村について訊きたいと言うと、彼女は話しはじめた。
幼い頃に両親が離婚して、彼は母親に引き取られると二人きりで育った。木村の家はあまり裕福な家庭ではなく、苦しい幼年時代を過ごしたらしい。
木村と姉が出会ったのは小学生の時期で、すぐに二人は仲が良くなった。しかし、やがて木村の母親が事故で亡くなると、彼の性格に影響を与えたのか、人を遠ざけるようになり、姉とも疎遠になっていった。
中学校にあがると、泉さんも同じ学校になり彼らと知り合った。初対面の木村は、他人とあまり打ち解けず、雑談にも加わらないで一人でぼんやりするのを好むような、おとなしい印象の生徒だったという。対する姉は、学校でも目立つタイプの優等生だが誰にでも優しいよく笑う子で、みなに好かれていた。
「学校では、理紗ちゃんが木村君にかまっていて、クラスの人はそれを博愛心みたいに考えていたけれど、今考えると理紗ちゃんはただずっと木村君のことが好きなだけだったと思うんだ」と泉さんは言った。
泉さんと姉は親しくなり、姉の紹介により木村とも何度か喋ったが、彼は誰に対しても素っ気なく、あまり多くのことを話したくはなさそうだった。泉さんも姉と仲が良い彼に興味はあったが話すきっかけがなく、彼についての情報は姉の口からのものばかりだった。
結局泉さんと木村はそれほど仲良くもならないまま、三人は同じ学校へ進学する。そして、

先日僕が訪ねたあの学校に通いはじめる。
殺された三沢という人物は一学年上の先輩で、その学校の女子には圧倒的な人気があった。入学間もない頃、彼が姉に交際を迫ったが、姉は断る。
やがて三沢は木村に暴力をふるうようになった。姉が木村と親しくしているというのは学校ではちょっとした話題になっていたから、あるいはそれと関係していたのかもしれない。後に監禁事件の被害者となる志村詠美も、このとき木村学への暴行に参加していた。しかし木村学はこの暴行について誰にも言わなかったし、暴行自体が人目を避けて行われていたから、表沙汰になることはなかった。そして、夏休みを控えたある日、その事件は起こった。
泉さんはその日図書室で本を読んでいた。姉と一緒に帰るつもりだったけれど、ぎりぎりになって用事があると言われ、暇をもてあまして学校に残っていたのだ。今思い合わせてみると姉の表情はいつになく緊張していたような気がするが、そのときは気がつかない。
本を読んでいると遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきて、学校の近くで消えた。図書室にいた生徒の何人かが窓に向かい、騒ぎはじめた。そこで泉さんも読書を止めて外を見ると、パトカーが校舎のすぐそばに駐車してあり、制服を着た警官がこわばった顔で校舎の中へ駆け込んでゆく姿があった。小学校などでは、誤って非常警報を押してしまったのが原因で消防車が来てしまうといった出来事は経験している。あるいは、同じように

誤って何かを作動させてしまい、警察を呼んでしまったのだろうか。もう子供ではないのだから、それも不自然だったが、まさか実際に校舎内で警察沙汰が起きたとは図書室に居た誰も考えなかった。

ほどなく、廊下から騒ぎ声が聞こえはじめると、泉さんは他の生徒とともに図書館を出た。校舎内に残っていた生徒はみな廊下に出て、向こう正面の階段付近に集まっていた。泉さんも人混みに分け入ってみると、その前に警官が立っていて階段のほうへ入らないように声を出しているのが見えた。

近くに立っていた生徒たちが口々に話している。血だらけの生徒が校内を歩いていたのを誰かが見たのだという。現場に駆けつけてきた警察は、今さっきその生徒に手錠をかけると、階段を上っていったそうだ。階段の上には、屋上がある。あれはきっと屋上で誰かを殺したんだろう。半端な血の量じゃなかった。生徒たちはそう囁く。

まもなく、ヘルメットをかぶった救急隊員が現れて担架を二つ抱えて階段を上っていった。犠牲者は二人なのかと、あちこちで生徒たちが喋り出す。

救急隊員はすぐに担架に人を乗せて戻ってきた。担架の上に横たわる体には、毛布が顔までかけられていて誰だかはっきりとはしなかったが、髪型からすると男子生徒のようだった。階段を下ろす振動で片腕が担架の端からだらりと垂れ下がり、脇についていた救急隊員がすぐに担架に戻したが、血にまみれた腕は日焼けしているにもかかわらず青ざめて

いるのがわかり、それが力なく揺れる様は到底生きた人間の腕には見えなかった。具体的なものを目の当たりにして、生徒たちは水を打ったように静まり返る。

続いて、担架がもう一つ下りてきた。今度は顔が見えていて、泉さんにはそれだけでもう誰だか判別することが出来た。血相を変えて人混みをかき分ける。

「理紗ちゃん」

泉さんは大きな声を上げたが、担架の上に横たわる九条理紗……姉は、ぴくりともせずにそのまま運ばれていった。そして最後に、警察に伴われて背の低い男子生徒が頼りない足取りで下りてきた。その姿に、小さな悲鳴が上がる。制服のシャツは鮮血で真っ赤に染まり顔は何かで拭われてはいたがまだ血が薄くこびりついている。呼びかけても、目をうつろにしたまま反応を見せない、彼が木村学だった。

泉さんは別の階段から下りたが、救急車はすでに去り、パトカーも今まさに出ていくところで、彼女はただ呆然とそれを見送ることしか出来なかった。死んだのは三沢友昭と九条理紗、殺したのは木村学。校舎内に残された生徒たちはそう結論づけ、様々な憶測を語り合った。その会話の中には到底我慢のならない不謹慎なものも多かったが、泉さんはそれを咎めることさえ忘れて、誰も居なくなるまでパトカーが去っていった場所に佇み、暗くなってから校門を閉める用務員に注意されてしまった。荷物を全部学校に忘れて手ぶらで、しかも上履きのまま家に着いた。

翌朝緊急集会が開かれ、三沢が死に、姉は病院で保護されているが生命に別状はないことが校長の口から告げられた。木村の名前は出なかったが、学校内の誰もがすでに知っていた。木村の所持品は昨夜のうちに警察に押収されたらしく、彼の机もロッカーも空っぽになっていた。学校内では警察の姿が見受けられ、生徒の何人かが事情を尋ねられた。姉と親しかった泉さんもその一人で、姉や木村、そして三沢について尋ねられたが、混乱していてあまり理屈の通った発言を出来なかった。

一週間ほどして姉は学校に復帰した。本人は事件前と変わらぬ様子だったが、誰もが姉に気を遣って事件について尋ねることはなく、泉さんもまた同様だった。姉が内心でどう思っているかは誰にも窺い知ることが出来なかったが、泉さんだけには、木村のことを心配していると話したらしい。

そして夏休みに入り泉さんは姉と、そして警察から脱走して姉が匿っていた木村と出会うことになった。姉は事態に少し困惑していた。木村のほうは精神的に疲労し、消耗しているように見えた。木村は三沢殺害の犯人は自分ではないと泉さんに主張し、姉の態度に不安があるとも語っていた。彼は弱ってはいたがそれほど不合理な発言でもなく、少なくとも嘘をついているようには見えなかった。ただ、最後に家で木村を見たときには彼は明らかに錯乱していた。支離滅裂なことを口走りながら床に向けて発砲し、それから姉とともに逃げていった。その後、泉さんは家に捕らわれていた志村詠美を発見し、凄惨な暴行

の跡に言葉を失った。
木村と姉が去り、現場に残され呆然としていた泉さんはすぐに駆けつけてきた警察に保護され、後日に詳しく事情を訊かれたが、詳細についてはむしろ警察のほうが詳しかった。木村学が家に女性を監禁して、暴行をふるっていたことなど、新聞報道ではオブラートに包まれていた部分は、泉さんには解らなかったことだ。事件の重大さを改めて知り、彼女も知っている限りにおいて、包み隠さず正直に話した。警察は木村が脱走したばかりの頃に出会っていたにもかかわらず、すぐに通報しなかったことで泉さんを咎めはしたが、結局のところ不問に附された。
「木村君が言われるほど酷い人だったとは思えないのよ。理紗ちゃんだって、理由もなくそんなことをする人ではないでしょう？　何かあった筈なんだけれどね。あんな近くにいたのに、私にはなんにも話してもらえなかったのが寂しいなあ」
泉さんはため息をつきながらそう言った。僕はどう言ったら良いのか解りかねた。
期せずして、二人とも黙り込んでしまうと、小鉢を抱え込み、もそもそと何かを食べていたサオリが突然言った。
「ねえヨウイチ、これすごい美味しいよ。はじめて食べた。なんて名前なの？」
サオリは目を輝かせながら、『タコワサ』の鉢を僕に突きつけた。

ラブホテル、ファッションホテル、ブティックホテルと色々呼び方はあるけれどどう違うのか僕にはよく解らない。

終電がなくなり、他に適当な宿泊施設が見つからなかったのでチェックインをした。僕は服のままベッドの上に仰向けに寝ころび、天井の蛍光灯を見つめている。泉さんのペースに合わせていたら、気がつかないうちに量を過ごしてしまったらしい。目が回るほどではないけれど、少し気持ちが悪い。

サオリは味だけでなく、語感も気に入ったらしく「たこわさ、たこわさ」と繰り返し呟いている。風呂からあがると枕元の操作パネルをいじって照明を変えたり有線を流したり空調を止めたりして遊んでいたが、その間もずっと、変な節をつけて歌うように呟いていた。テレビを見はじめてから、漸く、そのたこわさのテーマソングをやめた。いまサオリは幽霊が人を呪い殺す洋画を、食い入るように見つめている。

風呂から出たあといい加減に拭ったのか、染めたばかりの黒髪から滴が垂れてローブを濡らしているが、本人は気にしてもいない。注意しなければと口を開きかけると、彼女は振り向いた。

「ねえヨウイチいい？」

「ん、何が？」

「あのね、なんか、こんなの思うのはじめてなんだけどね。なんか、私にはよく解んない

んだけど……」
　サオリは、もじもじしながら上目遣いで僕を見つめている。
「どうしたの？　少し感じが変だな」
　ホラー映画のせいで、恐ろしくなってしまったのだろうかと、僕は思った。
「そうなの、なんか変なの。えっとね……」
　みるみるうちにサオリの顔は真っ赤になる。
「ちょっと、大丈夫？　本当にどうしたんだろう」
「大丈夫。でも、なんかいつもと違うの。あのね」
「うん」
「ヨウイチとえっちしたいなって思うの。なんでだろう」
「なんでなの？」
「……わかんない。ヨウイチはいやだ？」
「いやだってことはないけれど」
「えっち嫌い？　それとも本当は私が嫌いなの？」
「どっちでもないと思うよ多分」
　なんか僕は変なことを言ってしまった。せっかくだし、ちゃんと話そうかなと思った。
「サオリのことは好きだと思うよ。オレに他人を好きになることが出来るのならだけれど。

でもね、あんまりそういう気持ちに自信がないんだ」
「どういうこと？」
サオリはきょとんとした顔で僕を見ている。
「聞きたい？」
彼女は頷く。
「こんなこと、人に話すのは初めてだし、出来れば一生誰にも話さないほうが良いと思ってたことだけど、聞いてくれるっていうなら、話そうかな。でも、あんまり楽しい話じゃないよ」
僕はベッドから立ち上がりジュースを少し飲んだ。くらりとして、僕は自分の酔いを感じた。サオリは深い黒色の瞳で僕を見つめて話の続きを待っている。飲み干したグラスを置いてから、話しはじめた。
別に生身の人間が嫌いなのではない。そんな極端な考えはなく、一般的にはむしろ好意的な印象を持っている。たとえ内容がなくても誰かと会話をしているのは楽しいし、一緒にいるだけで気が安らぐ。女性は美しいと思うし、親しくなれれば良い気分になったりもする。ただ、僕の場合はそれが性欲と結びつかない。
今までも女性と付き合ったりもしたけれど、そういった場面になると僕は全く役に立たない。彼女も行為を望むし、僕もそこまで出来ないものだとは自覚していなかったから、

何度か試してみた。けれども結局うまくいかなくて、ギブアップすることになる。そのとき相手の子が「私に魅力がないからなんだね」「あなたはそんなに私が好きじゃないんだね」失望と不快感を露わにして、そう言っていたのを思い出す。それは寒い冬の日で、彼女の部屋のベッドでお互い全裸で胸に布団をかき寄せて向かい合っていた。加湿器がぽこぽこと音を立てて、窓には水滴がたくさん貼りついている。

「とても魅力的だと感じてるし、好きだよ。でも出来ないみたいなんだ。そういう気になれない」と言った。

「それって、もしかして大事にしたいって思ってくれてるの？」彼女は言った。

「いや、そうでもないけれど。単純にきみに性的なものを感じない」

「なにそれ？　ひどい。じゃあ、九条君は私をそんなに好きじゃないんだよきっと。でも、どうしてそんなこと面と向かって言えるの？」

彼女はそう言って、僕は弁解する。そんなつもりじゃないんだ。でも、もしかしたらそうなのかな。自分ではそう感じないけど、性欲の対象にならないから本当は好きじゃないなんて、まさかそんな考え方があるとは思わなかった。もしそれが正しいなら、僕のこの好きだという感情は偽物なのかもしれない。でも、みんな、自分が相手を本当に好きかどうかって、どんなふうに確信してるのだろう。ムラムラしたらそれが好きだってことなのかな。それも変だと思うけれど。きみはそっちのほうが良かったの？

そんな意味の言葉を話しているうちに彼女は怒り出し、泣き出し、叫び出したので僕はなんとかなだめようとしたけれど、ついに出ていけとものを投げつけてきたので、慌てて服を着て、家を出た。それ以来彼女とまともに口をきいていない。その頃僕はまだ世間から見て自分がどの位置にいるか気が付いていなくて、感じたことをそのまま口にしたら他人にどう思われるかを上手に察することが出来なかった。

性欲はなんだか暴力の衝動に似た薄汚い感じがする。怒りを剥き出しにして人を殴るのが醜いように、性欲を露わにして人間に接するなんて、とても恐ろしいことのように思えた。それでも体の生理は性欲の解放を要求して、僕をせき立て、ただそこに居るだけで気持ちが鬱屈してたまらない。どうしたらいいか戸惑っていた。同級生が喜んでいるような写真やビデオにしても、そこに人間性を意識してしまうとどうしても僕は駄目だった。

中学生のとき同級生が死んだ。少し可愛い女の子で、クラスの男子の多くは哀しいという気持ちの他に、「もったいない」とも言っていた。僕はそんな風には思わず、ただ哀しいとだけ感じていた。しかし、花を棺に入れようとして、死体を見たときに、僕は自分がひどく興奮して喉がからからになっているのを感じてしまった。生きているときは、特別その子に興味があったわけではなかった。でも、死んでしまった彼女の肉体はとても魅力的でいやらしく見え、僕のズボンの中は硬くなっていた。

帰ってから、彼女を思い出して自慰を行った。すんなり出来た。なんで自分はいま平気だったのだろうと考えた。きっと死体が好きなんだろうと思った。ためしに、そのあと書店でそのとき少し流行っていた死体の写真集を買って夜になってからベッドの部屋で開くと、そこに写った死者の白い素肌の上になら、案の定なんの躊躇いもなく自分の性欲を見いだすことが出来た。最初から自分はこれを求めていたのだと思い知らされた。

死んだら人は何も感じないし、何をされても気にならない、誰にも何も話すことがない、だから好きにしていいしなんの問題もない筈だ。僕はその考え方に理論的にも感情的にもなんの矛盾も感じなかったし、誰に訊くまでもなくごく当たり前のことだと信じ込んでいた。かといって自分をノーマルだとも思ってはいなかったけれど。しかし世間でロリコンだ犯罪だと差別されてもかなり多くの大人が半ば公然と未成年の女性に強い興味を持つように、僕の性癖も表沙汰にならないだけで現実的にはそれなりに一般性のある嗜好なのだろうと考えていた。そういった本があるのもそのためだろうと。もちろん、視野が広がるにつれてそんな勘違いはすぐに訂正されたが。

ただ、今でも感覚としては何が悪いのかよく解らない。たとえば強姦してから殺人を犯した人物と、殺人してから死体を犯した人物とでは後者のほうが異常者のように報道されたりする。映画なんかでも、前者は青春の過ちみたいに扱われたりするけど、後者はほぼ確実に異常性欲者の扱いを受けている。僕にはその感覚がさっぱり他人と共有出来ない。

か。

どちらも同じ犯罪だとしたら、嫌がってる人に苦痛を与えながら自分の欲望を果たすよりも、もう何も感じないただの物質を弄ぶほうが、まともで善良で人道的ではないのだろうか。

死んだらもうそれは人間ではなく、人の形をしたただの肉塊だ。なんで他人はそうやって割り切れないんだろう。それとも僕のほうが理屈以前の当たり前のことを解っていないのか。それがなんだか想像もつかないが、きっとそうなんだろう。何しろ僕の感性は間違っているんだから。

「軽蔑してくれて構わないし、それが当然だと思う。オレは別にそれでショックを受けたりはしない。ありのままで他人に受け入れてもらおうとか、まともな人間扱いされようなんて考えはとっくの昔に放棄してる。全部好きなように受け止めてくれていいよ」

サオリは僕を見つめたまま黙っている。僕は緊張と喋りすぎで喉が渇いていた。

「じゃあ、ヨウイチは一生自分の子供と遊んだり出来ないってこと？　なんでそんな可哀想なの？　しあわせになれないじゃない」

「別に可哀想じゃないよ。それだけがしあわせってわけでもないしね。自分の意志で子供を作らない人だって世の中にはそれほど珍しくない。そういや、セックスって子供作るためにやるんだっけ。忘れてたな。とにかく、問題はそんなことじゃないんだ。さっきもね、泉さんが三沢って人の死ぬ話をしてただろ？　その死体の話を聞いてるとき、きみの素肌

を見たりこんなアプローチをしてもらうよりもずっと興奮してたんだ。オレがサオリよりも三沢って人のほうに好意があるはずもないけど、自動的にそう感じてしまったんだ。美味しそうな料理を見たらよだれが出るように。気持ち悪いでしょう？　我ながらどうかと思うよ。先天性だか後天性だかしらないけれどオレは決定的な失敗作で、救いがたい変態なんだよ」
「ヨウイチの言ってること、よく解らないけど……」
「そりゃ、解らないだろうね。ここまで言うつもりもなかったんだけど、なんか自分の悪いところを話しはじめると変な快感が出てくるもんだな。良くない。それに少し酔ってるのかもしれない。不快な思いとか困らせてしまったのならごめんね。ただ、好きだとか言うなら知ってもらったほうがフェアだと思って」
「ちがうの、そうじゃなくて。えと、どう言ったらいいんだろう」
「解ってるから、なんにも言わなくていいよ。自分が一番よく知ってる」
「ちがうの、違うんだ」
「なに？」
「あのね、私、あのね、ヨウイチが好きだよ。本当に大好きなんだよ」
「ありがとう」
僕は言ってから、眠剤をジュースの残りで流し込んだ。ベッドに潜り込む。なんだか余

計なことをベラベラと喋ってしまったな。僕は自己嫌悪に陥る。しかし、少しだけさっぱりした気持ちもある。僕は自分の義務を全て果たした、あとは彼女が自分の意思で判断すればいい。

　サオリが何か静かな声で僕に呟いている。僕はその声の響きを音楽のように聴きながら、眠りについた。

　翌朝目が覚めると部屋にサオリの姿はなかった。暗くなりかける気持ちを、当然のことだからと納得させる。でも、もうちょっと仲良くなってから少しずつ話せば良かったのだろうか。いや、いずれにしても同じことだったと思う。だとしたら、早い段階で諦めてもらって良かったのかもしれない。そうだ、こうなることは最初から解っていた。

　ただ、せめて別れの言葉くらいちゃんと聞けば良かったと僕は後悔した。

CHAPTER－3

「ひどい有様ですね」
　僕は言った。
「そうなのよね」
　泉さんは困った顔をしてため息をついた。
　木村学が住んでいたという家はすっかり荒れ果てていた。それは年月の経過による自然な劣化ではなく、玄関のガラスはヒビが入り、壁には何か物を投げつけたへこみがあり、明らかに人為的なものだった。壁には「人殺し」と崩れた文字がスプレーで大書されている。書かれてからだいぶ時間が経っているらしく、手で触ると塗料が剥がれ落ちる。
「いまさらイタズラする人もいないだろうから、私も綺麗にしたほうが良いって勧めてるんだけれど本人はきかないのよ。孫が罪を犯したのだから、こうして晒し者になるのも罰のうちだって」
　泉さんは玄関を開け「お邪魔します」と奥に声をかけてから靴を脱いで部屋にあがった。家人が出てくるのを待たなくて良いのかなと気にしながら、僕も同じようにした。
　荒れ果てた外観とうって変わって、家の中は老朽化こそしているものの清潔に保たれ、

適切に整頓されている。木村学の祖母だと紹介されたその人は、背中を丸め、畳の部屋に小さく座り、湯呑みを両手の中に温めていた。
挨拶の仕方を考えていると、泉さんは部屋の隅に積んであった座布団を僕に渡してくれたので、それを敷いて腰を下ろす。泉さんも座布団を取って腰を下ろすと、老人に僕を紹介してくれた。
「九条さんのお坊ちゃんですか。私は学の祖母で木村富子と申します。うちの学がご迷惑をお掛けして申し訳ありません」
深々と頭を下げたので、僕も慌ててお辞儀をした。
「人様のお嬢様にとんでもないことをして、なんと申し上げたらよいのやら」
「うちの姉も自分で決めたんだと思いますから、そんなことして頂く必要はないですよ」
「そう言って頂けるなら……」
「私も、そうだったと思いますよ。少なくとも富子さんがそんなに謝ったりしなくても良いんじゃないかしら。あ、お茶、新しいの淹れてきますよ」
「泉ちゃんは、またちょっと見ない間にますます美人になったねえ」
「そんなことないですよ」
苦笑を残して、泉さんは部屋を出ていった。よく動く人だなと思う。
「あの子はもう何年も前からこんな年寄りを心配してくれて、本当に良い子で。実の孫は、

あんなことをしでかした上に、今頃どこで何をしているのやら」
富子さんは誰に言うでもなく、そう呟いた。
二人っきりになってしまうと何を話したらいいのかわからず、僕は黙り込んでしまった。遠くでアブラゼミの鳴く声が聞こえる。扇風機がカタカタと音を立てながら首を振っている。なんだか懐かしい雰囲気だ。そういえば僕は最近祖父にも祖母にも会っていない。僕の祖母は富子さんみたいに大人しい感じではなく、やたらと口うるさい人だけれど。
「あなたは学のことを知りたいんだそうで」
富子さんがそう口を開いた。老人の顔には深いしわが無数に刻み込まれていて、表情がうまく読み取れない。
「学があんなことをしでかしてしまったのは、やっぱり私が博美(ひろみ)の育て方を間違えたせいなんですかねえ」
「ひろみ……さん、ですか?」
「ええ、私の娘で学の母親です。一生懸命働いてなんとか学校へ入れてやったのに、卒業もしないうちに男と結婚してしまって」
富子さんは深いため息をつき、首を左右に振った。
「小さい頃から親の私たちが働いてばかりで、ずっと寂しかったんですかね。とても心の弱い子だったんです。学を生んですぐ離婚したのは自分のせいなのに、学にばかりあたっ

て。学も辛かったんでしょうよ。私がもっとしっかり博美を育てられたら、こんなことになっていなかったかもしれないです。学にも申し訳なくて、何も言えなかった」
「そんなこと考えてたらキリがないですよ」
泉さんはお盆にグラスをのせて戻ってきた。
「そんな、万能じゃないんですから、完全に出来るわけないじゃないですか。今までのことよりも、これから先のことを考えないと。あ、麦茶で良かったですか？」
「泉ちゃんは優しいねえ。学が迷惑をかけて私こそ申し訳ないのに。この老いぼれが死んだら、いろいろ神様にお願いしておくから」
「もう、すぐに死ぬとか言わないでくださいよ」
泉さんは怒ったように言って、グラスをそれぞれの前に配る。
「まったくとんでもない孫を作ってしまって……」
老人の言葉は、続く。娘にも、孫にも、世間にも引け目を感じているようだ。後悔しても仕方がないとは理解しているようだが、かといって前向きになることも出来ないでいる。何度もため息ばかりついている。
部屋の空気は陰鬱で、泉さんがなんとか明るく盛り上げようと話題を作っているが、すぐに富子さんのため息で終わる。そのうち富子さんは疲れたと言って、自分の部屋に帰ってしまった。二階に木村学の部屋があるというので、僕は泉さんに案内してもらった。

その部屋は、机と椅子と本棚が調度の全てで、実に簡素な場所だった。それでも殺風景な印象を受けないのは、とにかく本の量が半端ではなく、圧倒的だったからだ。壁一面の本棚を本で埋め、それでも収まりきれず床にも積み上げてある。

「富子さんて、暗いですよね。あんな感じの人と二人きりで暮らしていたら、かなりしんどいと思いますよ」

僕は思っていたことを、泉さんに漏らした。

「そんなこと言わないの。あの人はあの人で、いろんなことに責任感じてるんだと思う」

泉さんはそう言った。

「それにしても、変わった部屋ですね」

部屋には若者らしい生活を思わせるものがまるっきり存在しない。彼は小さい頃からこの部屋で過ごし、本ばかりを読んでいたのだろうか。そして成長した彼は人を殺し、暴力をふるい、恋人を連れて逃げていった。活字ばかり読んでいたらオタクか変わり者にはなりそうだけれど、人殺しになるという話はあまり聞いたことがない。世間一般の感覚からいえば、本ばかり読んでいる変人よりも、僕のような異常性欲者のほうが犯罪者のイメージに近いだろう。

そんな僕だけれど、どうして人に暴力をふるえるのか、ましてや殺人をする心境なんて想像もつかないでいる。人を殺してしまう瞬間というのはどんなものなのだろう。恐ろし

くはないのだろうか。それでもやっぱり、もし僕が彼の立場に立たされたら、やはり殺してしまうものなのか。自分の手が刃物を持ち人を切り裂いているところを想像して、背筋が冷たくなった。

「木村さんて、変わった人だったんですか？　異常なところがあったとか」

「そんなことは、ないと思うけれど」

泉さんの話では、事件後は色々と不自然なところもあったが、少なくともそれ以前は目につくほどの行動はなかったそうだ。派手なところは特にないし、生活環境や生い立ちを考えれば、ドロップアウトもしておらず、成績も上位で優等生の部類だった事実は、むしろ驚くほど真面目な人物だったと評価されるべきだろう。

それなのにいじめられてたというわけか。確かにそれは酷い話だなと思う。でも、だからといってすぐ犯罪に直結はしない。もちろん、いじめられっ子が逆上して殺人を犯してしまうというのはニュースとして考えれば特別異常な話でもないだろう。ただ、この場合は警察から脱走し、そのあと女性に乱暴してもいる。そこまでしたら、いじめられてたから、では済まされない。

姉は、どんなつもりで木村学についていったのだろう。

「それは愛だったんですかね？」

僕は、そう言った。

「愛……って、なんの話？」
泉さんは手にとって開いていた本から顔を上げて僕のほうを見た。彼女の肌はしっとりと湿っていて、僕は部屋がとても蒸し暑かったことに気がつく。
「あのですね、愛とかがあったから、二人してそんな無茶なことをしたのかなと思ったんですよ。だって、普通じゃこんなこと出来ないじゃないですか」
「そうね、確かに、二人には仕方がない理由があったんだろうけれどなあ」
「どんな理由なんでしょうね」
「それは本人じゃないから解らないけれど。まあ、好き合ってたとは思うわ」
「なんでそう思うんですか？」
「見てたら、そんな感じがしたってことだけれどね。でも、それは愛だったんですか、なんてなかなか素敵な言葉を言うのね。洋一君はロマンチストさんなんだなあ」
泉さんは、意地悪な笑みを浮かべた。僕は自分がとんでもなく恥ずかしい発言をしていたことに気がついた。
「だ、だって、恋は盲目とかっていうじゃないですか。だから、もしそうだったら説明がつくのかなあって、ちょっと思っただけです」
「照れなくたっていいよ。夢見る男の子ってすごく魅力的よ。愛って素晴らしいものね」
僕が否定しても、泉さんはからかってくる。ついに僕は閉口して、

「泉さんて顔は綺麗ですけど性格は悪いんですね」
「あ、怒った？　ごめんね。まあ、確かにそういう理由もないとは思わないわ」
泉さんはくすくすと笑ってから、
「そういえば、昨日の女の子はどうしたの？　恋人？　洋一君は愛してるのかな？」
「知りませんよ」
サオリの話題になったので無理矢理会話を打ち切って、本棚に視線を戻した。並んでいる本のジャンルは小説から専門書まで多岐に渡り、書名だけでは何について書かれた本なのか判別がつかないようなものまである。いくらなんでも全てを読んではいないと思うが、この部屋の持ち主はどの程度まで目を通したのだろう。
一冊の本を手に取り、適当にページを開いてみる。
『合法的な懲罰の問題にもどって言えば、監獄は、しかもそれにともなう矯正技術論のすべてを含んでの監獄は、以下の点で現に新しい位置が……』
『西洋の経済的な離陸上昇が、資本の蓄積を可能にしたさまざまな方式とともに始まったとすれば、伝統的で祭式的で暴力的で費用のかかる権力形態、しかも、やがて通用しなくなって服従強制の巧妙で計画的な一つの……』
何を言っているのか理解出来ない。諦めて、ため息をついて書架に戻すと、「あ」と泉さんが声を上げた。彼女は両手に開いた本の上に目を落としている。僕が近寄って泉さん

の手元をのぞき込むと、本の間には少し色あせた写真が挟まって、線の細い女性と、小学生くらいの少年と、彼と同い年くらいの少女が写っていた。背景は、多少印象は変わってはいるがこの家の居間だろう。

「ねえこれって」

泉さんが呟く。

「ええ、おそらく」

多分、姉と、木村学と、彼の母親だろう。博美さんが写っているところを見ると、もう十年以上も前に撮影したものだと解る。博美さんと姉は微笑んでいて、まだ幼い木村学は恥ずかしそうに頭を掻いている。三人は仲良く寄り添っていて、知らない人間に見せたら、家族だと言っても信じる筈だ。

「とても幸せそうね」

泉さんは言った。

そうだなと僕も思う。本当にとても幸せそうだ。

どうして、このまま穏やかに時間が流れてくれなかったのだろう。この写真の時間から年月が過ぎた。その間に一人は亡くなってしまい、一人は殺人を犯し、一人は父親との関係の果てに日常生活を捨ててしまった。しかし、現実の時間の流れとは関係なく、写真は未だに温かく平和な瞬間を凍りつかせている。

もし、この雰囲気のまま平穏に時が過ぎたなら、殺人など起こりもせず、誰も傷つくことがなく、今でも当たり前の暮らしをしていたかもしれないのに。

「このままじゃ、そのうち捨てられちゃうかもしれない。誰かが預かったほうがいいんですかね。どう思いますか？」

僕が言うと、泉さんは、

「私は、ここに挟んで本棚にしまっておいたほうがいいと思うな。もしかしたら木村君が大事にしまっていたのかもしれない。いつかこの部屋に帰ってきたとき、なかったらがっかりするでしょう？」

いつかこの部屋に木村が帰ってくることがあるとは思えなかったけれど、僕は泉さんの言葉に大人しく従った。

要するにそれは、僕の母が新しい家に昔そっくりの姉の部屋を残しているのと同じ意味なのだろう。

翌日に泉さんや富子老人と一緒に墓参りに行く約束をして、僕は街に彷徨い出た。アスファルトの上を歩いているうちに、どんどん変な思念が頭を回って、気がふさがってきた。

空はまだ青かったが、影はずいぶんと長くなっていた。繁華街には若者があふれ、笑顔で何かを話している。普段なら僕もうまく溶け込める筈だけれど、今この瞬間を友人と過

ごすとしたら自然に笑える自信がなかった。自分はみなとは違う不潔な生き物だという意識が僕の平常心を苛んでいた。いやな感覚が僕の思考に黒い影を作っている。

いつもだったら結構上手くこの気持ちを押さえ込める筈なんだ。でも今日はちょっと無理だ。木村学の家に行ったのが良くなかったのかもしれない。新聞上で見る彼は多少人間味のあるエピソードがあるにしろ、大筋においてはただの奇妙な殺人者であることは変わらない。そこに書かれているのは殺人者という別種の生き物でしかない。だけれど、実際には祖母もいれば平和な少年期もある平凡な人間で、子供の頃は家族や友達と写真を撮ったりもしている。きっと時々は写真を眺めながら過去を懐かしく思ったりもしたのだろう。

毎日色々な屈託があったに違いない。それでもまともなふりをしていた。でもそれは虚しく終わり、結局全て壊してしまった。そのとき彼はどんな気持ちだったのだろう。

僕もまた人目を隠れて生きていかなければならない人種だ。誰も僕を受け入れることなんか出来ないし、それを望むのも間違いなんだろう。だって、「僕は死体が好きです、自分を正しいと思いたいし、あなたにも認めて欲しい」なんて人に言えるわけない。言ったところで結果は見えている。

もし僕にも誰かに理解されることがあるのなら、まともなふりをして表面だけをみなに合わせて、その場その場をやり過ごしながら死ぬのを待つだけの人生を送らないで済むのかもしれない。そうなったらどんなに自由に日々を過ごせるだろう。もしそれが不可能で

も、望んだことを勝手に行うという手段もある。現に、木村学は法律など無視して、人を殺した。出来ないわけではない。

希望を感じてしまうと、苦しい。そんな望みはない。あってもしてはいけない。自分は間違っているんだから何も望むなと言い聞かせる。

サオリに全てを話さなければ良かったと後悔した。今思えば、あのとき僕は、もしかしたら彼女なら解ってくれるんじゃないかと期待してたんだろう。彼女は自分自身が汚辱にまみれているし、僕に全面的な好意を示してくれていたから、僕がこんな有様でも理解してもらえると、そう思っていたんだ。意識したわけではないけれど、心のどこかで。

世間の鼻つまみ同士なら傷を舐め合えるんじゃないかって、そう考えていたんだ。広田が彼女を馬鹿にしていたのとあまり変わらない。下劣な根性だ。自分自身はともかく、サオリまで見下している。こんな僕はサオリに合わせる顔がない。

それが解っていながら、僕はまだサオリに会いたいと思っている。浅ましいことだなと思う。どうせ、また口が滑ってしまうぞ。きっと僕は本心では誰かに話したくて話したくて仕方がないのだろう。このまま過ごしていたら、いつの日か僕はきっと自分を完全に剥き出しにしてしまうに違いない。その後、僕はきっといたたまれない後悔に苛まれるだろう。もうこれっきりにしたほうがいいんだ。僕は一生、心を許したくなる相手を見つけてはいけない。他人を求めてはいけない。

いつまでもつだろうか。夏の太陽が水たまりを蒸発させてしまうように、背に当たる光線が今すぐ僕を跡形もなく焼き尽くしてしまえば良いのにと思った。今ならまだ僕は多くを抱えたまま終われる。

僕は眠剤を取り出した。唾液が少しも出なくて、ベタベタする口腔の内側に錠剤が貼りつくので、噛み砕いた。病院で眠れないと言ったとき、医者は毎日の不安感は規則正しい生活ときちんとした食事である程度は緩和出来ると言っていた。もし僕が本当のことを全部喋っていたとしても、やはり同じ言葉を言っただろうか。

そういえば今日は何も食べていない。何か口にしたほうが良いとは思ったが、まるで食欲を感じなかった。今朝目を覚ましたときから、生理的な欲求が全て消滅してしまっている。そして今も薬が効いてくる気配がない。少しは気分が鎮静してくれなければ困る。僕はさらに錠剤を追加した。こんなに不安定な気分は通り雨のように一時的なもので、この瞬間さえ乗り切れば、また落ち着いて、いつも通り生活出来ることは解っている。耐えることには慣れている。

いつの間にか街は血の色に染まり、太陽が西の大地に沈みかけていた。夕日を見つめていると突然体が重くなって、コンクリートの壁を背にアスファルトに座り込んだ。薬が急速に効いてきたのか意識が強制的に閉じられようとしている。

急にへたり込んでしまったから、通行人は僕を注目しているだろうか。意識が薄れて、

体に力が入らず、顔を挙げて確認することさえ出来なかった。自分の上半身から力が抜けて崩れてゆくのがわかったが、体のどの部分も動かすことが出来なかった。ちょっとみっともないけれど、別にこのまま倒れたって僕は構わない。もうすぐ、地面に頭からぶつかると思われたが、それだっていい。

そのとき何かが僕の上半身を支えて、頭は柔らかいものに包まれた。

「大丈夫？」

女性の声のように聞こえたが、誰とも判別がつかなかった。僕の頭はおそらく、その胸に埋もれているのだ。返事をしようと思ったが、幽かに呻き声のようなものが出せただけだった。

「すごく眠いんだ。寝かせて欲しい」

もう一度力を振り絞ってそれだけ言った。ろれつがうまく回らず、相手に正確に伝わったかどうかはわからない。それきり僕は意識を失ってしまった。

目を覚ますとすっかり暗くなっていた。薬がまだ残っているせいか気分は落ち着く、というよりも感情が石のように鈍くなって、何も感じることが出来なくされていた。頭の下に柔らかいものが敷かれていたので、手に取ってみると、丸めたタオルだった。体を起こすと、アスファルトの上で寝ていたせいか、それとも先日の打撲がまだ癒えていないからか、あちこちが痛んだ。意識が明瞭にならず、上半身がふらふらと揺れた。

「目を覚ましたの？」
理由もなく僕はサオリだと思い込んでいたが、そうではないと気がつくと少なからず失望した。目の前に、少女が白いエレキギターを抱えて座っている。服装もメイクも、こんな奇抜な人はこの町には二人といないだろう。志村麻里だった。
「見つけて近づいたら、いきなり倒れて眠いとか言ってるんで驚いちゃったよぉ。疲れてたのならどこかちゃんとしたところで休んだほうがいいよ」
麻里は、場にそぐわぬ明るい声で言った。
「面倒みてくれたの？」
「だって謝らなくちゃいけないって思ってたんだもん。気分的には釈然としないし、すっごくむかつくけど、だからって話も聞かないでいきなりあんなことするなんて、それはいけないでしょう？　マリは、悪いと思ったらちゃんと反省するんだから」
修理に出していたギターを取りにいったその帰りに偶然出くわしたのだそうだ。意識を失ってしまった僕は簡単には目を覚まさず、諦めてギターをいじりながら待ってくれたらしい。時計を見ると二十三時を少し回ったところで、四時間ほど待たせた計算になる。
僕は彼女に礼を言った。そして先日自分は彼女が被害者の妹だったことも知らず、また事件の重大さを正確に認識していなくて無神経な振る舞いをしてしまったことについて、詫びた。

「あなたが謝ってもなぁ。それに、私もなんにも話さないでコップぶつけちゃったし。顔に怪我してるのマリのせいだよね。ごめんなさい。でも、寝てるの守っててあげたんだからこれでおあいこだよね」

麻里はそう言うと、ギターをケースに仕舞い立ち去ろうとする。僕は立ち上がったが足下がふらついて壁に手をついた。「大丈夫ぅ？」と麻里は言う。

「平気」

実際、僕は回復していた。少なくとも、先ほどまでの不安定な精神ではない。今なら、何があっても冷静な気持ちで対処出来るだろう。

「でも、少し訊いていいかな？　お姉さんのことだけれど」

僕が言うと、麻里は表情を強ばらせた。

「いやだよぅ。もうあんまりそのこと話したくないよ。それに、あなたって結局敵なんでしょ？　なんで話さなくちゃいけないのぉ？」

「オレは、今まで本当になんにも知らなかったんだ。姉弟がしたことなのにね。もちろん、どうしてもとは言わないよ。ただ、もし話してくれるんならジュースかけてもグラス投げつけてもいいから。駄目かな？」

「うー」

麻里は眉間にしわを寄せ唇をとがらせて考え込むと、

「ホントに悪いと思ってるのぉ？」
「思ってるよ。それに、家族がしたことを知る義務があるんじゃないかとも思う」
「ホントなのかなぁ」
また少し彼女は考えて、
「信じるよ。じゃあ、喫茶店行こう」と言った。
駅前の喫茶店に入ると麻里は紅茶を頼んだので、僕は背筋を冷たくした。そりゃ、何かけてくれても良いとは言ったけれど、熱湯をかけられるのは予想外だった。戦々恐々としていたが、幸いにしてティーカップは空を飛ぶことなく、僕は心の中でそっとため息をついた。彼女はそんな僕に気づかず、難しい表情のまま黙って紅茶をすすっている。
そこは古いスタイルの喫茶店で、グレン・ミラーが控えめの音量で流れていた。後ろの席には若者たちのグループが入っていて時折大きな笑い声を立てる。話を聞いていると、大学のサークルの集まりらしい。海に旅行に行く計画を話し合っている。
話題の中心は砂浜でいかにして女性と親しくなるか、そして親しくなったあとにどのように振る舞うかについてであった。「女なんか結局さ、優しくして褒めまくれば良いんだよ」と一人が言ってまわりが同調している。
麻里は紅茶を飲み終わると、カップを置いた。
「あの日、夜に警察から電話があったの。それが、最初だったかな」

そして、話しはじめた。

被害にあった志村詠美は病院で一週間あまりを過ごした。退院した直後はまだ体に包帯が巻かれていて、顔にはうっすらと痣も残っていた。詠美は麻里の顔を見て微笑んだが、それが作り笑いだったのは幼い麻里の目にも明白だった。

詠美の口から事件について語られることはなかったが、話題が話題だけに学校や近所では面白おかしく脚色された形で噂が広まった。詠美が木村にしたことも、木村にされたことも実際よりずっと過激なものになっていた。被害者ではあったが、もともと派手だった彼女を良く思っていない者は多く、過去の関係のない話まで話題にされるようになった。虚実とりまぜたその噂が、常識のように近隣に広まった頃、教師に転校を勧められ、詠美はそれに従った。

少し離れた親戚の家から新しい学校に通ったが、その生活も長くは続かなかった。転校先でも噂はつきまとっていたらしい。なんとか気丈に振る舞おうとはしていたが、何かが切れてしまったのだろう。受験を前に学校を辞めてしまい、麻里が言うには「かなりユルい女の子がもしラリっていたとしても一目でそうと解るようなクズに騙されて」結婚して家を出て行った。そして家族も含めて、それまでの彼女を取り巻いていたものから完全に姿を消してしまう。

数年して、詠美は突然実家に帰ってきた。件（くだん）の男性とはいつの間にか離婚し、お腹は父

親のわからない子でふくらんでいた。かつての輝いていた美少女ぶりは影を潜め、そんな歳でもないのにすっかりみすぼらしく老けてしまっている。今は外に出ることを恐れ、家から一歩も出ないで誰かの愚痴を言ったり泣いたりしながら暮らしている。麻里にもきつく当たることが多い。あの優しかった姉が、こんなに変わってしまうほど辛い思いをしたのが悲しいと言う。

「確かにお姉ちゃんもいけないことしたかもしれないけど、もう少しみんな優しくしてくれたっていいじゃない。いやらしいことばっかり言って、ひどいよぉ。これから一体どうしたらいいの。なんでこんな目に遭わなくちゃいけないの」

今にも泣き出しそうな顔で、麻里は言った。目から涙がこぼれかけて、彼女が手でこするとマスカラがパンダのように目のまわりを黒くする。加害者の家族である僕は何も言うことが出来ずに沈黙していた。自分のコーヒーカップを取り上げ、傾けてから、もうとっくに空になっていたのに気がついた。後ろの席の学生たちが、大きな声で笑った。

『木村家之墓』と刻まれた御影石に柄杓で水をかけると、雨上がりのような匂いがした。

菊の花を供え、線香を焚き、手を合わせて黙禱を捧げる。富子さんは般若心経を口の中でボソボソと唱えている。僕はこの墓に埋葬されている人々についてほとんど何も知るところがないので、居心地の悪い思いをした。

「まったく、学も刑務所でもなんでも行って罪を償って、早く家に帰ってくればいいのに。どこで何をしているのやら。もう忘れちゃったのかねえ」

読経を終えたあとの富子さんの言葉は独り言のように呟かれたので、僕は何も言うことが出来なかった。

まだ墓参りには少し早い時期だった。どの墓にも供花がなく墓石と卒塔婆だけが林立する様はいかにも殺風景だ。

泉さんは急用が出来てしまったので、僕と富子さんの二人で墓参りに来ていた。富子さんは足を弱くしているらしく、背を丸め杖にすがるようにして歩く。墓地への石段を登る際は今にも倒れそうだったので、手を貸そうとしたらかえって怒られてしまった。

そこは寺に隣接する小さい山の斜面を削って作った墓地で、街のほうから風が吹きつける。僕はその中に幽かな排気ガスの匂いを感じ取れた。

「木村さんのご親戚の方ですか？」

手桶と柄杓を返しにいくと住職にそう訊かれた。僕は説明がややこしくなりそうだったので、そうですと答える。すると住職は僕を待たせて、奥に引っ込んで何かを持ってきて僕に手渡した。それは、金で出来た上等のカフスボタンだった。つい先日、墓のところに落ちていたもので、おそらくお参りにきた人物が落としたと思われる。木村家の墓は敷地の奥まった場所にあるので通りすがりの人間が落としたとは考えにくい。関係者だろう。

心当たりの人が居たら渡して欲しいとのことで、僕は受け取った。
「私の他にうちの墓なんかに来る人間はいません」
富子さんは即座に否定した。木村の家に繋がりのある人物は、自分を措いては他に学しかいない。彼がこんなところに来る筈はないし、何かの間違いじゃないか。そんなものは受け取れないと富子さんは固辞した。
でも僕は可能性がそれしかないのならあるいは木村学が来たのだろうと考えた。僕からすれば姉がこの街に来ていた事実があるわけだから、そこに木村学が一緒にいてもおかしくはない。もしかしたら、墓参りに帰ってくるのが主な理由で、そのついでに姉はうちへ電話をかけたのかもしれない。今の段階では確証は何もないけれど、彼が墓参りにやってきたと仮定するのはそれほど無茶苦茶な想像でもないはずだ。だけれど僕は、その考えを富子さんには話さなかった。
その夜僕は泉さんを呼び出した。僕は今まで誰にも話さないでいた姉からの電話のこと、そしてそれがきっかけになって今回自分は調べてみるつもりになったことを、彼女に打ち明けた。
先日騒々しい店を選んだ失敗を教訓にして、今日は少し落ち着いた雰囲気の薄暗いバーを選んだ。並んでカウンターに腰掛けている。泉さんはバーボンをロックで、僕はジントニックを飲んでいた。泉さんは姉が電話してきたというくだりに特に驚いていた。

「それは、本当に木村君も来ていたかもしれないね。お坊さんは、見かけたのかな」
「富子さんを帰したあと、訊いてみましたが、それらしい人物は見ていないそうです。でも木村さん本人なら人目を避ける筈ですし、当然ですよね」
「そうね。でも、理紗ちゃんもまだ元気で過ごしてるんだね。無事なんだね。良かった」
泉さんは、ため息をついた。
「富子さんにも、この話をしたほうが良かったでしょうか？」
「洋一君の判断は正しかったと思うわ。まだはっきりした話じゃないし、そこまで来てるのに家には立ち寄らなかったと知ったら、複雑な気持ちになるわよ。ただでさえふさぎ込みがちなのに」
「僕も複雑な気持ちですよ」
残り少なくなったグラスを傾けると、氷がグラスに当たって幽かな音をたてた。それから、昨夜訊いた志村詠美の近況について話した。
「志村先輩、帰ってたんだ。転校してしまうまでのことは知ってたけれど。つらい話ね」
「酸鼻ですよ。これが、姉が恋人と二人でやったことなんですよね。そして僕は姉に同情的なんです。いやなもんです」
「大丈夫よ。世の中には完全な善人もいないかもしれないけれど、そこまで酷い人もいないと思うわ。理紗ちゃんや木村君は間違えたかもしれないけれど、悪い人ではないわよ」

「泉さんは理想主義者ですね」
「そうかしら？　ミステリードラマだってそんな感じよ。決まって最後にどこかの屋上に刑事二人が集まって、悲しい事件でしたね、とか言うんだから。知らないの？」
「ドラマなんかロクに見たことないですよ。それに、なんかそれって不誠実な気がするな。敵味方に分かれてるとき、どっちにも味方するなんてコウモリみたいですよ。思ってしまうのは仕方ないかもしれないですけれど」
「洋一君て潔癖なのね。疲れるでしょう」
　また僕は、余計な話をしている自分に気がついた。飲酒も控えたほうが良いのかもしれない。
「とにかく、昨日志村さんと話しながら、僕はもう事件について調べるのはこれくらいで良いかなと思ったんですよ。調べることで、当事者を傷つけてるような気がする。そこまでして相手に共感しても、僕には姉の敵に回るつもりはないし。これ以上詳しいことは知らないで、もし姉が帰ってきたら、単純に弟として支持しますよ」
「それは一つの手段ではあるわね、でも私としては悲しいなあ」
「何がですか？」
「若い人には、もっとこう真実を究明する勇気とか、世の中の全てを理解しようとする覇気とかがあったほうがお姉さんとしては嬉しいのよ。世界の深淵は無限の驚きや発見を隠

していうわ」
「大げさですね」
「そうかしら」
「知りたくもないような、いやなことも一杯ありますよ」
「それを乗り越えるのが、若さでしょう？　せっかく生まれたんだから、良いものも悪いものもたくさん見ないと勿体ないと思わない？」
「またオレをからかってるんですね。泉さんだって若いじゃないですか」
「そうよ、私も頑張るから、洋一君も頑張りなよ。少年よ、大志を抱け」
　泉さんは、僕の髪の毛をくしゃくしゃにして撫でた。そうは見えないのだけれど、案外酔っているのだろうか。それとも僕を犬か何かと同じように考えているのだろうか。彼女が手を離すと、僕の髪の毛はぐちゃぐちゃに乱れている。別に構わないけれども。
「酔っぱらってるんですか？」
「そんなことないわ。それより、洋一君は将来なりたいものとかないの？」
「あっ、それなら、ジャイナ教って知ってますか？」
「確か、インドの餓死教団でしょう」
「そうです。生き物を殺すことを一切せずに、断食して餓死するのが最良で、そうやって死ねば解脱出来るっていうあれです。あの考え方ってすごく僕に向いてると思うんですよ。

出来うる限り悪いことをしないで生きるって良いなあ」
「つくづく潔癖なのね」
「ほっといてください。だって、解脱ってカッコイイじゃないですか。そのうち日本でも流行ってくれないかな。肉体を鍛えるスポーツ選手がモテるのなら、精神を鍛える僧侶がモテても良いと思いませんか。やっぱりこれからは出家ですよ。そして苦行。くよくよ悩んだりしないで強く生きたいですよ。規則正しい生活と質素な食事」
僕が真顔で言うと、泉さんは笑った。
「とにかく、これ以上迷いたくないんです。もう、調べるのは終わりです」
「残念ね」
泉さんは手の中のグラスを見つめながら呟いた。

朝から掃除をはじめて、夕暮れになる頃にやっと家の掃除が終わった。覚悟はしていたけれど、どこもかしこもまるで絨毯のように埃が積もっていた。掃除機のパックをいくつも取り替え、ぞうきんを絞るバケツの水を何度も汲み直し、汗が目に入って仕方ないのでタオルを額に巻き、裸になった上半身にはべっとりと埃が付着してしまった。
磨き込んだ床は、開け放った窓から差し込むオレンジ色の光線をはね返し、きらきらと輝いている。最初からここまでするつもりはなく、やりはじめると止まらない自分の几帳

面な性格が恨めしかったが、仕事自体は満足出来る結果になったので清々しい。
だけれど、こんなに丁寧に掃除をしたのに、次はいつ誰がこの家を訪れるのだろうかと思うと虚しい。第一、僕自身が再びここに来ることがあるとは思えない。姉がまた訪れることは、もっとありえない。誰も見ないまま、また埃が積もってしまうのだろう。
急に満足感が薄れてしまい、僕は帰る準備を始めた。全ての雨戸と窓を閉めると部屋は暗闇に閉ざされ、最後にドアに鍵をかけるとき、僅かに寂寥感を覚えた。黄昏時はあっという間に終わり、空には星が瞬いていた。
街のあちこちに提灯がぶら下がっている。今日から夏祭りがはじまる。良かったら少し見ていかないかと昨夜泉さんが言っていた。姉たちの事件が起きたのも、ちょうど夏祭りの夜だったが、あの頃とは随分様変わりしてしまったらしい。
祭りの主会場である中央公園は隣接する林を整備して取り込んで面積を倍くらいに増やしたが、祭りの規模はそれ以上に大きくなったのだそうだ。人が集まっている場所に顔を出すのは嫌いではなかったが、今日はあまり気が進まない。早く自分の家のベッドで休みたかった。
駅の近くの舗道でも、あんず飴売りや綿菓子屋が商売をしている。確かに規模が大きくなったのだと実感する。祭り会場へ向かう浴衣の男女の流れに逆らって、僕は駅へ歩いた。
電車を乗り継ぎ帰ってきた。見慣れた風景に囲まれると、ここ数日に起きた出来事が全

部夢のように思えた。姉からの電話、泉さんや志村麻里との出会い、人に殴られたりもしたっけ。ちょうど、サオリと出会ってから急に色々なことが一遍に起きたんだ。時間にするととても短い。今サオリはどうしているのだろう。数日過ごすには充分なお金を渡してあったはずだから、まだどこかで遊んでいるのだろうか。それとも家に帰ったのかな。

昼は自然が多くて良いなと思うけれど、夜になると植物の生い茂った場所はそっくり暗闇になって不安感を煽る。土地の使い方がおおらかで、家と家の間隔が広い。灯りの消えた僕の家は、遠くから見るとすっかり背景に溶けてしまう。入り口に近づくと防犯のライトが点灯し、帰ってきた実感を呼び起こす。

玄関の前に立ち、ポケットからキーホルダーを取り出し家の鍵を探していると、視界の端に白いものが入った。視線をやると、白く伸びた人の足が庭の芝生の上にあった。人間が庭に倒れている。昔野良猫が旅行に行っている間に庭で死んでいたのを思い出し、鼓動が速くなった。僕は警戒しながら、庭のほうに回る。

身を丸めて紙バッグを抱えるように倒れているのは、サオリだった。胸が幽かに上下している。安らかな顔をして、どうやら眠っているらしい。何故こんなところに居るのだろうと疑問を抱く僕の鼓動は、更に一段と速くなっている。諦めて抑えつけていた感情が、また騒ぎ立てようとしている。

僕は自分の内面から目をそらしつつ、彼女の肩を掴んで、揺すった。

「うぅん、ん……」

サオリは何か口の中で呟きながら、うるさそうに手を払って、依然として起きない。よくこんなところで熟睡出来ると、半ばあきれた。サオリの日常的な態度に、僕は緊張が解け、

「風邪ひくぞ。ほら」

声をかけながら乱暴に両手で揺すった。すると、バッグから何か紙袋に包装されたものがこぼれた。拾い上げると手に重く、そして四角い形をしていたから、パックに入った果物を想像して開けてみた。

パックではなくて、紙箱だった。そして果物ではなく、なんだろうこれは？ パッケージに書いてある文字を読み取ると『ぬきぬき毛沢東』。

言葉の意味は解らないが、とにかくすごい語感だ。箱の裏の説明書きを読むと、

『男を知らないロリロリ美少女のヌレヌレマ○コをN○SAの技術で完全再現？ これまでにない密着感、ネットリ感はまさに性器の文化大革命！ 恋人なんかもう要らない、貴方はこの未知なる快感に耐えられますか？ 特製マッサージローション付き』

僕は一文字読む度にゲッソリして気力が根こそぎ奪われる感覚がした。真剣な気分になって損した。それはともかく、どうやらこれは男性の自慰のための補助用具らしい。なんでこんなものをサオリが持ってるのだろう。

もう一度肩を揺すると、サオリは漸く目を覚ます。まぶたをこする彼女にそれを見せて、

問いただす。
「あ、もう見たの？　どう？」
　サオリは、泥のついた顔に満面の笑みを浮かべる。
「どうと言われても……なんなのこれ？」
「ぬきぬき毛沢東だよ」
　サオリは誇らしげに断言した。
「いや、それは知ってるんだけれど……」
「ねえ見てよ。それとね、えっとね、これが『電動トロツキー』で、こっちは……、そうだ、『ぺろぺろチェ・ゲバラ』だよ！　あとね……」
　嬉々として騒ぎはじめるサオリを家に入れて、リビングに向き合って座ると彼女は絨毯の上にマルクス主義者が見たら怒りのあまり卒倒するかもしれないグロテスクな形状の共産革命家シリーズをしなやかな指先で並べはじめた。途中でうんざりしてやめさせたが、紙袋には他にも似たような道具が詰まっているらしい。
「なんであんなところで寝てたの？　危ないよ。オレに用があるなら電話すれば良かったのに」
「でも、だって、お金全部使っちゃって電話出来なかったから、ここで待ってたの」
「ずっとって、二日も？　何やってるんだよ。そこまでしてこんなものを買ったのか。し

ようがないな、駅前のＡＴＭならまだやってるかな。少し待っててくれる？」
「いいの、お金はもういらない。欲しいものは買ったから」
サオリは、首を振って強く断言する。
「欲しいものって、これがなんだか解って買ったの？　何言われたかしらないけれど、たぶんきみ騙されたんじゃないかな。もし女性用だったら、まあ、それにしたってこんなにたくさん買うのはおかしいけど、でもそれなら五千歩くらい譲れば納得できる。だけどこれ、全部男性用じゃないか。歩いてブラジルにたどり着くくらい譲ったって納得出来ないよ」
「そうだよ。だって、ヨウイチのために買ったんだもん」
「オレのため？」
言葉を失ってしまった僕に、サオリは説明する。
「ヨウイチの話を聞いて、どうしたら良いかわからなくて、外を歩いてたら、知らない人が迷ってるんですかって話しかけてきてね」
「ついていったの？」
「うん」
それは、サオリが前に騙されたパターンと同じ始まり方じゃないか。
「ヨウイチがえっち出来ないって気にしてるから、それが治るようにしたいって、その人に話したんだ。そしたら、一緒にお店に行ってくれて、選んでくれたの」

「まったく、何してるんだろう。変なことされなかった？　どんな人だった？」
「女の人でね、前は警察の人だったんだって。だから大丈夫だよ」
「なんでそんなことしたの？」
「だって、ヨウイチはえっちが出来なくて辛い目に遭って来たんでしょ？　これすごいんだって。トロツキーはね、男の人のお尻に入れて、チェ・ゲバラは男の人のあそこに塗ると良いんだって……それでね」
サオリは真剣な顔で道具の一つ一つの用途、用法を説明する。方向は間違っているが、彼女なりに、どうしたら僕のためになるか色々考えてくれたのだろう。
「急に居なくなったから、嫌われたのかと思ったよ」
「えっ、なんで？」
サオリは、目を丸くして僕を見つめた。
「まあとにかく、僕のためによく考えてくれて、嬉しいなと思う」
「そんなこと、ないよ……」
彼女の顔は、みるみる赤くなって、目をそらす。そのとき僕は、自分で思っていたよりもずっと彼女を好きになっていることに気がついた。どうにも自分の気持ちをもてあましてしまい、困惑してしまう。
「え、えーとね、あとこの『ギンギンレーニン』っていうのがまたすごくて……」

「もう良いんだ。なんだか、自分がつまらないことで屈託していたんだなって思えるよ」
「そ、そんなことないよ！　本人が辛いって思うことは、それは本当に辛いんだから。私、ヨウイチが辛い思いしてるなんて嫌だよ。一緒に頑張ろうよ！」
「そうだね。でも、もうこのままでも大丈夫だと思うんだ」
「大丈夫なの？　だって、まだなんにもしてないよ。なんでも言ってよ？　それとも、話したくないの？」
　サオリは不安そうに僕の顔をのぞき込む。
「いや、違うんだ、ごめんね。オレはサオリに対して酷いこと考えてた。余計なことを考えすぎてたのかもしれない。本当はもっと簡単だったんだなぁ」
　サオリはまっすぐな視線でじっと僕の目を見つめている。断片的な僕の言葉が、理解出来なかったのだろう。でも、僕自身が解れば、それで良いことだ。僕は意志に逆らうのをやめて、初めて自分から彼女に手を伸ばす。
「ヨウイチ？」
　抱きしめると、その背中は驚きで硬直していた。頭を撫でると、次第に柔らかくなり、彼女も僕の背に腕を回し、強く抱きしめる。彼女が握っていた『ギンギンレーニン』が背に当たり、僕は苦笑する。

夜が更けて時計の針は零時を回る。月光の幽かな青い光が窓から差し込んでいる。サオリは僕の隣で静かな寝息を立てている。僕は手を伸ばしてその顔に触れる。頬、唇、顎、そして胸の順番に手を移動させる。僕のTシャツを身につけていて、ブラジャーはしていない。胸のふくらみに手のひらを当てると、乳首の存在がわかる。下半身はパンツを穿いているだけだ。

僕は起き上がると、彼女の体の上に掛かっているタオルケットをめくった。それから、Tシャツの裾に手をかけて万歳の形をとらせながらそれを剥ぎ取る。白いパンツを、なめらかな足の曲線に沿わせて下ろし、つま先から取り上げる。全裸になった彼女を仰向けにベッドの上に寝かせ、手も足もまっすぐ伸ばす。長く黒い髪が、白いベッドシーツと肌の上で乱れている。彼女はそれでも起きない。薬がよく効いている。

「私は嫌じゃないのに、考えすぎだよ」

僕が性行為を何故出来ないのか、それについてどう感じているかを、問われるままに説明するとサオリはそう言った。

「きっと、私をモノみたいにすればいいんだよ。そしたら出来るかもしれない。ね、試してみようよ」

僕は気が進まなかったが、サオリは強く主張して、薬を飲んで眠った。強度の不眠症の僕を眠らせるほどの効き目だから、普段から寝付きが良い彼女にはどんなに強く作用する

だろう。
部屋の明かりをつけると、サオリの一糸纏わぬ裸体が鮮明になる。体を露わにしているのに、なお無造作に手足を布団の上に投げ出し、口元を動かし、ときどき何か寝言を呟く彼女の姿はまるで死体……に見えるわけなどないな、やっぱり。それはいくらなんでも無理だよ。

彼女は色白だとはいえ、肌の表面はつややかで、触れると温かく、鼓動も感じ取れる。胸は静かに上下しているし、生きている匂いもする。生命力に満ちあふれたこの肉体を死体のように扱うなんて到底出来る筈がない。思った通りだ。サオリの発想は無邪気すぎる。眠っているなら死んでいるのと変わらないように扱えると言い張っていたサオリを思い出して、僕はおかしかった。彼女は死ぬってどういうことだか少しも知らないんだろう。

服を着せようとしてから、ふと気になって、彼女の体のあちこちを調べてみた。体のどこにも傷だとか痣はなく、綺麗なものだ。一般的な意味とは違うのだろうが、それなりに大事に育てられてきたのだろう。あるいはと考えていた、虐待の跡などは欠片もなかった。気になっていたのだけれど、彼女の義父とは一体どんな人物なのだろう。それに、サオリは本当に家に帰るつもりなのだろうか。今度家に帰ったら、警戒も厳しくなり、二度と家から出してはもらえないような気がする。僕は、どうすれば良いのだ。もうサオリを手放したくはない。

しかしそのときはやってきた。
夏休みは終わりかけ、母親からは帰ってくる具体的な日時についての連絡があった。泉さんからも電話があって、これから仕事に戻るが何かあったら遠慮なく連絡して欲しいとのこと。木村や姉について、近所の人に姿を見かけたか聞いて回ったそうだけれど手がかりはなかったらしい。精力的な人だ。
その日の朝食はサオリの好物のフレンチトースト。いつの間にか、僕が作って彼女が後片づけをするという役割が出来ている。短い間だけれど一緒に生活をするうちに、ある程度は目で会話出来るようになっていた。彼女はシナモンが苦手なので、ホイップクリームだけを乗せ、母親が集めている膨大な種類の紅茶から、どれが良いのかわからないが適当なものを淹れた。
「そろそろ、帰らないといけないかも」
食事の合間に、思い出したようにサオリは言った。覚悟はしていたとはいえ、僕はまだなんの覚悟も決めていない。漠然と、もう少し先になるんじゃないかと考えていたから、その言葉は不意打ちのように響いた。
「長く居てごめんなさい。今度は私のほうが何かヨウイチにしてあげるよ」
サオリは僕の内心も知らず、普段通りにそう言った。
「今度って、あるのかな」

「あるよ、何言ってるの？　すぐ会いにくるから待ってて」

彼女には人を疑ったり、他人の悪意を想像する感覚が欠けているが、僕はサオリみたいに状況を楽観視は出来なかったし、たとえ一時的なものになるとしても、義父との生活にサオリが戻る、その想像自体が耐えられない。

僕はここで、義父が今までサオリにしたことの意味や、戻った場合についての僕の見通し、僕がサオリに望んでいることを、はっきり言うべきだとは感じていた。喉まで声が出かかっている。だけれど、言葉が出てこない。

引き留めるべきだろう。ただ、引き留めた後、僕に何が出来るだろう。無責任にそんな言葉を口にするのは許されることなのだろうか。

「ごちそうさま。美味しかった」

僕が考えているうちに彼女はいつの間にか食事を終えていた。紅茶を飲み干すと、カップを置いて微笑む。それがきっかけになって、僕は漸く言えた。

「帰っちゃ駄目だ」

思ったより強い言葉が出てしまった。彼女は驚いた顔をする。

「ここで一緒に暮らすんだ。姉の部屋を使えばいい。両親にはちゃんと話すよ。サオリの事情を説明すればきっと解ってくれる筈だ。もし解ってもらえなかったら、そのときは、どこか二人で暮らせる場所を探そう。今やっと仲良くなりはじめたところじゃないか」

そこまで言ったとき、僕は姉のことが思い浮かんだ。
「すごく嬉しい」
サオリは言った。
「でも、家に帰らなくちゃいけないの。そして、ちゃんと義父さんと話したいの」
「でも」
「ねえ、聞いて」
懇願するように言ったので、僕は言いかけた言葉を呑み込んだ。
「あのね、義父さんが、いつも言ってたの。外の世界には人が一杯いて、怖いことばっかりで、そんなところに行っちゃいけないって。私もそう思ってたんだけれど、でも、そんなことなかった。面白い人一杯いるし、義父さんが思ってるほど外の人みんなが怖いわけじゃなかったもの。教えてあげなくちゃ。外には、息を潜めて私と家に閉じこもっているよりも、もっといいことがあるって。きっと喜んでくれるよ」
言葉で言って解ってもらえるなら苦労しない。僕はそう言いたかった。第一、サオリが思っているよりも、人はずっと狡猾で、致命的な場面でも頻繁に騙したり裏切ったりするものだ。その点に関しては、きっと義父の言ってることのほうが正しい。彼女の人を信じる心は素晴らしいけれど、現実的ではないと思う。今はただ何も知らないだけで、全てを知ったらもうサオリは同じようには振る舞えないかもしれない。今の彼女の美質が壊れて

しまう。
　でも、ふと思った。もしかしたら、サオリの義父はそんなに悪い人間でもないのじゃないかと。サオリは従順で、人を憎んだり刃向かったりはしないし、教えたことを素直に信じ込んでしまうから、何をしても許されるような錯覚に囚われてしまっているのかもしれない。実際彼女は全てを許している。僕が死体相手なら何をしても構わないと考えているのと同じように、そう思い込んでしまうのも無理はない。もしそうなら、彼女が指摘することで、彼は自分の間違いに気がつくだろう。
　ただ、気がついたとしてもサオリが言うように改心するとは考えられない。たとえ自分が間違っていたと気がついて、さらに一層恥知らずな人間に成り下がってしまおうとも、彼はサオリを引き留めるだろう。
　やはり、ちょうど今の僕が、そんな気持ちであるのと同じで。
「みんなが幸せになれたら、とっても素敵だよね」
　サオリは、笑っている。
「それは無理だよ」
　僕は、彼女から目をそらして、言った。僕のとがった言葉でサオリの笑顔がしぼんでゆくのが、見なくてもわかる。
「ヨウイチが言うなら、そうなのかな。でも、義父さんのことは私のほうがよく知ってる

から。ねえ、だから、ヨウイチが……」
「駄目だよ。行ってしまったら、きっときみはもう帰ってこない」
僕は、言ってしまった。自分がみじめなところに向かって落ちはじめていることに気がついていた。自分のひどい醜態に背筋が冷たくなった。
「そんな人なんかどうだって良いじゃないか。オレと一緒に居れば良いんだ。行かないで欲しいんだ。せっかくちゃんと好きになれたのに、離れたりなんか出来るわけないよ」
「でも」
「オレの言うことが、きけないの？」
僕は顔を上げて、サオリを見つめた。彼女は困惑の色を表情に浮かべている。
「そんなこと言わないで。大丈夫だよ、必ず帰ってくるから。外にヨウイチが居るのに、もうあそこに閉じこもって過ごすなんて出来ないよ」
サオリは、言い聞かせるようにテーブルの上にあった僕の手を両手で握った。今の僕は、彼女の目からどんな風に見えているのだろう。
「でもさ、サオリ……」
言いかける僕の言葉を遮って、
「私、世界で一番ヨウイチが好きだよ。信じて」
サオリは静かに微笑んだ。

CHAPTER-4

サオリが帰ってから三週間が過ぎた。母も家に戻り、学校では授業が開始された。蝉の声もほとんど聞こえなくなって、低く飛ぶアキアカネを見かけるようになってきた。
サオリからの連絡は、未だにない。あの日、僕は最寄り駅まで送っていって、改札口のところで別れた。別れ際、突然僕の頬にキスをすると、真っ赤な顔で「バイバイ」と手を振った彼女の姿が脳裏に焼きついている。
教室は夏休みの話題でもちきりだった。黒く焼けた生徒は、白いままの生徒をからかい、白いほうは受験生が遊ぶなんて間違ってると抗議した。そういえば、受験なんてものがあることをすっかり忘れていた。
広田は学校を辞めたらしい。詳細は公にはされなかったが、休みの間に何かしでかして辞めさせられたのではないかと言う噂だった。いつそうなっても不思議ではなかったので、誰もそれ以上の特別な関心は持たず、すぐに話題もなくなり、まるで最初から居なかったかのように広田の存在が消え去るまで半日もかからなかった。広田は、おそらく本人もそう自覚していたように、この教室の誰とも違う世界の住人だったのだろう。ふさわしい場所に帰ったのだと思う。僕にふさわしい場所はどこにあるのだろうか。

「九条君は、なんか良いことあったの？」
机についた腕に顎をのせてぼんやりしていると、同級生にそう言われた。
「みんなと自分は違うんだって顔してる。何か差をつけるようなことあったんでしょ？」
「そんなことないよ。ただの夏休みボケ」
「またまた、大人しそうな顔して、なんかいやらしいことしてたんじゃないの？」
「違うって」
僕は笑ってみせた。ただ座っているだけなのに、何か違和感を覚らせる態度をしていたのだろうか。気をつけなくてはいけない。
家に帰ると母はリビングでお茶を飲んでいた。僕を見つけると、声を上げる。
「お風呂場を掃除したら、長い髪の毛が落ちてたわよ。しかも、茶色いのと黒いの。私が旅行に行っている間に、一体何をしてたの？」
サオリのことも、姉のことも、この休みにあったことについて、母には何ひとつ喋っていない。知ったらきっと取り乱して、おそらく警察に連絡するだろう。それは市民の義務かもしれないが、僕はあまりあの周辺を騒がせたくなかった。通報するのが誰にとってもベストな選択なら、泉さんがそうするだろう。
僕は曖昧に笑って、その場を後にした。
「女の子のことは、きちんとしないと駄目よ」

背後から母の声が追いかけてくる。

部屋には、サオリが僕のために買ってくれた道具がベッドの下に紙袋ごと隠してある。これはどうやって処分するべきものなのだろう？　粗大ゴミ、になるのだろうか。だとすれば剥き出しで捨てなくてはいけないのかな。これを？

気がつくと僕は『ぬきぬき毛沢東』を見つめて顔をしかめていた。いま母がドアを開けたら大変なことになる。サオリの思い出といえばそう思えなくもないが、どうせ何か残すなら、もっと人に見られても困らないものを置いていってくれれば良かったのに。でも、この間抜けなところが彼女らしいのかもしれない。それにしても困る。

この置きみやげはともかく、サオリには感謝している。僕は自分で思っていたよりもずっと弱くて、あのとき振り切ってくれたおかげで、なんとか踏みとどまれた。今まで恋人が出来たくらいですぐメロメロになってしまうやつを心のどこかで馬鹿にしていたんだけれど、僕こそとびきりの馬鹿だったんだな。

それに比べて、彼女は僕が思っていたほど脆くないことも知った。たとえこのまま僕のところへ帰ってこなくても、どこかで彼女らしく強く生きていけるだろう。それならそれで、きっと悪くはないのだ。もし僕が必要になったら、電話をかけてくるだろう。

なんだか胸にものが詰まったような息苦しさを感じて仕方がないので、気晴らしに問題集を解いていたら思いの外集中出来た。母がドアをノックしたときには、もう日が暮れて

いる。この調子だったら受験も大丈夫なんじゃないかな。思ったより早く元の生活に戻れそうだ。

「これ、何かしら？」

夕食の呼び出しかと思ったら、母は一枚の紙を持って廊下に立っていた。表情に困惑した様子が窺える。母が差し出すのを受け取ると、あの古い家の通話履歴だった。電話料金の明細書と一緒に届いていたのだろう。そこには姉が利用した記録が記されている筈だ。

「ああ、母さんが旅行している間に久しぶりに見に行ったんだ。そのとき、電話がまだ使えるか、家の留守電にかけて確認したんだよ」

答えながら紙の表面に目をやって、そこに意外なものを見つけた僕は、思わず驚きを顔に出しそうになった。

「そうなの。私、てっきりあの子が帰ってきたと思って……」

幸い、母親は僕の内心には気がつかなかったらしい。この家への電話番号の下に、見知らぬ電話番号への通話が記録されている。姉は、僕との通話のあと、どこか他の場所へかけたのだ。電話機のリダイヤルから選んで抹消されていたということはつまり、姉に多少なりとも隠す意図があったのだ。それを僕は発見してしまった。その夜緊張しながら電話をかけると、歳を取った男性の、眠そうな声と繋がった。

バスを降りると、風が生臭かった。港が近いのだ。メモを手に町並みを歩き、鄙びた商店街の奥まで行くと、その鮮魚店はあった。店先に並ぶ魚介類は、漁港に近いだけあってうちの近所のスーパーなどではあまり見かけないものも多い。土曜日の昼前、客足が途絶えた店内で、エプロン姿に足元を長靴で固めた若い女性従業員が干物を並べている。

彼女に間違いない。あまりにあっけない遭遇に、急に現実感が失われて戸惑っていた。行き過ぎる車のエンジン音や、スズメの鳴く声といった、普段なら気にならないような街の雑音が、やけにはっきりと聞こえる。すぐに彼女は僕に気がついて、顔を上げた。

「いらっしゃいませ！」

元気よく挨拶をした姿は、記憶よりだいぶやせてた。髪は、ばっさりと切って短くしている。そして随分と小さくなってしまったように見えるけれど、これはきっと僕の身長が伸びたせいだろう。もう七年もの月日が流れて、僕はあの頃より三十センチ以上も大きくなり、体つきもすっかり変わってしまっている。

そこに居たのは、九条理紗、つまり僕の姉だった。

「観光でいらっしゃったんですか？」

固まってしまった僕に、姉は微笑みかけた。無理のないことだけれど僕だと解らないのだ。返事が出来ずに、ただ、じっと、見つめてしまう。

「もしかして、前に会ったことあります？」

僅かの沈黙のあと、姉は首をかしげた。そして僕は漸く名乗ることが出来た。
もっと驚くのかと想像していたけれど、姉は申し訳ばかりの驚きを浮かべただけで、それもすぐに笑顔の中にかき消えてしまう。
「一人で来たの？　よくここがわかったのね」
「あの朝、家からこの店に電話したでしょ？」
「お休みの連絡がちゃんと届いてるか不安だったからね。でも、ちゃんとリダイヤル消したのにな。何か方法があるのかな」
「昔は違ったのかもしれないけれど、今はうち、通話明細とってるんだよ。もっと注意を払うべきだと思うよ。たまたまオレが気がついたから良かったけど、そうじゃなければどうなってたか知れない。よくそんなんで今までやってこれたね。なんで見つかるんだよ」
「どうして怒ってるのよ？」
「怒るさ。ここに来るまでの間、オレがどんな気持ちだったと思ってるの？」
「それなら、どんな気持ちだったのか教えてよ？」
姉は近寄ると、上目遣いで僕を見つめる。僕は頭を掻いて目をそらしながら、
「知らないよ」
言葉はぶっきらぼうになってしまう。
「そんなに大きくなったのに、まだ子供みたいな言い方するの？」

姉が苦笑したとき、店の奥から、灰色の髪をした初老の男性が呼んだ。電話に出たのはきっと彼だろう。姉は返事をすると、僕にはす向かいの喫茶店で待つように言って、くるりとエプロンの裾を翻した。

メニューにカレーとラーメンがある喫茶店。そのくせ予想外に美味しかったコーヒーがなくなる頃、姉が現れた。

「店長に弟が訪ねてきたって言ったら、今日はもうお休みで良いって言われちゃった」

私服に着替えた姉を少し落ち着いた目で見ると、肌の色は前より青白くなっていたし、全体的に生気が失われ、透明な雰囲気を漂わせている。初めは単純にやせたと感じただけだったが、むしろやつれたと表現したほうが適切だったかもしれない。視線も、なんだか遠くを見ているようでうまく焦点を結ばない。全体に何か凄絶なものを漂わせていて、でもそれが姉を前より奇妙に美しくしている。

「人をじろじろ見て、どうしたの？」

サンドイッチとアイスコーヒーを注文してから、姉は言った。

「姉さん、なんか所帯じみたんじゃないの？　服とかおばさんくさいよ。気を遣わないとどんどん老けちゃうよ」

僕は感じた通りをそのまま言えなかった。

「あなた、こんなところまで、わざわざそんなこと言いに来たの？」

困ったように姉は言った。
「そういうわけじゃないけどさ」
僕はコーヒーをすすった。本当に困っているのは僕のほうだ。
せめて泉さんに相談すれば良かっただろうか。こんなとき、僕にはどうしたら良いのかわからない。やっぱり七年の時間は大きかったのかもしれない。会えば埋まるのではないかと思ったけれど、ちっともそんなことはなかった。せめて、もっと早く居場所がわかればよかったのに。たとえば、僕が志村麻里と会ったり木村の家に行く前に。今となってはどうしても素直に姉との再会を喜ぶ気にはなれない。素直に喜ぶことに決めた筈なのに。
「いま私はね、あそこのお魚屋さんでアルバイトさせてもらってるの。それで、ちょうど離れが空いてたんだ」
姉は、明るい口調で話している。
「元々娘さん夫婦がいたんだけれど、仕事の都合で東京に出ていっちゃったんだって。寂しいからここで暮らして欲しいって。海のそばで暮らすのって、ずっと楽しみにしてたんだけれど、実際に暮らすとね……」
僕はその平和な話題に、居ても立ってもいられなくなって、
「姉さん」
と、無理矢理割り込んで、言った。

「なんであんなことしたのさ」
　姉は黙り込む。僕は続けて言った。
「全部メチャクチャにしちゃうなんて。後悔するに決まっているのに」
「後悔は、していないわ」
　姉は静かな声で言った。僕の目をまっすぐ見つめて、その口辺には幽かに笑みさえ漂わせている。
「どうしてだよ？　酷いことをしたじゃないか」
「そうだね、あれだけのことをしたのにね。どうしてなんだろうね。わかんないや」
　僕は言葉が継げないで、絶句してしまった。そのとき丁度姉のオーダーが届いて、彼女はサンドイッチに手を伸ばす。
「私は体力仕事だからね、しっかり食べないと。洋一はお昼いらないの？」
　僕は返事をせずに黙っていた。姉は僕の態度を気にかける様子もなく、三角形のサンドイッチを指先で摘んで、端から食べはじめる。どうして平気でいられるのだろう。七年の間にそこまで変わってしまったのか、それとも僕が姉を知らなかっただけなのか。いずれにしろ、こんなのは嫌だな、会わなければ良かったのかもしれない。
「話してみたら、警察に通報したくなったかな？」
　姉はおどけた調子でそう言う。

僕はずっと沈黙を通し、姉もそれ以上は何も言わずに食事を続けていた。昼時が近くなり、喫茶店には客が増えてくる。彼らの言葉の訛りが、僕の使っているものとは随分違っていることに気がついた。地図の上でさえも興味をもって見たことがない場所まで来てしまっている。僕は自分がひどく場違いな気がした。

やがて姉のサンドイッチはなくなり、ナプキンで口元を拭うと、

「やっぱり、仕事に戻ろうかな」

窓の外に視線を向けて、独り言のように言った。このまま姉と別れてしまっては、それこそ意味がない。僕は何か言おうと、焦った。

「ちょっと待って」僕は、伝票を持って立ち上がろうとする姉を呼び止めた。「質問してもいい？」

姉は椅子に座り直し、聞く姿勢をとった。

「なに？」

僕は少し考えてから、

「姉さんは、いま幸せなのかな」

そう言うと、姉は僕の目を見つめた。そのとき僕は多分不愉快そうな表情をしていたと思う。姉はふっと笑って、

「そうだね、家に居たときより、今のほうがずっと幸せだよ。ごめんね」

申し訳なさそうに言うと、肩をすくめた。
「ねえ、それって」僕は、つい攻撃的な気持ちになって、言ってしまった。「父さんのことかな。やっぱり」
言ってからすぐに、失言だったことに気がついた。姉は何か言おうとしているようだが、言葉が出てこない。結局、黙り込んでしまった。その態度で、姉が自分の過去についてどう思っているのか、僕は覚った。そのかわり、そこに生まれてしまった沈黙は、時間を増すごとに空気を重くしてゆく。僕は耐えきれなくなって、
「ごめん」と言った。
「何謝ってるのよ。馬鹿ね」姉は笑った。
「本当にごめん」僕は姉の顔をまともに見つめられない。
「そんなことより、久しぶりに会ったんだから、もっと仲良くしようよ。お互い聞きたいこととか話したいことがあるでしょ？」
姉は、笑って言うと、僕の肩を叩いた。
姉の住んでいる場所は、離れといえば大層に聞こえるが、六畳間と八畳間からなるこぢんまりした平屋建てだった。六畳はテーブルが置かれてキッチンとして使われ、八畳のほうは畳が敷かれて鏡台やタンスが置かれている。天井が高めで家具も少なかったから、実際よりも少し広く見えた。

「今日はどうするつもりなの？　明日学校は休みだね」
　すでに僕は姉に問われるまま現在の自分について話していた。通っている学校について、家の様子について、友人について。たとえば帰省して親戚に出会ったときに話すような調子で。
「まだ決めてないよ」
　テーブルの椅子に腰掛けながら、返事をした。椅子の上で重心を変えると足元の床板が小さくきしむ。
「久しぶりだし、ここに泊まっていったらどうかな？」
「でも、緊張するな。なんだか今ひとつ現実感がないんだよ。まるで姉さんが知らない人になったような感じがする」
「それはこっちの台詞だよ。こんなに大きくなっちゃって」
「違うんだ、そうじゃなくて、いくら長く離れてても、やっぱり姉弟だから会えば解ることがあるんじゃないかと思ってたんだ。でも、考えが甘かったな」
「今は何も解らない？」
「何もってことはないけれど、期待してたほどじゃなかった」
「期待が大きすぎたんじゃないのかな。だって、昔はそんなに深く理解してたの？　あなた、まだ子供だったじゃない」

姉は冷蔵庫から取り出した林檎ジュースを、二つのグラスに注ぎながら、言った。
「そうなんだけどさ」
「あの頃は、洋一もそうだけど、私もまだ子供だったしね。普通に生活してたって、この年齢の七年で変わらないってことはないよ。飲む？　１００パーセントアップルジュースだけれど」
「あ、うん。でも、七年間もどうやって暮らしてたの？」
「いろいろあったよ。聞きたい？」
「話してくれるなら」
姉は自分のグラスを両手で大事そうに握り、唇をつけて一口飲んだ。それからため息をつき、少し顎を上げると、遠くの空を見つめるような目をして、ゆっくり話しはじめた。
「学君」と二人で街を出てから、最初は無闇に逃げ回った。じっとしているとすぐに警察に居場所を突き止められてしまうかもしれないから、一日と同じ場所に居られなかった。なにしろテレビでも新聞でも報道されていたし、姉としては、世界中の人が敵に回ってしまったような気持ちだったという。
姉は何か策を考えたほうが良いのではと提案したが、木村は、「そんな記事いちいち覚えていて、他人を疑う奇特な人なんかいない。警察官だって全ての被疑者の顔を完全に記憶出来るわけじゃない。挙動不審にならなければ普通にしていても平気だよ。びびりすぎ

て余計なことをするからボロを出して捕まるんだ」と笑っていた。結果からいうと彼の言う通りだった。実際かなり危険に思われる場面でも、態度にさえ気をつけていれば特別なことをしなくても切り抜けられた。木村が選んだ移動手段、移動場所が良かったのかもしれない。初めは張りつめていた緊張も、次第に緩んできた。

「でも、そんな状況下で警察官を相手に、不自然さを出さずに振る舞えるものなの？」と僕が訊いたら、姉は苦笑して「まあ、嘘は上手だったから」と言った。

マスコミが二人を完全に忘れてしまうまでそう時間はかからなかった。彼らは地方の繁華街に住み着くことにした。アルバイトならば身元をそこまで厳密に調べることはなかったし、贅沢をしなければ生活に不自由することもない。住むところを探すのは大変だったので、「そこはちょっとだけズルをして」住まいを確保したらしい。勤務先にはフリーターだと言っていたが、同じような年頃のバイトはたくさんいたし、特別目立つこともなかった。

二人とも勤勉に働いたから、年に何度かは温泉に行ったり山へ行ったりして、それでも貯金は少しずつ増えていった。定住するとなるとどうしても身元の発覚を恐れずにはいられず、初めはおっかなびっくりだった生活にも、徐々に馴染んでいった。

二年ほどそうやって生活しただろうか。ある日突然、木村が引っ越すと言い出した。この場所にはもう居る必要がないと言う。木村は持っていた鞄を広げて、中身を姉に見せた。

カードや書類のたぐいが詰め込まれている。

「これは役所へ持っていっても通用するようになっている。これで僕たちは法律上でも新しい人間になれる。新しい場所でやりなおすんだ」と木村は言った。

姉は手を伸ばしてその一枚を取った。名前も生年月日も違う免許証に、自分の顔写真が貼りついていた。保険証、戸籍抄本、およそ社会で生活してゆく上で必要な証明書はなんでも揃っていた。

なんだか危ない匂いのする話だと僕は思った。ただ、姉も当時そう感じていたが、木村を信頼していたので、なんの不安もなかったという。

新しい人間として生活することになる街で、不動産屋を訪ね、偽の身分証を使って正式な手順で契約をした。保証人には姉の知らない名前が書いてあった。木村はその人物の会社で働くことになっているのだという。引っ越しをした当日から、彼はスーツを着てどこかへ出かけていった。

「もうお金の心配なんかしなくていいんだ。幸せになることだけ考えればいい」

木村の言葉通り、翌月に振り込まれた給料は、二人のこれまでの質素な生活では到底使い切れないような額面を示していた。ただ、振り込み元の見知らぬ会社名だけでは何もわからない。いくら木村のことを信頼しているといっても、さすがに不安になってしまい、姉は正直に気持ちを告げた。しかし、木村は気にする必要などないのだと言う。

「でも、学君が私に黙って危ないことをしているんじゃないかと思って」
姉の言葉を、木村は真面目にとりあわない。何を言ってもはぐらかされてしまう。
彼が話さないとなったら、どう尋ねても無駄なのは解りきっているが、姉にはどうしても納得出来ない。
「言えないのは、本当にちゃんとしたところだからだよ。よく考えてみなよ、僕みたいのを雇ったなんて人に言う話じゃないだろ？　僕の素性が素性だから、隠せって言われてるんだ。時間がくれば理紗には話すよ。大丈夫、僕に致命的なことがあったら、理紗もただじゃ済まないことは理解している。無茶はしないよ」
臍を曲げてしまった姉に、木村はそう言った。不自然な説明だとは思った。第一、ちゃんとしたところが木村の素性を知っていて雇うものだろうか。中途採用で、これだけの条件で。それでも、あとで話すと約束してくれたからには、たとえふりだけでも納得してみせるしかなかった。
木村は毎日忙しそうに『会社』へ通った。平日はいつも終電間際だったし、休日出勤もないではなかったが、基本的には土日祝日は休みを与えられている。時間外手当も正確に計算されているようだ。普通の会社でもその辺は曖昧にされてしまうことが多いという話だから、本人の言うように健全な会社なのだろうと、姉も思いはじめた。仕事の話を少しもしないのが、多少気にはなったけれど。

働く必要がなくなった姉は、かといってすることがない。引っ越してからあっという間に充実してしまった家電を使えば、家事はすぐに終わってしまう。料理に手をかけるにしても、平日は朝食しか木村と一緒にならない。自分が食べるためだけに、大げさなものばかり作るのはいくらなんでも馬鹿馬鹿しい。

空いた時間に本を読んだり音楽を聴いたりしてみたけれど、その時間木村が働いているのかと思うと落ち着かない。結局、渋る木村を押し切って、働くことになった。姉の賃金は些細なものだったけれど、暇つぶしのために浪費してしまうよりはずっと良い。

平日は労働をして、休みの日はレジャーを楽しむ。二人一緒に。そんな生活が出来るとは、想像もしていなかった。毎日が瞬く間に過ぎて、まるで夢を見ているような気分だったという。大小の不安は常に念頭にあったけれど、次第に薄れてしまう。木村は少しずつ昇給していたし、貯金は増える一方だった。何もかも順調で、ときどき、このまま世間で言われているような形で幸福を実現してしまうんじゃないかとさえ思える瞬間もあった。

しかし、というよりも、やはりというべきか。そう都合良くはいかなかった。木村は働けなくなってしまう。今年が始まって間もない時期で、今から八ヶ月ほど前のことだ。

「どうしたの？」

僕はそこまで話してから、急に黙り込んでしまった姉を促す。

「お昼に、病院から電話があったの」

木村が会社で突然倒れたのだという。本人の状態が思わしくない。怪我自体は額を少し切っただけで大したものではないが、とにかく肉親に来てもらいたいのだと言われた。

姉が駆けつけると、木村は薬で眠らされていた。

「奥さんですか？」

医者に言われて一旦廊下に出たとき、会社での上司だという中年男性に声をかけられた。彼が名乗った名前は、アパートを借りるときに保証書に書いたものと同じであることに気がついた。彼の話すところによると、オフィスでの就業中、突然奇声を上げ、倒れてしまったのだという。前々から会社の上司に訊きたいと思っていた疑問は多かったが、今はそれどころではない。

「どういうことなんですか？　会社で何があったんですか？」

姉は上司に詰め寄った。

「傍目には、何か特別な出来事があったようには見えなかったのですが。私には、わかりません。医師の診察を待ちましょう」

しばらくして、姉は呼び出された。

「最近、ご主人は強いストレスを感じていたり、何か雰囲気が変わったりといった様子はありませんでしたか？」

医者は言った。

「いえ、気づきませんでした……。それが何か関係しているんでしょうか？　主人はどうなってしまったんですか？」
「奥さん、気を落ち着けてください」
その医者はまだ若かった。状況がそう見せているのだろうが、彼の微笑は姉の目には薄笑いしているように映って、不快だった。
「ご主人は、他人から被害を受けるといった妄想を強く感じてらっしゃるようです。それから、自分の悪口を言われているような幻聴、それと、幻覚。現在は心が落ち着くお薬を飲んで休んで頂いていますが」
「それは……つまり？」
「もう少し、経過をみなければなりませんが、ご主人は心の病気に罹っているおそれがあります。一時的なものかもしれませんが」
「はっきりおっしゃってください。なんの病気ですか？」
そのあと医者から告げられた病名は、姉もよく知っている有名な精神病だった。木村学が壊れた。目の前が真っ暗になり、そのあとのことはよく覚えていない。
数日が過ぎても木村の状態は戻ることがなかった。始終ぶつぶつと一人で呟き、時々何かに怯えているのか、悲鳴を上げる。専門の病院で診察を受けた結果、今の状態では社会で日常生活を営むのは明らかに困難であり、治療のためには入院が必要だと宣告された。

上司の勧めで、環境が良く、施設も整っているこの近くの病院に木村は入院した。姉はその木村の傍で暮らすために、この土地に引っ越してきたのだ。

「じゃあ、まだ入院してるってこと？」

「だけれど、もうだいぶ良くなってきてるんだから。すごく早い回復速度なのよ」

姉は明るい声を作って、言った。

「普通に話したり出来るし、私は外で暮らしても全然問題なんかないと思うの。本人だって、退屈でしょうがないっていつも苦笑いしてるもの。ただ、お医者様が言うには責任感が強い人だし、外に出したらどうしても無理をしてしまうから、再発が怖いんだって。病院でもう少し様子を見たいとおっしゃって」

姉の言葉は、誰かに言い訳しているように聞こえる。姉自身にだろうか。

「それに、学君はずっと大変だったから、ちょっと休むのもいいかもしれないしね。もともとのんびり屋さんだったんだから、疲れちゃうに決まってるよ」

木村のことを話している姉は、まるで子供のようだと思った。

「心がそんなになるまで辛かったのに、誰にも一言も話さないで黙ってるなんて、頑張りすぎだよね。私にくらい言ってくれても良かったのにな」

わざとらしくため息をついて僕に道化てみせて、そこで姉の話は終わった。

日が暮れると僕と姉は街に出て、定食屋で焼き魚を食べた。姉はいま働いているところ

で知った珍しい魚の話をして、僕は学校の変な癖のあるクラスメートの話を、それから渡会泉さんに会った話をした。姉は懐かしそうに聞いていた。志村麻里の話は、しなかった。
帰り道、潮騒に誘われて堤防を乗り越えた。月夜の下で海は黒くうずくまり、まるで生き物が呼吸しているかのように、引いたり打ち寄せたりしている。波打ち際には夥しい量の海藻が打ち上げられ、それに混じって花火の焼け残りが落ちている。
砂の中に小さなカニが身を潜めていた。逃がしてやろうと甲羅を摘んで持ち上げたら、手足がだらんとぶら下がって、既に死んでいる。腐敗してひどい匂いだ。
見せて嫌がらせてやろうと振り返ると、姉は堤防の上に腰掛けて、月を眺めていた。白いスカートが闇の中に浮かび上がり、風でひらひらと揺れている。惚けた表情で、一体何を思っているのか。
僕は波に向かって、なるべく遠くへ死体を投げ込んだ。思ったより飛ばずに、カニは空中でバラバラになって海面に落下して、黒い海に呑まれてしまう。海水で指先を洗ったが、皮膚に染みついた腐臭はとれなかった。死の匂いがする。
姉と布団を並べて眠った。電灯を消した暗がりの中、僕はこっそり錠剤を飲み込んだ。
翌日は、姉と一緒に木村と面会する予定になっていた。
病院まではやってきたものの、やはり直接会うのは気後れして、はじめ僕は面会室の表

で待っていたのだけれど、すぐに中に招き入れられた。
木村学は背の低いやせた男で、童顔だが視線には理知的な気配りがあり、もしここが精神病院でなければ心に異常があるとは到底信じられなかったろう。
「へえ、きみが洋一君か。男前だなあ。僕は今は野村和夫って名乗ってる。出来ればそう呼んでもらえるかな」
思っていたのとは違い、柔らかな物腰だった。口調もしっかりしている。彼と机を挟むような形で、姉の隣の椅子に腰を下ろす。つい先月事件について調べ、被害者に会ったばかりの僕にとってはまだ生々しくて、どうしても当時の印象で見てしまう。目の前に、人を殺したり女性に乱暴したりしたその犯人がいると思うと、緊張する。
「沙智子から話は聞いたよ。黙っててくれたんだ。姉思いの弟さんがいてくれたおかげで助かったよ。ラッキーだな」
彼は軽い調子でそう言って笑った。言葉遣いからも表情からも真意が掴めない。沙智子というのは、姉の偽名だ。黙っていると呑まれてしまいそうで嫌だったので、僕は気を取り直して口を開いた。
「なんで、あんなことしたんですか？　何もしなければ、傷つかないで済んだ人もたくさんいたのに。姉が巻き込まれて僕の家だって大変だったんですよ。返答次第によっては僕も……」

「洋一ったら」
「いや、良いんだ」木村は姉にそう言って制してから、「弁解するつもりはないよ。きみは随分調べたんだってね。僕がここで何か言うよりも、きみが感じたことを信用したほうがいいんじゃないかな？」
「貴方の考えが聞きたいんです」
「違うでしょ」
　木村は苦笑する。
「きみはさ、警察に隠していることに、少なからず罪悪感を感じてるよね？　だから、僕に何か『それならば仕方ない』と納得出来るような意見を求めてるんだ。ご丁寧に『返答次第によっては』なんてヒントもくれてるしね。僕の考えが聞きたいわけじゃなくて、自分の背中を後押しして欲しいだけでしょ。僕はこういうときに、相手の求めてる言葉や態度を演じてみせるのは好きじゃなくってさ。そんな、模範解答つきの質問で人を試すのやめようよ。そんな表面的な言葉は無意味だよ。人間同士、心のこもった美しい言葉で会話したいものだよね」
「学君、初対面なんだから、もっと真面目に相手してあげてよ」
「何度言ったら解るの。僕は和夫だって言ってるじゃん。あとね、適当にそれらしいこと言うよりもさ、こうして普通なら腹で思うことを打ち明けたほうが真面目っぽくないか

な？　これでも、今まで通報しないでくれた彼に敬意を払ってんだよ。自分に都合良く騙すつもりだったら、こんな説明なんかしないで解答用紙埋めてるよ。だいたい、こんなところでのうのうとしてる僕の口から反省の言葉なんか本当に訊きたいのかい？」
「でも、あなたの感情表現は他人には伝わりにくいのよ」
「そりゃひどいな。本人だって気にしてるのに」
木村は、苦笑まじりに姉に言った。
「気にしてるなら直せばいいのに。それだから本当に……」
「あの、いいですか？」
僕はそこで口を挟む。
「あ、ごめんなさい。でも、洋一、この人いつもこんなだけど、内心では真剣なのよ」
「うん、そうなんだよね。僕はいつだって真剣なんだ」
「もう」
僕は面食らって、すっかり攻撃的な気持ちをそがれてしまった。どうもこの木村学という人は、僕の手には負えない相手のようだ。でも少なくとも、想像していたような病気で何もわけがわからなくなっている状態でもないらしい。
しかし、僕だってわざわざここまで来たのだ。彼の言葉に従うわけでもないけれど、確かに素直に話すべきなのだろう。僕は姉に彼と二人で話させてもらうよう頼んだ。姉は不

承不承ながらも、言うことを聞き入れてくれた。
「ありがたいね、二人で話したいってことは、僕を対話が出来る程度には正常だって認めてくれたわけだ。ここに何ヶ月も閉じこめられていると、外の人がまともな人間扱いしてくれるってことがどれだけ素晴らしいか実感するよ」
「いつごろ退院出来そうなんですか？」
「先生の判断次第だよ。本人としてはもう大丈夫だと思うんだけれど、自分で決めるものでもないからなあ。恥ずかしながら、一時は本当に酷かったからね」
「原因とか判明してるんですか？」
「洋一君」
「なんですか？」
「沙智子…理紗でいいか。彼女の機嫌をそこねてまで退出してもらったのに、僕にそんなことを訊きたかったの？」
「いや、そうじゃないんですけれど、どう切り出したら良いか、迷ってて」
「流れなんか作らなくていいよ。思ったまま言えばいい」
木村の表情はいつの間にか真剣になっていて、僕の話が深刻な内容であることを、察しているようだった。
「じゃあまず、この夏、オレにあったことを聞いてください」

僕は、姉が電話をかけてきてから、それからこうしてここに来るまでの経緯のありのままを彼に話した。残された富子老人について、志村麻里の話したこと、渡会泉さんと話していた内容、全部話した。サオリに関する話はさすがに省いたけれど。
「よく調べたね。気になってはいたんだ。教えてくれて有り難う」
「あの事件から、いろんなことが起きましたよね。未だに少しも解決してないこともあって、オレも不勉強を実感しましたよ」
「災難だったね」
「オレのことは良いんです。彼らについてどう思いますか？」
「困ったな。僕の口から、第三者みたいに無責任な同情の言葉は言えないよ」
「すいません。ただ、なんというか、オレはやるせないなあって思って。学さんにしても、どうしようもない話だったとは思うんですが」
「どうしようもあるよ。僕がなんにもしなければ良かったんだ。それははっきりしてる。取り返しのつかないことをしたものさ」
彼は、冷たい声で断言した。やはり、さっき言っていたように、彼は真剣に考えてはいるのか。それとも、この態度も作りものなのだろうか。僕には判断がつかない。
僕は、話題を変えた。
「姉が家に帰ってきて、電話をかけてきたのは、なんでだと思います？　僕はてっきり、

木村さんが一緒なんだと思っていたんですが、そうじゃなかったんですよね。だとすると、危険を犯してまであの街に戻るなんて不思議じゃないですか？」
「僕がこんな病気でこんな場所にずっと入院してるし、知らないものに囲まれて、理紗も心細くなったんじゃないかな。そんなとき、自分がよく知ってる懐かしいものに触れたいって気持ちは解るよ」
「そうなんですけど、あんまりにも不用心な行動だったから。だって、電話なんか携帯でも公衆電話でも良いじゃないですか。だから、オレ、想像してたことがあるんです。もしかしたら姉は……」
そう言う僕の言葉を彼は引き取って、
「うん、誰かに見つけて欲しかったんだろうね。もう偽物の生活に疲れたんだろう」
言おうとしていた言葉を先回りされた。
「だったら……」
「そうだね、彼女は帰ったほうがいい。うまい方法を考えよう。きみは、僕とその話がしたくて、ここまで来てくれたわけだしね。でも、きみが思ってるほどそれは簡単ではないよ。僕が言えばそれで解決するような問題だったら良かったんだけれどなあ」
「あれ？　オレそんなこと言いましたっけ？」
「え、間違ってた？」

「そうですけど。オレってそんな解りやすいですか？」
「突然どうしたの？」
「だって、オレの思ってることあんまり的確に先取りするもんですから」
「ごめんごめん、悪かったね。もうすぐ点呼の時間になっちゃうから、ちょっと短く済ませたくて。次から気をつけるよ」
　と頭を掻いて、
「あ、でも、最後に一つ。ポケットに入れてるそれ、僕に渡してもらえるかい。どうせ僕に見せるつもりで持ってきたんじゃないか」
　彼は、初めから知っているような当たり前の顔で、僕の前に手のひらを差し出した。

　ついに僕は姉の居場所を知ってしまった。木村学の居場所も一緒にだ。彼は姉を家に帰す件については任せて欲しいと言っていたが、どういう形でそれを実現するつもりなのだろう。僕は勢いで言ってしまったものの、あとでよくよく考えてみると警察の手を経ないで家に帰すのは難しいように思われた。たとえ今姉がふらりと家に戻ってきたとしても、家で生活を始めればすぐ隣近所の耳目に触れるだろうし、かといって、部屋に閉じこめて暮らすわけにもいかない。結局、警察の世話になって全てを精算してから新しく生活を始めることになるだろう。木村は姉を警察に出頭させるつもりなのだろうか。

家に帰るにしろ、警察へ出頭するにしろ、そもそも、姉自身がそれを素直に受け入れるかどうかが問題だ。そんなことは出来るのだろうか。

あるいは、木村はただ僕に対してその場しのぎを言っただけで、実際にはこの隙にどこかへ逃げてしまうつもりなのかもしれない。その可能性が、一番高いように思われた。もし本人たちがその方法を選ぶのなら、僕としてはそれでも良いのだけれど。

夕暮れどきに、家に到着した。

「ただいま」

玄関で靴を脱ぎ、そのまま自分の部屋へ向かおうとすると、母親に呼び止められる。

「お前にお客さんよ」

「誰？」

僕は訊き返した。客に心当たりなどない。

「フクヤマさんが、お前を訪ねてリビングで待ってるわよ」

「フクヤマ？」

名前の間違えだろうか。福島（ふくしま）という名字なら、同じクラスに居る。だとしても、彼が僕を訪ねる理由なんか思い浮かばなかったが。

「洋一も隅に置けないわね」

母が背中から言葉を浴びせかけてくる。何が隅に置けないのだろう。あと、なんとなく

からかうような母の声の調子が気になる。福島ならば、身長百八十センチ体重九十キロの昆虫マニアの巨漢の筈だ。もし万が一僕に用があるとすれば、おそらく僕が子供のときに海外のみやげで貰って以来、押し入れにずっと仕舞いっぱなしになっている昆虫標本を見るためだろう。夏休み前にそんな話をしたとき、彼は目を輝かせて今度見せてくれと言っていた。どうも数年前に希少品種になって、今ではもう滅多に見られない昆虫がその中にはあるらしい。特別親しくもない僕の家まで足を運ばせるなんて、マニアの好奇心というものは恐ろしいなと思いながら、僕は、リビングへのドアを開ける。

「ヨウイチ！」

「え？」

そこに居たのは、いつも顔の大きさに似合わぬ小さなメガネを鼻の上にのせている相撲取りもどきではなく、体重はおそらくその半分もない、美しい少女だった。というか、サオリだ。

「フクヤマってサオリのコトだったの？」

「福山佐織(ふくやまさおり)だよ。知らないの？」

そういえば知らなかった。いや、それはどうでもいい。

「なんであらかじめ僕に電話しなかったの？」

サオリの正面のソファーに腰を下ろす。彼女の前にはすでにティーカップが置いてあっ

て、その中にあるのは、色と香りからするとハーブティーだろう。
「電話番号書いた紙なくしちゃって。仕方ないから、家に来たの」
「そうなんだ」
彼女なら、さもありなん。この家にたどり着く前に誰かに騙されて連れ去られないで良かったと僥倖に感謝するべきだろう。
「昨日からずっとヨウイチを待ってたんだから」
サオリは言って、にっこりと微笑む。
「えっ、昨日から？　この家に？」
彼女は頷く。つまり、母に言って、この家に泊まったということか。話して良いことと悪いことの区別が常人とはちょっとずれているサオリが、母と一晩一緒にいて何を話していたのかを考えると、僕は羞恥と緊張で頭の中が真っ白になりそうだった。少なくとも、初対面の人間を泊めるのなら、それなりの理由を話した筈だ。
なんで家に来たのなら母は電話をしてくれなかったのか、と言おうとしてその前に僕は自分の携帯電話を見た。昨日の夕方に、家からの着信が数回入っている。ちょうど姉と会っている頃で、マナーモードにしていた僕は、まったく気がつかなかった。迂闊だった。
僕は再会を喜ぶよりも前に、焦りはじめた。
「福山さんから聞いたわよ、洋一」

母がお盆に湯気の立つティーカップを運び、現れた。何を聞いたのだろう。姉が電話してきたことはどうだろうか？　僕は胸をどきどきさせながら手渡された紅茶をすすり、続く言葉を待った。
「この子と結婚するって言ったんですってね」
母が意外なことを言うので、熱い紅茶を一気に飲み込んでしまった。喉が熱い。
「そうなの？」
僕はサオリのほうを見た。
「いや、その、あのね、洋一がそういうことを言ってくれたと、私は思ったのね。もし違かったとしても、なんか、そういう……」
彼女にも言い過ぎてしまったという自覚があるらしい。落ち着きをなくしてもじもじしながら何やら曖昧な言葉を並べている。
「あなた嘘をついたの？　洋一は、そんな言葉で女の子をたぶらかすような子に育っちゃったのかしら。困ったわね」
母は、ため息まじりに呟いた。この人はまだ僕の弁解も何も聞いていないのに、既にサオリの味方についてしまったらしい。
「たぶらかすって……。いや、まるっきりの嘘ではないけどさ」
「じゃあ、結婚するの？」

「いや、それは。つうか、なんだか母さんは結婚して欲しそうに聞こえるけれど」
「そうねえ、洋一はモテそうでいて、モテないから。お祖母ちゃんも、あれは一生やもめで過ごす、あんなのと結婚する女なんかいないって断言してたし。言われてみればそんな雰囲気もあるしね。細かい振る舞いとか料理の味とかいちいちうるさくて細かいし。繊細すぎて大した出世も出来そうにないし。もし、こんなかわいらしいお嬢さんが相手なら、願ったり叶ったりだわ」
　僕は自分の知らない場所で、ぼろくそに言われているのだなと思った。それはともかく、サオリは自分については母に喋っていないのだろうか。僕はちらりとサオリを見る。
「かわいらしいだなんて、そんなぁ」
と、サオリは柄にもなく照れている。相変わらず状況を意識していない。
もしサオリが肝心なことを何も喋っていないのなら、それはそれで、僕の口から順序立てて話せば解ってもらえる、と思う。どうやって切り出そうか考えていると、
「しかも、若いのに大変な苦労をしているらしいじゃないの。私なんか、昨日福山さんの身の上話を聞いて泣いちゃったわよ。こんなに明るいのに、誰も知らないところでそれだけの苦労に耐えていただなんて、しっかりしてるのね」
「明るいだなんて、そんなぁ」
　サオリはポイントが少しずれたところで照れている。この際彼女は無視することとして、

僕は考える。母はサオリの身の上話を聞いた上で、納得しているらしい。だとしたら、僕が何も心配することなんかなかったのか。
「結婚とかはまだ確かに早いけれど、真面目にお付き合いするならお母さんは賛成よ。大人になって思うのだけれど、洋一、若いうちに苦労をした人っていうのはね、そうでない人とはいろんなところで差が出てくるのよ。素晴らしいお嬢さんだと思うわ」
「参ったな」
僕は、素直にそう言った。
「洋一は、真面目じゃなかったのかしら？　だとしたらお母さん怒るわよ」
「そうじゃなくて、いろんなことが一遍に起きすぎて混乱してる。帰ったらいきなりこんな状況に出くわすとは思わなかったから。大体、サオリはどうやって家のことを解決してきたの？」
「義父さんにね、ちゃんと話したんだ」
「なんて？」
「好きな人がいて、一緒に居たいから、もうここでは暮らせないって。ゆっくりお話したら、泣きながら、自分の好きにしたらいい、応援してるって言ってくれたの」
「良いお話ね」
母はハンカチを取り出して、鼻を拭った。

「すごいな」
他に言うべき言葉を知らない。改心、そんなことって実際にあるんだ。それともサオリだから出来るんだろうか。こんなことが出来るから、サオリは人を疑うことを知らないのだろうか。少なくとも僕ならばこの状況で同じことは出来ないだろう。
「それでね、家を出る準備とか、今までの荷物をまとめたりしてたら、時間がたくさんたっちゃって。すぐに来ようと思ってたんだけど」
サオリが申し訳なさそうに言った。
「身よりもないのに、身一つで駆けつけてくれるなんて。洋一、ここまで好きになってくれるお嬢さんなんか、きっとあなたの人生では一生いないわよ。普通の人だって絶対無理なのに」
最後の一言が相変わらず酷い。僕を一体なんだと思っているのだろう。
「とにかく、ちょっと二人きりで話させてよ。サオリ、こっちへおいで」
僕は、彼女の腕を握って自分の部屋に向かった。母が何か言ったようだけれど、うまく聞き取れなかった。二人で部屋に入り、ドアを閉める。サオリは僕に掴まれた自分の手をじっと見ている。
「あ、ごめん。痛かった？」
僕がそう問うと、

「もう、ヨウイチったら強引なんだから。でも、嫌いになれない駄目な私。ああっ、めちゃくちゃにされたい……」
サオリはそう言って、頬に手を当てる。
「それ、どこで覚えたの？」
「えっとね……昨日の夜にお母さんと見たテレビで……」
女二人で何を見てたんだ？　僕はため息をつき、椅子に腰掛けた。短い間にすごく仲良くなってしまったのだなぁ。
「もういいから、好きなところに座って」
「うん」
すると、サオリは僕の膝の上に座る。
「……オレを馬鹿にしてるの？」
「えっ、だって、私たちもう夫婦じゃん。夫婦って、ヤメルトキモ、スコヤカナルトキモなんでしょ？」
さっきの会話の流れの、どこをどう聞いたらそういう結論になるのだろう。僕が怒ると、サオリは渋々ベッドのほうに移って、僕と差し向かいになる。
「なんか離れててヤダ」
泣きそうな顔をして、座った姿勢のまま両手を僕へ向かって伸ばす。僕はため息をもう

一度ついて、顔を左右に振る。
「さっきはサオリがすごい立派な人になっちゃったんじゃないかと思ったんだけど、気のせいだったのかな」
「そうなの？」
「うん、なんだかサオリがまぶしくて、オレがつまらない小さな人間みたいに思えたんだよ。人を疑ってばかりでさ。だから、決定的な差をつけられてしまったような気がして、すごく焦ったんだけれど」
「どういうこと？」
「サオリに負けないように、オレももうちょっとしっかりしないとなあって」
「え、どうして？　ヨウイチすごいよ。私に出来ないような、うらやましいこと一杯出来るし。私、ものすごく尊敬してるんだよ」
　サオリに尊敬という概念があったことは意外だった。しかも僕に対して持っていてくれたとは、それは少々買いかぶりじゃないかと思う。だけど、いつかそれが買いかぶりじゃなくなるよう、彼女の期待通りの立派な人間になろうと、僕は考えていた。僕はきっと今よりもっと成長出来る筈だ。
　自分の可能性に対して臆病な僕が、ごく自然にこんなことを思えたのが少し嬉しい。
　短い間とはいえ締め切りにしていたせいか、部屋が少し埃っぽい。僕は窓を開けて、外

の空気を取り込む。柔らかな風が吹き込んで、サオリの髪を撫でる。
　サオリはうつむいて、床にまっすぐに伸ばした自分の足のつま先を見ている。裸足の指先の、親指と人さし指を交互に動かしている。家を捨ててこんな場所まで来て、平気なのだろうか。僕は彼女の表情に不安を探してみたが、少しも見つけ出すことは出来なかった。僕を信用しているのだ。
「これから、みんなで何か食べに行こうか」
　僕が言うと、サオリは顔を上げた。
「ついでに、明日からのサオリの家での役割とか決めたほうが良いと思うんだ。広いわりに人の少ない家だから、やることたくさんあるよ」
　僕が言うと、サオリの表情にみるみる笑顔が広がっていって、
「私、たこわさが食べたい！」
　大きな声で言った。

CHAPTER－5

病室の隅に母さんが立って僕に刺すような視線を送り続けている。頭の上半分が丁度生卵を落としてしまったみたいに潰れている。砕けた白い頭蓋骨の内側には、ホルマリン漬けにしたような黄土色の脳みそがのぞいている。皮膚は腐敗して体中あちこちの肉がそげ落ちて、骨が剥き出しになっている。衣服が泥まみれなのは、墓場から土を掻き分けて這い出してきたからに相違ない。いつ見ても無惨だね。昔はあんな綺麗だったのに。

母さんがこんなにあさましい姿で甦ったのは、すべて僕を呪うためだ。現代の日本では死体は火葬にすると決まっているらしいけれど、母さんは特別に土葬にされた。それはなんでかというと、関係者がみんな本当のことを知っていて、僕が母さんを殺したのを知っていて、怨念から母さんが復活し、僕を追いつめるのを期待したからだ。世界中の人が僕の罪を知っている。警察だって僕の居場所なんかとっくの昔に突き止めているくせに、捕まえないで放っているのは、僕が一人で苦しむのを見てニヤニヤするためだ。ポルフィーリーみたいに狡猾で悪趣味な連中だ。

しかも、こんなにはっきり存在している母さんを、それは見えない、お前の幻覚だ、などと言って僕を病人扱いする。その上、こんなところに閉じこめるなんて。おかげで僕は

自分の正気さえまともに信じられなくなって、不安でとてもたまらない。世界中に一人も僕の味方などおらず、なんて絶望的な状況なのでしょう。切ないなあ。
正直、ここに来た当初は、心からそう信じていた。今でも少しは思っている。だって、目の前に相変わらず母さんが突っ立っているのがはっきりと見えてしまうのだから、そう思いたくもなる。でも、それは僕の頭がまだオカしいから見えてるだけで、実際には存在せず、これは幻覚なんだ、だって母さんはもう死んだのだもの。僕が崖から突き落として殺してしまったんだもの。死んだものは生き返らない、と、今の僕は知っている。
これだけクールな判断を出来るってことは、僕は随分正気になっているってことじゃなかろうか。少なくとも、前みたいにやたらと痴言を撒き散らすことはなくなった筈だ。僕はかなり正常に近づいてる。大体、実際目の前に見えてしまっているものを、これは理屈に合わないから幻覚だって否定するには、相当強靱な理性が要るんだよ。これ一つとったって僕はしっかりしてるじゃないか。
そう考え、自分を勇気づけていると、
「勘違いするな。お前は狂っている。お前は間違っている。お前は一生呪われて苦しみ続ける」
思考に敏感に反応して、母さんは言う。耳をふさいでも無駄なのは知っている。これは外から音として囁かれているのではなく、頭の中で喋っているのだ。

常に声がぶつぶつと聞こえている。それはいつでも母さんだってわけではなく、時に三沢先輩の声になったり、志村先輩の声になったりする。場合によっては理紗だったりする。みんな僕が死ねばいいと思っている。生きていても仕方がないと言う。ときどき彼ら同士が話し合っていることもある。内容は聞き取れないのに、何故かそれが僕の悪口だということだけは解る。

この、頭の中の声に返事をしたら、きっと世間の人に僕はまだ幻覚が見えていることを知られてしまうのだろうな。薬を増やしてもらえば、消えてくれるのは解っているけれど、薬の増加をお願いするということは、すなわち病状が改善されていないことを意味し、そしたら退院はますます遠ざかってしまう。僕はなんとしてでもこの事実を隠し通し、退院せねばならない。何が見えてたって、どう感じてたって、他人から見てまともに振る舞わなければならない。

それに、僕に彼らを消す権利なんかないのだ。もし僕にまとわりつくことで、本人たちの気が少しでも晴れるなら、何をされたって構わない。むしろするべきじゃないか。彼らには僕を追いつめる権利があるし、僕には苦しむ義務がある。結局のところ、僕は薬などで彼らを追い払ってはいけないのだ。

まともなフリをするのは最初は大変だったけれど、最近は板についてきた。これだけの状況で、これほどうまく正気のフリをするのはかなりすごいことではないかと、自分のこ

となから嬉しく思う。それとも、これくらいの幻覚はみな見えているけれど、当たり前のように耐えているだけなのかな。他人から見た世界のかたちなど解らない。
努力が実って、医者は多少は僕の回復を認めてくれたらしく、初めて外泊許可が下りた。今日の午後に理紗が迎えにくることになっている。
「野村さん、頑張りましたねえ」「外泊出来るんですってねえ」
ベッドで横になっていると、ナースが通りかかるたびにそう言ってくれるので、僕はへらへら笑いながら「有り難うございます」と答える。確かに僕は頑張った。ただ、こうなると僕も欲が出るもので、外泊なんかよりも退院させてくれても良いじゃないかと思ってしまう。まわりの患者と自分を比べると、それくらい僕は上手くやれてる筈なんだけれども。それとも、やっぱり医者の目にはバレているのだろうか。
この解放病棟の患者たちは僕と同じ病気の人が多い。この病院では鬱病の人は静養病棟に行くし、自殺未遂や自傷行為をしやすい躁、躁鬱、境界例なんかの人は閉鎖病棟に行くことが多いようだ。そうすると必然的に解放病棟には僕と同じ病人が増えてしまうのだろう。もともとメジャーな部類の病気だしね。こうしている今も、あちこちで患者たちは独り言をぶつぶつ喋ったり、いきなり笑い出している。少し前までの僕もそんな感じだったと思う。
窓には鉄枠がはまっていたり、時間になると外へ出られないように施錠されてしまうが、

閉鎖病棟と比べれば、この解放病棟は実に自由だ。時間内なら外出も出来るし、患者たちのレクリエーションも多い。その最大のものは年に一回の旅行で、患者たちの多くが楽しみにしている。病気の性質上、ほとんどの患者は長期の、場合によっては一生の入院になってしまうわけで、病院側で用意してくれなければ旅行など行く機会がないのだから、無理もない。同室の大里さんもその一人で、最近は毎日旅行が楽しみだという話ばかりしている。僕はこの大里さんによく話しかけられる。

大里さんは七十をいくつか過ぎているが、背筋はまっすぐとしているし、歯も丈夫だ。彼の一日はパターン化されていて、朝食が終わると洗濯をして、昼食まで談笑したり新聞を読みながら過ごし、午後は近くのスーパーで足りなくなった日常品を揃えると、あとは日が暮れるまでタバコをふかしている。患者の中でも症状は軽いほうで、自分のことは全て自分で行うことが出来る。ぶつぶつ呟いたりするのも、ちょっと独り言が多い人と変わらない頻度だし、突然泣き出すのは、まあ、こんな状況におかれた老人だったら、よくある話じゃないかな。

人に何かをするのが好きで、毎朝「野村さん、コーヒー飲みますか?」と僕に尋ねてくる。コーヒーはあまり好きではなかったが、断ると悲しそうな顔をするので、朝は大里さんのコーヒーで目を覚ますのが僕の日課になってしまった。僕は、どうやら彼の孫によく似ているらしい。

「野村さん、外泊ですか。良かったですねえ」
そう笑いかけてくる彼に対して、僕は少なからず気まずい気分になってしまう。僕がここに来てから見ている限りでは、彼に家族が面会に来たこともないし、外泊もしていない。ただの一度たりとも。
どんなに症状が軽くなっても、ここから退院するには引き取り手の許可がいる決まりになっている。彼がもう日常生活を支障なく過ごせるにもかかわらず退院出来ないのは、そういうことも関係しているのかもしれない。入院している患者の何割かは、家族と一緒に暮らすのを嫌って、乳母捨て山のように病院を考えている。
ただ、理由はそればかりでもないだろう。あるいは、本人の意志でそうしているのかもしれない。なんだかんだいって、患者にとっても病院は過ごしやすい場所なのだ。
外の世界では一人前に扱ってもらえず、異常者扱いされて、冷たい視線や言葉にさらされたりするかもしれないが、ここではそういったことはない。多少はあるが、少ない。この病室では大里さんが他の患者の面倒を見る係になっているが、外に出たら彼が世話を見られる側に回るだろう。うまく振る舞うことが出来ても、精神病院あがりというだけで、変に意識をされたり、差別を受けることも少なくない。僕らが人並みに扱ってもらえる場所は、外の世界にはあまり存在しない。しかし、密閉されたこの空間にいる限り、少しくらいおかしなことをしても、言っても、他人や自分に危険なものでなければ、みな当たり

前のように受け入れてくれる。もし電車の中でそんな行動をとったら、他の乗客にちらちらと視線で威嚇されてしまうだろう。僕自身もここに来てから、たとえ突然誰かが一人で喋り出しても、蝿が飛んでるほどにも気にしなくなった。

そういった意味で、ここの毎日は平穏だ。その上、黙っていても栄養を管理された食事が出てくるし、もし心が辛ければ、ナースに訴えればその場でラクになる薬を貰える。いずれにせよ、自分の頭の中に渦巻く思考や感情以外の何とも戦う必要がない。諦めてしまえば、一つの理想郷といえるかもしれない。時にはナースが小うるさい時もあるけれどね。まあ、それくらいのものだろう。

彼が出たくないのか出られないのか、僕には訊くことが出来ない。大里さんに限らず、他の多くの症状の軽い長期入院者についても、同じような疑問が浮かぶ。みんな口では外に出たいようなことを言っているが、実際退院しても結局すぐ戻ってしまったりする。

僕もここが気楽な施設であることは認めるけれど、しかし、ずっとここに居てはならないとも思っている。むしろ安楽だからこそ、早く出ていかねばならない。僕にはみなと同じような権利を享受する資格はない。

理紗が来るまで時間を潰すために、僕はナースに外出許可を貰い、病棟を出た。外出と言っても特に用事があるわけでもないので、病院の目の前にある患者のたまり場になっている休憩所に行くだけだ。

そこには売店があって、軽食や飲み物を売っているけれど、大半の患者はベンチにぼんやりと座り、タバコを吸ったり将棋を打ったりして時間が過ぎるのを待っている。大体いつも同じような面子がいる。その一人に、いつも必死になってノートパソコンのキーボードを打っているマッチ棒みたいに痩せた中年女性がいたりするけれど、こんなところでパソコンを使う必要があるんだろうか。

僕は解放病棟の特権であるせっかくの外出許可時間を、病棟内で潰すのが勿体ないと感じたとき、よくここに来る。老人に混じって将棋を打ったり、ぼんやりと風に当たっていたりする。時間の流れがゆっくりで、こんなにのんびりしていて良いのかと思う。

「野村さん！」

自販機でコーラを買ってベンチに腰掛けると、ヨリコちゃんに声をかけられた。原宿にでも歩いていそうな、ここでは場違いに派手な服装とメイクをした高校生くらいの女の子だ。左の手首には無数の傷跡があり、目が変にギラギラと輝いている。ヨリコというのは漫画の主人公からとって本人が勝手に名乗っているだけで、本当の名前は違うらしいのだけれど、言いたがらない。同じ病棟の人に聞けば解るのだろうけど、本人が言いたくないものを、そこまでして知る必要もないので、僕は本名を知らない。

「あれ、ヨリコちゃんは第六病棟に入ってたんじゃないの？」

彼女は先週問題を起こした。男性のナースの一人に弄ばれたとか、犯されたとか言って

泣き叫んだあとに、隠し持っていたナイフで自分の太ももを縦に切り裂いた。そして、第六病棟、つまり女性用の閉鎖病棟に移されたと聞いている。彼女のような問題児は、そんな簡単に解放に戻れる筈はない。家族の了承があるなら、むしろ退院のほうが簡単だと思う。

「野村さんが気になるから出てきたのよぉ」

ヨリコちゃんは妙なしなを作って、片目をつむる。

あのナースのことも大好きだとか気になるとか言っていたのを思い出すと、好意を持たれてもぞっとしない。

「そのコーラと、私のチョコレートで賭けをしない？」

手に持ったアーモンド入りのチョコレートの箱をひらひらさせながら、彼女は言った。

「賭けなんかいいって。コーラ欲しければあげるよ。僕もう一本買うから」

「じゃんけん五回勝負ね」

僕の言葉を無視してヨリコちゃんは両手の指を組み、くるりとひねり、指の間から片目で太陽を眺める。じゃんけんに勝つおまじないだ。

「真面目にやってよね」

「仕方ないな」

「じゃーんけん……」

ヨリコちゃんが大きな声で言うと、周囲の視線が集まる。彼らが見たいものは解っている。まあ、ちょっとした余興を見せてあげようと思う。僕にだってサービス精神くらいあるんだ。

そして僕の五連勝。

「くっそー、どうしてそんなこと出来るの？」

彼女は悔しそうに地団駄を踏む。

「なんとなく」

僕は答える。

今まで何度となくじゃんけんをしたけれど、一度も負けていない。次々と挑戦してきたみんなも、全部返り討ちだ。僕はこの病院ではじゃんけん名人という、幼稚園でつけられるような称号を与えられている。

ほとんどの患者はもう僕に勝つのを諦めてしまっていて、いま挑戦してくるのはこのヨリコちゃんくらいじゃないだろうか。

出そうとするものによって癖が出る、あまりにも明白な弱点、その癖を指摘してあげたのだけれど、隠そうと意識するとそれによってまた別の癖が出来てしまった。結局何を教えても僕は解ってしまうので困る。

七年前に全てを取り戻してから、僕はこのたぐいのことがよくわかるようになってしま

った。いつでも正確にというわけにはいかないが、じゃんけんだったら結果が三種類しかない上に即時的なものだから、かなりの確率で的中出来てしまう。こんな病気になって、思考力はだいぶ低下している筈だけれど、依然としてその能力は残っている。不思議なものだ。僕としてはこんなのよりも人間の情緒の機微とかを正確に知れるようになりたいが、まあ、これはこれで便利なので贅沢は言えない。
「むかつくー」
ぷりぷり怒りながら、ヨリコちゃんはチョコレートを僕に投げつける。
「チョコレート要らないよ。ほら」
僕が差し出しても、受け取らない。
「今度取り返すから、それまで持っててよね！」
言い捨てて、向こうへ行ってしまう。その態度の全てが演技と解っていても僕は苦笑してしまう。僕に声をかけるところから、立ち去る場面まで全て彼女の脚本通りで、僕の気を引こうとしているのだ。
彼女が男性ナースに向かって叫んだ言葉は、妄言として扱われたけれど、その何割かについては事実だと僕は踏んでいる。彼女の全ては目の前の人間の興味を自分に向けるためだけにあり、その技術に関しては大した物だ。こういう施設のスタッフはもともと他人に対して思い入れをしやすいし、新人ならメロメロになってしまっても無理はない。

ヨリコちゃんは素材も悪くないし、ちょっとでも相手の興味が自分から離れそうな不安を感じると、すぐ理性を失ってメチャクチャをしてしまうところさえ直せば、外の世界でも大きな武器になるだろう。大活躍出来ると思う。ヨリコちゃん本人はそんなのどうでも良さそうだけれど。

他の患者に誘われて囲碁の定石を教わっていたら、時間になって理紗が迎えにきた。僕は彼女と一緒に病院を出る。見かけた患者は「綺麗な奥さんで羨ましい」と言う。僕は「羨ましいでしょう」と答える。理紗は笑っている。

「病院の外で一緒に過ごせるなんて、何ヶ月ぶりだろうね」

タクシーに乗ると、理紗は嬉しそうに言った。そういえば、最後に二人で街を歩いたときはまだ門松が外に出ていたな。冬は終わり春は過ぎ、今では夏も行き過ぎて秋となり、風が涼しくなりはじめている。うかうかしているうちに、すぐにまた冬が来てしまう。時間が経つのは早いものだなと、月並みなことを考えてしまうのは歳を取ったせいだろうか。それほどの歳ではない筈だが。

僕は普段の食事で良いと言ったのだけれど、せっかくだからと理紗が言い張り、退院祝いって、わけでもないな、出所祝い？　いや外泊記念。そして僕たちは少し離れた繁華街の、ちょっと綺麗な通りにある、かなり豪華なフランス料理店に足を踏み入れた。仕事で

何度かこんな感じの場所に入ったけれど、どうも慣れない。
「予約していた野村です」
理紗が大人の口調で言うと、窓に面した席に通される。椅子に座ると、ガラスに僕の姿が映っているのを見つめてしまう。店がちゃんとしているので、僕は緊張している。こんなところで不手際をしたら相当恥ずかしいだろうな。うん、こうして自分で見ている限りでは、まともに見える。ただ、長く病院にいたせいで僕の感覚がおかしくなってしまっている可能性は、ある。僕は、訊いてみた。
「ねえ、いま僕普通に見えるかい？　他の人と一緒に見える？」
「見えるわけない。この出来損ないが。一生出てくるな」
強い口調でそう言われて、僕ははっと振り返ってしまう。
「え、どうしたの？」
理紗は強ばった顔で僕を見ている。
「あ、ごめん、なんでもない」
しくじった。うっかり幻聴に鋭い反応をしてしまった。調子の良いときはこんなミスはしない。外は視覚的にも聴覚的にも気をつけるべきものが多すぎて、あちこちに気を取られてしまったのだろう。
水でも飲んで落ち着こうと、グラスに手を伸ばした。

「飲むな」と声がする。
大丈夫、これはいつも通りの幻聴だ。幻聴はいつでも僕がしようとしていることについて、それをやめろと言ってくる。理屈なんかない、ただ反対するだけだ。
しかし、幻聴に屈したら僕は駄目になってしまう。反射的に手を引っ込めたくなるのに耐えて、どうにか水を飲んだ。
「飲むな」
知るか、ほら飲んだ。しかも、一息で全部飲み干してやったぞ。ざまあみろ。屈強な僕の意志力。
「そんなにのど渇いてたの？」
これは、理紗の声だ。うわ、声に逆らうことに一生懸命になりすぎて、必死に水を飲んでしまった。不自然であまり良くないな。
「まあね、ずっと外にいたから」
実際にはコーラを二本も飲んで、水分なんかもうこれ以上摂りたくなかったけれども、そう言い訳した。こう喋っている間にも、頭に直接響く声はうるさい。仕切り直さないといけない。
「少し眠いな」
僕はそう言って目を閉じ、その一瞬の間に精神集中。意識を強く持たねばならない。

いつからか、思考の何割かは僕を裏切って、変な音を聞かせたり、変な考えを浮かばせるようになってしまったけれど、まだ生き残って僕を手助けしてくれる連中をうまく協力させれば、まだ対抗出来る。出来るはずだ。いちいち意識してやれば、僕は普通に振る舞えるんだ。自分に言い聞かせてから目を開けると、僕は理紗に笑顔を作る。ひきつってなければ良いな。

そして、食事は始まる。他人には聞こえていないと思う声を無視し、理紗の言葉にだけ反応して会話をするのは、なかなか大変だ。食事が進むにつれて僕に無視され続けた聞こえてはいけないはずの声は、どんどん深刻な言葉を吐く。

「あなた、よくこんなところで食事なんか出来るわね。私の言うことがおかしいと思ってるの？　人殺しのくせに。だから私はあなたなんかクズだって言ってたのよ」

母さんの声でこんなことを言われると、幻聴だと解っていても、血の気が引くような思いがするね。だって、もしこの世の中に霊魂というものがあるとしたら、きっと同じことを言うだろうしなあ。言葉にリアリティがあるから、僕の心を揺るがすのだ。

理紗の雑談に、表面を合わせ、笑いながら、僕は冷や汗をかいている。話になんかちっとも集中出来やしない。理紗が言ってることはよく解らないが、彼女が笑顔の裏で僕の様子に不安を感じているってのは解ってしまう。その彼女の表情から、自分が完全に隠し切れていないと気がついてしまう。思ったより、僕はやばいぞ。

こりゃ、洋一君と約束したことについて、早いうちに考えておかなければならないな。そろそろかなと考えはじめてはいた。タイミング良く彼が現れたのは、きっと今がその時期だということだろう。神の意思を感じるなぁ。

考え事ばかりしていたせいで、結局、何をどう喰って、どんなことを喋ったのかさっぱりわからなかった。

「楽しくなかった？」

夜の街を歩きながら、理紗が言う。

「そんなことないよ」

「でも、なんだか辛そうだった。やっぱり、外食しないで家でゆっくり食べれば良かったかな。でも一緒にフレンチ食べたかったんだもん」

「それ以前の問題として、僕はフレンチとか味が解らんからなぁ。クリームとかバターとかなんだかはっきりしないんだよ。醤油かけたかった」

僕が言うと、理紗が笑う。でもその笑顔は作り笑いなんだよね。理紗は僕の状態について確信に近いものを持っている。そして、僕が彼女に気がつかれていると気がついてしまったことも気がついているだろう。なんだかややこしくなったな。要するに、合わせ鏡を想像してもらえばいい。

僕も、うまく隠してはいるつもりなんだけれどね。お互いもうちょっと鈍ければ、ラク

だったんだろうなあと、思った。

同じ夢ばかり見る。

冬で空気が冷たい。僕はあのボロい家に住んでいて、ぽかぽかするコタツに両足を突っ込み、睡魔にやられて船を漕いでいる。理紗がそんな僕を揺すって起こす。僕は青い綿入れを着込み、理紗はピンク色の野暮ったいセーターを着ている。ミカンをむいたから食べろと親切を押しつけてきて、僕はそれを口に含みながら、変な夢を見たんだと話す。

「夢の中で僕は人とか殺しちゃって、どこか知らないところで理紗と二人で暮らしているんだ。お互いへらへらしてるけれど、もう駄目なんだ。底なし沼にはまって窒息死していくみたいでしんどい。足掻けば足掻くほど駄目なんだ」

「へー、それは辛そうな夢だね」と理紗は他人事みたいに言う。

「マジですっげえ辛いんだから」と僕は言う。「あんなふうにだけはなりたくないね」

コタツはぽかぽかしていて、僕はすぐにまた睡魔にやられて船を漕いでいる。そして天板の上に顎をのせる。理紗はテレビを見ながらミカンをむいている。僕はコタツから手を出すのが面倒で、目の前にあるそれを唇で引き寄せて食べる。ミカンは冷たくて甘酸っぱくて美味しい。理紗はテレビに夢中で気がつかないので、この嫌がらせに気がつくまで食べてやろうと、むいたはしから全部食べてやる。理紗はやっと気がついてくれて、

「むいてからまとめて食べようと思ってたのに！」と僕を怒る。
　僕はヘラヘラと笑いながら、「いつテレビなんか買ったっけ？」と理紗に尋ねる。
「学君がお母さんへの誕生日プレゼントって言って買ってきたんじゃない」と理紗が言う。
「そうだっけ」
「そうだよ」
「立派なテレビじゃん。僕って親孝行だなぁ」
「自分で言わなくたっていいのに」
　僕はへへへと笑い、目をつむる。コタツは本当に暖かくて平和で気持ちが良い。このまま眠ってしまおう。そのとき、玄関がガラガラと開く音がする。
「ただいま」と声。
「あ、お母さんだ」と理紗が言うのがぼんやりと聞こえ、ああ、そうか母さんが帰ってきたのか。そう考えながら、僕の意識は遠くなってくる。
　そこで僕は目が覚めてしまう。目の前の広大で荒涼とした現実の中に、ぽつりと一人っきりの自分を発見してしまう。
　見覚えのない天井だ。そうだ僕は理紗が借りているとかいう部屋に泊まったのだった。小さいときは馴染みのない空間で目を覚ますと泣きそうになったものだけれど、今でも妙に不安な気持ちになるよ。あの、ボロい家のボロい天井が懐かしい。暮らしているときは、

何もかもが苦しくてもどかしくて、はやく大人になりたいと毎日居ても立ってもいられなかったんだ。でも、今になるとあの頃が一番良かったような気がしてしまうのは何故だろう。

子供の頃を思い出していると、目になんかにじんできた。

「学君」

隣で寝ている理紗が、僕に抱きついてくる。乳房やお腹の柔らかくて温かい肌が、僕の素肌に触れる。少なくとも人の体温には平和があるなと、僕は思った。

「なんだ、起きてたの」

僕は、慌てて目を拭う。

「うん」

理紗は目をつぶって顔を僕の肩に寄せている。気がつかれなかったようで安心した。

「もう朝は結構寒いんだね」

「そうだね」

言いながら、理紗の手が僕の肌の上を胸のあたりから下に滑って、朝を迎えた成人男性なら逞しくあるべき場所に触れる。

「ど、どうしたの？」

「学君の子供が欲しい」

理紗は真剣な顔で言う。
「まだ早いと思うけれどなぁ」
「大丈夫よ。お金だってたくさんあるし。そうしようよ」
理紗は、いかにも自分の発言が名案だったかのようにそう断言し、上半身を起こして僕を見つめる。胸が露わになって揺れている。寒そうだ。
「やめとこうよ」
僕の言葉など無視すると、彼女は布団をめくって僕の上にまたがった。理紗の部分はまだ準備が出来ていなくて、うまく入らないのを無理矢理入れる。痛いだろうと思うけれど、唇を噛んで耐えている。ちなみに僕は痛い。
「無茶しなくたって良いじゃない」
「だって、夫婦だっていう実感が欲しいの」
「実感ねえ」
僕らは世間的には夫婦ということになっている。戸籍上でも夫婦となっている。実質的にも夫婦のような暮らしをしていた。つまり正真正銘夫婦なわけだけれど、新しく作った身分がそうなってただけで、結婚式どころか婚姻届を書いた記憶もない。ついでに言えば結婚をしようと話し合ったことさえないのだから、理紗としては新しい名前や生年月日と同様、夫婦という立場も嘘っぽく感じているのだろう。まあ、僕にもそんな実感はない。

理紗が「主人が」とか「あなた」とか言ってると笑っちゃうし、僕も「妻が」とか言っても全然妻だという気がしない。つうか妻じゃなくて理紗でしょ、と思ったりしてしまう。
　理紗は余程そのことを不満に思っているらしく、たまにぶつぶつと言ってる。じゃあ結婚式でもしようか、と僕が言うとそれは彼女の望むものとは違うらしく、
「野村和夫と野村沙智子じゃなくて、木村学と九条理紗で結婚したいんだ」
　などと言う。
「それはもう無理だよ」
　僕がそう返すと、
「そんなの解ってるけど、でも思う分には自由じゃない」
　理紗が唇をとがらせて終わるのがお決まりのパターンとなっている。
　そうか、結婚は不可能だと理解したら、次は子供ときたか。自然といえば自然な流れだとは思うけれど、そりゃいけないよ。よくそんな勇気がある。僕たちの間にもし子供が出来たとして、ここにもう一人自分一人では生きていけない他人の愛が必要なか弱い人間がいたとして、それは泣き叫んでいる。今よりもっと破滅的な光景だよそれは。僕や理紗に、まともな家庭が築けると、少しでも思っているのだろうか。
　そんな僕の考えをよそに、理紗は動いている。頑張っているようだけれど、結論から言うと多分無理だ。僕は結構きつい薬を常用しているのだけれど、それは性的能力を大幅に

奪う。いま現在硬直しているという事実でさえ希有であるのに、最後まで至れるとは到底思えない。実際今も少しも興奮していない。かといって、それを言ってしまうのも可哀想な気がして、ぼんやり見ている。理紗はどんなことを考えながら行為を行っているのだろう。寝起きの頭は働かず、理紗をうまく読むことが出来ない。

そのうち諦めるだろうと、僕は空虚な気持ちのまま、黙ってじっとしている。部屋を理紗の吐息と衣擦れ、そして濡れた肉のこすり合う音が支配する。理紗は真剣な表情で、布団に手をついて不器用に腰を動かしている。時間が経つにつれて、僕の朝の生理が収まり、用を成さなくなって抜けてしまう。

「駄目っぽいね」

僕が苦笑いしながらそう言うと、不意に、涙が理紗の目からこぼれ落ちた。僕は唐突な出来事に驚いてしまう。

「ごめんなさい、なんか」

理紗は動作をやめて、両手で顔を押さえる。涙はそれでも頬を伝い落ちて、僕の腹を濡らす。

「私、どうしたらいいかわからなくなっちゃって」

ヒクヒクとしゃくりあげながら、理紗は言う。

「り、りさ？」

必死で押し殺そうとしているのは解るが、それでも堪えきれず、ついに理紗は声を出して泣き始める。理紗がこんな絶望的に泣くのは、いつ以来だろう。
ついに決壊してしまったんだ。彼女が感情を露わにしてしまったという事実が、僕らの間の致命的な何かがついに限界を超えてしまったのだと伝える。やっぱり、もう無理なんだ。僕の頭はまともではないし、理紗は追いつめられ、疲れ果ててしまっている。これ以上逃げていく場所もなければ、立ち上がって走るだけの力も、ましてや戦うことなど到底思いもよらない。
すっかり脱力して、見上げると馴染みのない天井。逃げて、逃げて、僕らはこんな世界の果てみたいなところまで来て、なんて愚かなことをしているんだろう。
頭が少しずつ覚醒し、また死者の声が囁きはじめる。

病院に帰った。休憩所でぼんやりと空を眺めている。青空に綿菓子を引き裂いたような雲が浮かんでいる。雲はいいな、自由で、くっついたり離れたりしていて、などとどうでも良いことを考えていた。
「野村さん、なんか暗いですよ！」
ヨリコちゃんが話しかけてくるのに、僕は生返事を返す。
「覇気がないですよ、どうしたんですか？　離婚ですか？」

僕に覇気があったためしなどないと思うけれど。彼女に少しだけ視線を向けると、今日もまた見たことのない服を着ている。病院に一体何着の服を持ち込んでいるのだろう。
目の前で彼女が何か喋っても、ともすれば僕は聞き逃してしまう。無数の声がひっきりなしに僕の意識を蹂躙している。一つ一つの言葉は解らぬけれど、全体としては僕に向けられた黒い悪意の固まりであることだけは明快だった。ナイフみたいにとがっては、僕が何かまともな事を考えようとするたび、グサグサに切り裂く。抵抗の芽は即座に摘まれ、僕は全てを奪われただ存在することだけを許されている。息が苦しいなあ。息が苦しいですねえ。
あれから理紗はすぐに我を取り戻して取り繕ったけれど、彼女が明るく振る舞おうとすればするほど、掬う指の間からぼろぼろこぼれ落ちて、僕は哀しくなってしまった。
「あたし、また腕切っちゃったんですよ」
ヨリコちゃんは、僕の耳に唇を寄せてそう言った。その言葉が気になったわけでもないけれど、僕は彼女の相手をすることにした。
「そうかあ、痛かった？」
そんなに頻繁に腕を切りたくなるなんて、彼女のエネルギーは無尽蔵なんだろうか。僕もこのくらいの年頃のときは、こんなに活力にあふれていたのだろうか。
「ええ、まあ」

返事をすると、ヨリコちゃんは楽しそうに微笑んだ。
「痛いのになんでするの？」
「なんか、すっごく切りたくなっちゃうんですよ」
「そりゃ大変だね」
「そうなんです」
「そんなことして、人に構ってもらおうとしちゃ駄目だよ」
「えー、そんなつもりじゃないんですけど」
ヨリコちゃんはニコニコと笑っている。会話の内容はどうあれ、人の注意を自分に向けられたことが嬉しいのだろう。彼女は人に見捨てられることを極度に恐れ、自分が構われることだけを求め続け、それ以外には何ひとつ望んでなんかいないんだな。
「良くも悪くもきみはすごく純粋なんだね」
「もう、そんなこと言って、私をどうするつもりですか？」
彼女は照れているけれども、別に褒めたわけでもない。
ヨリコちゃんはこれからも際限なく人の好意を求め続け、自分も周囲もグチャグチャに破壊してゆくのだろう。出来うることならば後悔も罪の意識もなく、築いた屍の上で爽やかに哄笑して欲しいものだ。やっぱ人間、自分がたどり着いた場所がどんな状況でも、明るく心から笑っていればそれで良いのだと思うな。僕は。羨ましい。

気がつけばまた僕は雲を見上げていた。いつの間にかヨリコちゃんは去っていて、他の患者もみな帰っていて、僕は一人取り残されていた。

今まさに点呼せんという場面でどうにか病室にたどり着く。同室の人々が、同じ場所を行ったり来たりしながら独り言を呟いていたり、古いアニメソングのサビの部分をでたらめな歌詞と音程で繰り返し歌っていたりする姿を見ると、懐かしい場所に帰ってきた気がする。やっぱりここは良いな、心が安らぐ。僕も何もかも放棄して、ここで一生を過ごすべきなのかもしれない。正直に言って薬の量を増やしてもらおう。それで僕の苦しみはほとんど解決する。諦めるってそういうことだ。そんなことを考えていると、ふと、大里さんが居ないのに気がついた。

「どうしたんですか？」

大里さんと仲が良い同室の患者に僕は訊いた。外泊しているにしては、綺麗さっぱり荷物がなくなっているというのはどうも妙だ。すると、退院したのだろうか。

返事はない。彼は手元のファーブル昆虫記に夢中で僕の質問に気がつかない。僕だって、ファーブル昆虫記がとても興味深い書物であることは認めるけれども、ちょっとは相手をしてほしい。二度、三度と同じ言葉を繰り返すと、彼は目だけ動かして僕の顔を見て、

「死んだ」

と言った。

「え？」
「昨日の朝散歩してたら、転んで頭打って死んだ」
それだけ言って、彼はまた書物に目を落とした。なんたることか、大里翁は僕がたった二日病室をあけていた間に、実にアホくさい死因で昇天してしまった。僕はおかしくて、声を立てて笑った。ベッドに座っても収まらず、一人でくすくす、ぷーっ、と噴き出してしまう。そうかあ、転んでぽっくり死んでしまったか。何も生み出さず、何も喜ばず、こんな社会の孤島でただひっそりと生きて、虫けらみたいに死んでしまう。誰にも苦しみを漏らさずに一人抱えたまま。良いね、その死に方は哀しくなくて実に良い。僕もそんな死に方をしたいものだなと思った。

僕は笑い続けている。他の患者は歌を歌っている、一人呟いている、ファーブル昆虫記を読んでいる。ただ少しだけ気になるのは、せめてあれだけ楽しみにしてた旅行が終わったあとに亡くなってたら良かったのに。神様ってひでえな。

一人居なくなったからといって病院の生活は何も変わらない。悲しんでいる人も多いとは思うが、みな感情表現が上手ではないので悲壮な感じはしない。当たり前のように一日が始まり、そして終わってゆく。大里さんが特別人望がなかったわけではなくて、そういうものなのだ。一日三回心の落ち着く薬を飲むみなは、少々のことがあっても安定を崩さない。時間になるとナースステーションにマグカップに水を汲んで行列を作る。ナースは

患者一人ずつに処方されている向精神薬を与える。薬局で貰うみたいにいちいち説明書きがなく裸で錠剤を渡されるので、なんの薬だかよくわからぬそれらを飲む。ナースステーションの窓口で、顔をうわむけてマグカップを傾けて薬を飲むその様子は、さながらエサ箱にむらがる鶏のようだ。みな無言で、鶏みたいな虚ろな目をして、生気のない表情をしている。僕もきっと同じ顔をしているのだろうね。僕は口に含んだ錠剤を飲んだフリをしてあとでトイレに流す。

その日は体が重くて、ベッドの中で目をつむっていた。朝食も昼食も摂らなかった。途中で、ナースに何か言われたような気がする。でも、僕の頭の中は他の声でうるさかったので、何かの聞き違いかもしれない。今日は昨日にも増してうるさかった。目を開くと酷いものばっかり見える。この状態では何を考えても間違ったことしか出来なそうなので、僕は出来うる限り思考を停止させていた。

昼過ぎになって、肩を揺すられた。なんだと思ったら、僕に面会者が来たのだと言う。てっきり理紗かと思って緊張してしまった。僕は彼女にどうやって接すればいいのか、はっきりとした方針を決められないでいる。だけれど、そうではなかった。身だしなみの良い紳士が真面目くさった顔をして椅子に座っている。

「あ、ちょっと待ってください」

僕は一旦病室に戻り、必要なものを取ってきてから、彼の向かいに座った。深呼吸をす

って来たんだが」

「いや構わない。今は休養が第一だからな。今日は、退院後のポストについて話そうと思

「まああですね。ひげも剃ってなくてすみません。今日は寝ていたものですから」

重々しい口調で喋る彼は僕の会社での上司だった。

「調子はどうだ？」

る。少しだけ頭を僕に使わせてくれ。

「退院後のポスト？」

「ああ、文句も言わず働いてくれるものだから、無理をさせてしまって済まないと思っている。今後は今までよりも上の役職についてもらって、重要な決定だけを行ってもらおうと思っているのだが、やってくれるか？」

「つまり、昇進ってことですか」

僕は笑ってしまう。

「何がおかしい？」

「いや、だって、ちょっと待ってくださいよ。こんな病気になった人間を昇進させるなんて正気の沙汰じゃないですよ。もう結構ですよ。今までだって散々優遇してもらったんだから、ここで潔く辞めさせてもらいますよ。お気持ちは有り難いですが、そこまで甘えたくはないです」

「会社だって、それだけの力量がない人間を役職には就けんよ。これまでのお前の仕事ぶりは他の誰にも真似が出来ない。予想を遥かに上回ってよくやってくれてる。今は年齢が若すぎるが、いずれもう少し上のポストも用意出来るだろう。これは私一人の意向ではなく、会社の見解だと思ってくれて構わない。うちの会社が一社員にこうした見解を出すという事実を認識して欲しい」

「待ってください」

上司の話は長く続きそうだったので僕は割り込んだ。

仕事場は好きだった。生き甲斐も感じられたし、自分が何かして他人が喜んでくれるのは嬉しかった。良い場所だと思ってた。だけれど、もう駄目だろう。他人が思っているより僕はずっとイカれている。

しかし、僕は病状について正直に話すわけにはいかなかったので、他にやりたいことがあるんです、と理由を変えて説明した。

「そうか、お前なら何をしても成功するだろう。のんびりと夫婦で暮らしながら自分のペースで仕事をするのは合っているかもしれないな」

彼は大した抵抗もなく、納得してくれたので有り難かった。

「そういえば、お前の奥さんに問い詰められたぞ」

理紗が上司の名刺を見て、電話をしたらしい。そして質問を重ねたのだそうだ。僕の仕

事の内容。どうして雇ってくれたのか。どこで知り合ったのか。
「なんて答えましたか？」
「それらしく誤魔化しておいたよ。まさか本当のことを言うわけにもいかないだろ」
「言っても良いんじゃないかな、と思いますけどね。彼女は衝撃を受けるだろうけれど。
これも彼女に対する裏切りなのかな」
言いながら、僕は病室から持ってきた、そしてポケットに入れてあったそれを、テーブルの上に置いた。洋一君から受け取ったカフスボタンだ。
「これ落としたでしょう？」
「何故、ここにこれが？」
「僕の家のお墓の前に落ちていたんだそうです。僕の母のために、墓参りなんかしてくれていたんですね。感心しましたよ」
「そうか、知られてしまったのか」
「もう、僕には構ってくれなくてもいいですよ。これっきりにしましょう。最初から、関わらないほうが良かったんですよ」
「いや、待ってくれ。もう私は墓参りなぞ行かない。許してくれ」
「何言ってるんですか？」
彼が申し訳なさそうにしているので、僕は苦笑してしまう。僕の言葉はどうも、普段か

ら皮肉ばっかり言っているせいか、額面通りに受け取ってもらえない。そりゃ、理紗に感情表現がよく解らないと言われても仕方がないな。

「よく考えてくださいよ。悪いことをしているのは僕のほうなんだ。僕は母さんを殺して、あなたが罪を償うチャンスを奪ってしまった。これはとても酷いことだ。死んだ人に対して犯した罪は、どんなに償いたいと思ったって、絶対に償えないんですよ。その辛さなら僕が一番よく知っています。たとえゾンビでもなんでも、本人が目の前に現れて罵ったり罰を与えてくれたりしたほうがどれだけラクか」

「学」

彼は僕の本当の名前を呼ぶ。それは彼がつけてくれた名前だ。

「あなたは何年も僕や母さんに対して後ろめたく思ってくれていたんでしょう。少なくとも、僕に対してはそれだけで充分ですよ。逃げてから、色々お世話になったけれど、これ以上迷惑をかけちゃいけないと思うんです」

「私を、許してくれるのか？」

すがるような目つきで僕を見つめている。僕はその弱々しい態度が見ていられない。

「別に。ただ、罪悪感で自分自身を苦しめちゃう人とか、そういうものが少しでも世の中にあるのが、嫌になっただけですよ」

「しかし」

「いいですか、死んだ人間は永遠に許してくれない。でも、生きている人間同士なら、許し合うことが出来るんだ。それは素晴らしいことだと思いませんか」

父さんは、黙り込んでしまった。多分、僕はいま正しいことを言った筈だ。少なくとも、正しいことのつもりで言った。これでもまだ間違いならば、もう誰に何を差し出せばいいのか解らない。

窓から見える空に、燕が舞っている。部屋が沈黙で満ちる。僕の心はシンと冷え切っていた。そういえば、いつの間にか幻聴も幻覚もすっかり収まっている。

突然僕は感動してしまった。忌まわしい僕の歪んだ想念の皮膜を剥ぎ取った、ありのままの世界は、こんなに静かで美しいものだったのか。ため息が、胸の中にあった何か固くて苦しいものを一瞬で砕いてしまった。

いや、本来そういうものだとは想像していた。生きていることが素晴らしい、そう言って涙を流す人の顔に嘘の匂いは感じない。ただ、それは僕よりもっと立派で賢くて善良な選ばれた人間だけが味わうことを許された特権で、僕みたいなどうしようもない人間には縁がないものだと思っていた。僕には何ひとつ純粋で美しい感情はなくて、何を見ても心は泥のように無反応で、ずっと鬱屈した暗くて醜いものだけを心の中に育てて生きてゆくのだと思っていた。

なんだか、涙がボロボロとこぼれてきた。

「生まれてきて本当に良かった」
今なら自然に言えるかもしれないと思って、試しにそう言ってみた。言葉だけ浮いてしまうんじゃないかと心配していたけれど、驚いたことに、つられて父さんも泣き出してしまった。僕は、どうやらそれらしく言えたらしい。それとも、お互いにギリギリまで弱ってるだけか。

僕と世界の間に、再びあの気色の悪い膜が姿を現してくる。僕の感覚をノイズが汚し、たった一瞬だけ開いてくれた世界は、再び閉じはじめてしまう。今あった全てを肯定してくれるようなこの不思議な感覚を、僕はもうすぐ忘れてしまうだろう。光が完全に消え去ってしまう前に、少しでも理紗のために残しておきたいな、と思った。
僕は父さんを置いてすぐに病室に戻り、ノートとペンを取り出した。意識が曖昧になってしまって、あまり長い文章を書くことが出来ない。理紗はここから、何か読み取ってくれるだろうか。僕の言いたいことを、解ってくれるだろうか。
書き終わると、ベッドに仰向けに横になった。うまく書けたかどうかわからないけれど、これが今の僕に書ける精一杯だ。
風景が真っ赤で、マグマのように、というよりは誰かの内臓の中にいるかのように、ど

ろどろと溶け落ちてしまう。体に力が入らない。こりゃ、今までで一番最悪の状況だな。もうほとんど僕は残っていないのだ。僕の大部分は向こう側についてしまった。協力して対抗することはおろか、自分の明確な意志も解らない。さっきの瞬間が、僕の最後の全てだったのだろう。誰のものともつかない声が頭の中で渦巻き、なんだか解らない極彩色のヘドロが視界に充満している。それらの全てはただ僕を否定するだけで、何も生み出してはくれない。

「生きろ」

声は延々と繰り返し、大合唱をしている。声に言われたおかげで僕は、自分が何をしようとしているのか、気がついた。そうだ、声はいつでも僕のやりたいこと、正しいと思っていることの逆を言っていたじゃないか。

僕は立ち上がって病室を出ようとして、一度戻り、さっきのメモの最後に追伸を付け加えた。

不思議に、なんの後悔もない、充実した気分だった。

EPILOGUE

七年と一ヶ月に及ぶ木村学と九条理紗の逃避行は幕を閉じた。
主犯である木村学は入院していた精神病院のトイレで首を吊って自殺。彼と一緒に逃亡していた九条理紗は、自殺の報を受けると、警察に出頭した。それは新聞の記事にもなって、七年前の事件の概要とともに掲載された。
僕の家も、テレビ局がインタビューに来たりして騒がしく、毎日が落ち着かない。
姉は出頭した直後警察で気を失ってしまい、すぐさま病院に入院するような有様だった。そのあとで僕も母と一緒に面会したけれど、僅かな間にげっそりしてしまって、まるで幽霊のようだった。母とは七年ぶりの再会の筈だったけれど、表情一つ変えず、うつろに中空を見つめている。
僕は学校を休もうとしたが母に止められて、仕方なく通っているが気が気でない。母は毎日のように姉に会いにいっているらしい。少しずつ回復して、最近は警察に身柄を移されて、これから正式な取り調べを始めるらしい。
「警察のところにいる理紗を見るのはなんだか辛いわね」
母はそう嘆いていた。

「理紗ちゃん、だんだん私と仲良くなってきたよ」
嬉しそうに言うサオリは、母に連れられて面会に行っているらしい。僕はきっとサオリが無理を言って一緒に行き、迷惑してるんじゃないかと思ったのだけれど、
「佐織ちゃんがいると、理紗もなんとなく話し易いみたいなの。私と二人きりだと、お互い黙り込んじゃって」
わざわざ好んでサオリを連れていってるのだと言う。
「私のこと、妹だって言ってるんだよ。どういう意味かな？」
サオリは姉に会いにいくと、その夕食時に話したことをいちいち教えてくれる。その話を聞いていると、確かに、姉は元気を取り戻しつつあるようだった。
その週末、父が海外出張から帰ってきた。家でサオリが暮らしていることを説明すると、素性が気に入らなかったらしいが、父としても今はそれどころではなく、「あとでゆっくり話を聞かせてもらうからな」とだけ吐き捨てるように言った。
そして、その日は僕と父と母の三人で姉の面会に行くことになった。留置所へ向かうタクシーの中で父は興奮を露わにして、「ちゃんと良い弁護士をつけたのか？」「取り調べの際何か不当なことされていないだろうな？」などと、ひっきりなしに喋っていた。母は「警察の方は優しくしてくださってるらしいですよ」と言った。僕はこの三人で居ることに居心地の悪さや不自然さを感じて、黙っていた。

僕は何か後味の良くない苦いものを感じていた。あのとき僕は木村学に姉を帰らせることを提案した。彼はそれは難しいが、その方向で考えてみようと約束してくれた。そしてほどなく、自ら死んでしまった。結果として確かに姉は帰ってきた。もしかして、木村はこうなると予想して自殺をしてしまったのだろうか。だとすれば、僕の意見が彼の死になんらかの影響を及ぼしたのかもしれない。自分の言葉が誰かの死に関与したと思うと、やりきれなかった。

しかも、こんな形で帰ってくることなんか、僕は望んでいない。姉は木村を失って、この先平気なのだろうか。二人が揃って解決することは出来なかったのだろうか。これなら、姉が帰ってくるよりも、二人でどこかで暮らしていてくれたほうが遥かに良かった。木村のやりかたは、無責任に思えた。

一時間ほど待たされてから、面会となった。面会室の中央には透明な板があって、面会者と拘留者との間を仕切っている。これはガラスなのだろうか。監守が一人部屋にいる。姉は短かった髪をさらに短く切り、母が差し入れたグレーのトレーナーを着ていた。穏やかな表情で、そのまま空気に溶けてしまいそうだった。

父と姉が会う、ということで、僕は緊張していた。最初に部屋に入った僕は姉に挨拶をして、そのあと父が声をかけた。

姉は、ちらりと父の顔を見て、

「久しぶりです」
表情も変えずに硬い口調で言った。父は、タクシーの中で話していたのとほぼ同じことを姉に言い、姉は、母が先ほどしたのとほぼ同じ返事をした。
父はガラスにくっつきそうなくらい顔を寄せると、
「あいつがお前を騙したんだな。そうだろ？」
「大体、昔からあいつと付き合うなと言っていたじゃないか。これで父さんが正しいって解ったろ」
「理紗が優しいから、いいように利用されてしまったんだ。ちゃんと警察に話すんだぞ」
と言った。
そのとき、僕が見た限りではいつも穏やかだった姉の表情が強く歪み、ややあってから、涙をこぼしはじめた。
「辛かったんだな。もう大丈夫だ。お父さんは許してやる。だからこれからは、お父さんの言うことを聞くんだぞ。お父さんは間違ってなかったろ？」
父は猫なで声で言った。姉は手のひらで涙を拭うと、父に向き直り、はっきりとした声でこう言った。
「違うんです」
姉の目には、強い意志の光があったように思う。

「騙されたわけではないんです。私はちゃんと考えて行動しました」
「何を言ってるんだ理紗？　お前、まだ解らないのか？」
父は眉間にしわを寄せて、姉をたしなめた。
「解らないのはお父さんでしょう？　あなたに、誰かを責めたり侮辱する資格がおありだと思ってるんですか？　警察の方には、全てありのままのことをお話しします」
姉の強い意志を秘めた言葉に、空気が凍りついた。僕も、当然父も、そして母までも。
姉の言った『ありのままのこと』が何を指し示しているのか、僕が受け取ったのと、同じ意味で受け取ったのだと思う。少なくとも父がそう感じたのは確実だった。急に、顔に汗が浮かびはじめている。
「全てを受け入れて、出来れば乗り越えてください。そうしてくれたなら、きっと、私も、それでも本当は嫌だけど、でも、学くんが……」
言いかけて、姉は言葉に詰まり、口を閉ざす。みるみるうちに涙があふれ、もう一度まぶたを指で拭った。みな、黙り込む。
「洋一」
「え？」
突然姉に名前を呼ばれて、僕は狼狽えてしまう。
「昨日泉ちゃんから聞いたんだけど、今日の夜にね、学君のお通夜があるんだって。洋一

が行ってくれる？」
「なんで僕が？」
「ホントは私が行きたいんだけれど、それは出来ないからね。私のかわりにお願い」
姉の真剣な口調や視線には有無を言わせぬものがあり、僕は引き受けざるを得なかった。
僕が渋々了承すると、姉は嬉しそうに頷いて、それから、今までの会話がなかったかのような明るい調子で、母を相手に話を始めた。
帰りのタクシーでは、みな沈黙していた。父は苛立ちを隠しきれずに膝を細かく揺すり、母はそれを不安そうに見ていた。

「なんか行くの嫌そうだね」
サオリは父から借りた喪服の、防虫剤の匂いを興味深そうに嗅ぎながら、僕に質問する。いつもながらサオリは意外なところが鋭い。
「嫌っていうか、怖いんだよね」
僕は鏡に向かってネクタイの形を直しながらそう答えた。
「幽霊が怖いの？」
「幽霊だったら良かったんだけど」
サオリから上着を返してもらい、身につけた。父さんの服は、いつの間にか僕には裄が

短くなっていた。
「なんか殺し屋みたい」
黒ずくめになった僕を見て、サオリはそう言った。
「サングラスでもかけようか？」
僕はそう言ってベッドに腰掛けると、自然にため息が出てしまう。サオリが隣に座り、僕の顔を心配そうに見つめている。
「ホントに重症なんだね」
「そうでもないけどさ」
中学生のとき、同級生の葬儀で自分に起こったことを思い出していた。
「本当だったら、僕みたいな不謹慎な人間は、葬式に行っちゃいけないと思うんだ」
「しょうがないよ、ヨウイチはそういう人なんだから」
「そうだね、オレってそういう人なんだよね」
乾いた声が出てしまう。おそらくサオリは元気づけてくれてるつもりなのだろうけど、ますます追いつめられた感じだ。
「どうしても嫌だったら、行くのやめたら？」
「そうはいかない」
そんな馬鹿げた理由で、姉の真剣な願いを断れる筈もない。僕はなるべくそのことは考

えないようにしながら、家を出た。空がどんより曇っていた。テレビの天気予報で今夜は雨が降ると言っていたのを思い出し、僕は傘を持って出かけた。

陽が落ち、小雨が降りはじめていた。通夜だといってもなんの看板も出ていなかったが、読経の声が聞こえて、幽かにお香の匂いがするのでそれと解る。壁に書かれていた落書きはさすがに落としたらしいが、ガラスのひび割れなどはそのままだった。玄関の横に小さく張り紙があって『ご焼香の方はこちらにお回りください』と矢印が書かれている。

猫の額ほどの庭に足を踏み入れると、部屋の戸が開け放たれていた。その奥には祭壇があり、それに向かって僧侶がお経をあげている。部屋の中で正座をしているのは、木村富子さんと、泉さんと、その母親の三人だけで、僕が礼をすると、彼らも正座したまま頭を下げた。この上なく寂しい光景だと思った。

縁側に焼香台が置かれている。僕は抹香を香炉に二回落とし、合掌した。一連の動作を終えると、泉さんが「玄関からあがって」と声を潜めて言った。

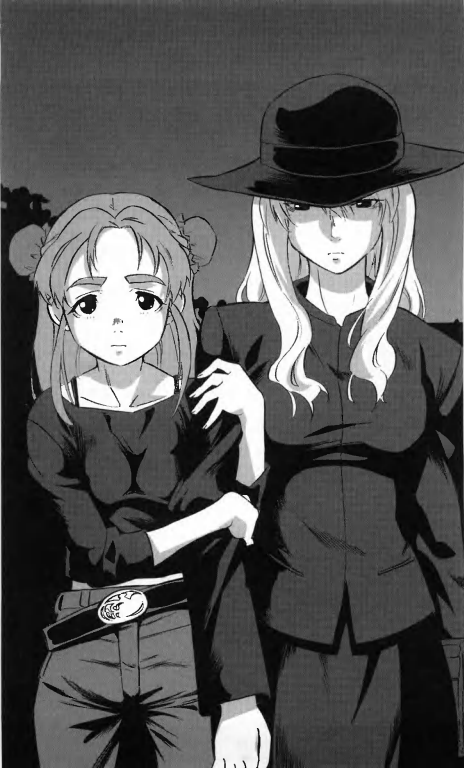
白黒の幕が張り巡らされた居間に入り、泉さんの隣に座った。

「待ってたんだから」

泉さんは僕に耳打ちする。僕たちはひそひそと話しはじめた。

「遺影が、やたら子供っぽい写真ですね」

「木村君、写真なんか全然撮らなかったから、中学校の卒業アルバム引っ張り出してきたのよ。ホント困ったわよ」
「泉さんが選んだんですか？」
「だって、私がこういう手続きしなかったら誰がやるの？　富子さん一人にするわけにはいかないでしょう」
「でも、会社があるじゃないですか」
「そんなの休むわよ。まったく、悲しんでる暇もないんだから」
「こら、泉」
正面の渡会さんに睨まれると、泉さんは少しだけ苦笑して、姿勢を元に戻した。
読経を聞きながら、しとしと降る雨を眺めている。焼香をあげに来る人もなく、香炉から昇る煙は今にも途切れてしまいそうだった。縁側から雨で冷えた夜の空気が吹き込んでくる。
「戸、閉めましょうか？」
泉さんが身震いしたのを見て、富子さんがおそるおそる提案した。
「何言ってるんですか。駄目に決まってますよ」
泉さんは怒ったように、そう言った。
そのとき、庭の向こうからボソボソと誰かの話す声がした。張り紙を見て、何か喋って

いるらしい。
「やっぱりやめようよぉ」
と声が聞こえた。その声と話し方に、僕は聞き覚えがあった
やがて現れたのは、二人連れの若い女性だった。背の高い方は黒いスーツに、黒い帽子を深くかぶり、広いつばで顔を隠すようにしていた。もう一人は、ただ黒いだけのカジュアルな服を身につけた少女だった。
「あっ」
僕と目が合うと彼女は声を上げたので、僕は確信を持った。それは志村麻里だ。今日はいつものあの奇妙なメイクをしておらず、見ても即座にはわからなかったのだ。
麻里はもう一人の女性に腕を絡め、相手を支えるように立っている。これが麻里だとすると、もう一人の女性は、
「……先輩」
泉さんが低い声でそう呟くと、帽子の女性はこちらに向かって礼をした。僕たちも、無言で礼を返す。気がついたのは、僕と泉さんだけらしい。富子さんと渡会さんは、表情に変化を見せない。
彼女がどういうつもりでここへ来たのか解らない。麻里は不満を隠すつもりもないらしく、露骨に表情に嫌悪を示している。

帽子の女性は静かに焼香を終えると、手を合わせた。そして傍らの麻里にも促し、彼女も渋々同じ動作をする。麻里が所作を終えると、帽子の女性は鞄から袱紗の包みを取り出し、

「喪主の方は？」

と呟いた。富子さんはそれを受けて、縁側に移動する。

「係の方がいらっしゃらなかったので。これを御霊前にお供えください」

「これは、有り難うございます」

富子さんの体の陰になって見えなかったが、袱紗から香典を差し出したらしい。富子さんは恭しく礼をする。

富子さんが頭を上げると、彼女たちは祭壇にもう一度礼をして、その場を去っていった。

その後、たまたま気がついたので挨拶がてら、といった服装で近所の人が何人か焼香をあげにきたが、その数は片手の指にも満たない。そうして、読経は終わった。僧侶が退出すると、葬儀社の人が通夜の終わりと明日の予定を告げた。

戸締まりをしてから、一同、といっても四人しかいないが、その人数で会食をした。祭壇の部屋で、すっかり冷えた仕出しの食事を前に、誰の箸も進まない。話も弾まず、雨音だけが空間を満たす。

「もっとちゃんとしたお葬式を挙げてあげたかったな」

沈黙を破って泉さんが呟くと、
「とんでもない。うちの出来損ないには、お経をあげるのだって勿体ない」
富子さんは言下に答えた。
「でもねえ」
泉さんがちらと見た視線の先には棺があった。あの中に木村学の遺体が横たわっているのだ。
「学のことは気にしないで、今日はみんなでお酒でも飲んでやってください。泉ちゃんはお酒好きでしょう？」
富子さんはそう言って、一升瓶から直接冷や酒を注いで回った。
「そりゃ、お酒は好きですけどね……」
湯呑みになみなみと注がれた冷酒を見ながら、苦笑した。それでも、片手で湯呑みを掴むと、グイと傾けた。そのとき僕は、泉さんの目の下にうっすらとくまが出来ていることに気がついた。
渡会さんは帰って、僕と泉さんが残った。祭壇のロウソクと線香を守るために、夜は交替して番をすると決めた。富子さんは最初に残ると言い張り、僕と泉さんは別の部屋で仮眠のために床を延べた。灯りを落とし、少し埃っぽい匂いのする布団に潜り込んで考え事をしていた。眠れるものではない。大体僕は薬を飲まなければ眠れない。

「起きてる？」
泉さんも眠れないらしい。僕は天井を見つめたまま、返事をした。
「洋一君は帰っても良かったのに」
「オレは姉さんの代理ですから。姉さんだったら残ったに決まってるし」
「そうね。でも、理紗ちゃんが来れないなんて、おかしいよね」
「そうですね」
「そういえば、理紗ちゃんは、昔とあんまり変わってなかったな。あの頃のままだった。きっと、木村君もそうだったんだろうね。なんだか私だけ一人で歳とっちゃったみたい」
泉さんは寂しそうに言った。姉が変わらないって、そう見えたのが僕には驚きだった。
「でも、いきなり木村君が死んじゃったとか言われても、信じられないわよ。死ぬってよく解らないな。もう少し時間が経ったら実感するのかな。洋一君は解る？」
そんなこと、僕に解る筈がない。泉さんも、明確な回答など期待してはいないだろう。僕はただ、「どうなんでしょうね」とだけ言った。泉さんは黙り込んだ。顔を見ると、何か考え事をしている様子だった。
やがて、交替の時間になった。僕と泉さんは今日は眠れないだろうという点で意見が一致したので、二人で居間に向かった。部屋の照明が落ちて、ロウソクのオレンジ色の光だけが照明の全てだった。物の影が不安定にチロチロと揺れている。

富子さんは祭壇の正面に正座をして、じっと棺を見つめていた。
「どうか、馬鹿ものの顔を見てやってください」
富子さんの言葉で、僕は棺の顔の部分の窓が開いていることに気がつき、ひるんだ。
「駄目よ、そんなふうに言ったら」
泉さんが困ったように言うと、富子さんは枯れ枝のような腕を伸ばして窓を閉じた。僕は誰にも気づかれぬようにそっとため息をついた。
「まさか、生きている間に娘どころか孫の葬式の面倒まで見ることになるとはねえ。なんで、こんな老いぼれが最後に残ってしまったんだろう」
恨めしそうに言う富子さんのしわくちゃな顔は、灯りのせいだろうか、到底生きた人間のものに思えず、何百年も経て乾燥しきってひび割れた木像のように見えた。

夜が明けても、雨は止まなかった。
雨戸を開けると、庭には大きな水たまりが出来ている。
「ここから棺を出せるのかしら」
表の光にまぶしそうに目を細めながら、泉さんが言った。
やがて渡会さんが来て、葬儀社の人が来て、それで予定された参列者はおしまいだった。
棺を運ぶときの人手として葬儀社の人が四人も来ており、故人に縁のない人ばかりの葬式

となってしまった。
　昨日の僧侶が現れて、再び読経が始まり、一同は焼香をあげた。読経が終わると故人と最後のお別れとなり、部屋の中央に台を作られ、棺がその上にのせられる。僕は棺に入れる白い花を渡されたが、緊張していてなんの花だか覚えていない。
　係の人が棺の蓋に手をかけたとき、僕は口の中がすっかり乾いていた。
　棺が開くと、白装束を着て、指を組まされた木村学が横たわっている。富子さんから花を捧げ、僕は最後だった。木村の顔は穏やかで、化粧で巧妙に死の色を消された顔は、まるで眠っているよう、と表現するべきなのかもしれないが、僕の目には少しも眠っているとは映らなかった。それはやっぱり、死んでいるのだ。そこにあるのはただの死体だ。
　立ち止まっていると促されて、僕は木村の肩口に花を置いた。列席者全員が花を捧げ終わり、葬儀社の人が手際よく残りの花を棺に納めて、たちまち木村の姿は花に埋もれた。その間じゅう、誰も口をきかなかった。
　本来なら喪主の挨拶があったり、閉式の辞があったりするのだろうけど、そういった形式的なものは全て省略された。出棺のときに、棺を担ぐための合図の声が少しあっただけで、おそろしく静かな葬儀だった。
　それから火葬場に行って、骨を焼いた。
　棺が炉の奥に押し込まれ、鋼鉄の分厚い扉が閉じられたときに、

「暑そうだね」

と泉さんが呟いた。

控え室で重苦しい待機時間を過ごし、焼き上がりを告げられ、真っ白な骨の前に立つと、顔に熱い空気が触れた。これが目の前の骨から立ち昇ったものだと考えると、間接的に骨に顔が触れたような気持ちになった。焼いた骨からは、少しだけ甘い匂いがした。理科室の標本のようにはっきりした姿ではなかった。骨は確かに人の形を残してはいたが、ほとんどが砕けている。

「これ本当に人の骨なのかな」

僕が呟くと、

「信じられないね」

泉さんが言った。

人数が少ないので、全員が骨を拾っても、大部分が台の上に残ってしまった。係員が合掌してから、実に素早い動作で骨を拾い上げてゆく。この白い固まりが、かつて一人の人間の肉体を構成して、独立した生き物として動いていたなんて本当なのだろうか。

みるみるうちに木村学の残骸は、小さな骨壺一つに収まってしまった。それでも、台の上に少しだけ欠片が残っていたが、これはどういった形で処分されるのだろう。やはりゴミのようにホウキでちり取りに収められ、どこかに破棄されてしまうのだろうか。

もしこの場所に姉が居たら、どうやってこの瞬間を受け入れるのだろうかと、僕はそればかり考えていた。僕には、木村が生きていたときの姿を思い出すことさえ出来ない。

骨壺の蓋が閉められるとき、カタリと骨が中で音を立てた。

急に泉さんが顔をそむけた。肩が震えている。

空の色が朱から黒に変わる頃、僕は家に到着した。リビングに父が居て、僕と目が合ったが何も言われなかった。自分の部屋のドアに手をかけ、廊下を駆け足する音で振り返り、そこにはサオリが居た。

「父さんに、何か言われた？」

「え、何って、なに？」

僕が尋ねると、彼女は驚きを浮かべて言った。

「なんにも言われてないのなら、それで良いんだ」

父はきっと、自分のことで頭が一杯で、それどころじゃないのだろう。そして多分、これから父は当分の間それどころになる時間なんかない筈だ。姉が警察に父とのことを喋り、全部が明らかになったら、それからこの家はどうなるのか。不安はあるけれど、僕は姉の判断を正しいと思っていた。

もし僕たち家族にやり直せる機会があるとするならば、それは今まで影に隠れていたも

のが光の下に引きずり出されて、それを全員が受け入れてからだろう。そのときは、僕も頑張らなくてはいけない。

僕はとにかく疲れていた。自分の部屋に入り、ドアを閉じようとして、僕の後について部屋に入ろうとしているサオリに気がついた。

「ヨウイチは、大丈夫だったの？」

サオリは心配そうに僕に尋ねた。僕は一瞬、サオリがなんのことを尋ねているのか理解出来なかったが、そういえば、葬儀に行く前に、彼女に話していたのを思い出した。

「ねえ、辛いの？　苦しいの？」

サオリがやたら気にかけている。僕はそんなに暗い顔をしていたのだろうか。

「いや、それは問題なかった。というより、それどころじゃなかった。そんなことを第一に心配するのがそもそも大間違いだったって思い知らされたよ。結局オレって自分のことばかり考えてたんだなって思った」

「そうなの？」

「うん。でも、それとは別に気がついたこともあったな」

僕は部屋に入って、外したネクタイをベッドの上に放り投げた。サオリも、続いて部屋に入る。

「何？」

彼女は首をかしげて、言葉を促した。僕は言った。

「大事な人には絶対オレより先に死んで欲しくないなって」

口に出してしまうと、随分当たり前の言葉になってしまったので、きっと僕の感じたことは正確には伝わらなかったろう。サオリは目をぱちくりさせている。死体はやっぱりただの肉の固まりにしか見えなくて、こんなに生命力に満ちあふれた彼女が、あのつまらないものになってしまうのは嫌だなと思う。

「でも、そんなこと思ってもどうせいつかは死んじゃうんだけれどね」

そう思うと、なんだか、今こんなに悩んだり苦しんだりして、自分を向上させたり何かを掴もうとしている努力が全部無駄のように思える。何をしても結局最後に行き着く場所があのつまらない壺の中だとしたら、なんの為に生きてるのだろう。そもそも、僕自身が今まで生きているのに理由なんかあっただろうか。人間は必ず死んで、そしたら消えてなくなってしまうなんて、そんなのずっと昔から知ってたのに。

こういうのって、本当ならもっと小さいときに考えることなんだろう。僕は死体死体と言っていたくせに、死について少しも考えたことがなかった。死体は人の形をした、ただの肉の固まりではなくて、そこには死というものがまとわりついているんだ。他の人にはそれが見えてるから死体を嫌悪して、僕にはさっぱり見えてなかったんだろう。

確かに、これはオカしいやつだと、初めて感覚として解るような気がした。しかし、も

しこの考えが当たっているとしたら、僕はかなり絶望的なのではないだろうか。
「解った。じゃあ、私は絶対ヨウイチより先に死なないよ」
サオリは僕を見つめて、きっぱりと断言した。
「そんな力強く言ってくれても、自分で決められることじゃないって」
僕は苦笑した。
「うーん、そうかあ。でも、それなら、どうしたらいいんだろ」
サオリは、一人でそう呟くと、手を顎に当てて考えるような仕草をしながら、狭い部屋の中をうろうろと歩き回った。僕はその間に、上着をハンガーに掛ける。
「そうだ！」
突然、思いついたように大声を出す。
「あのね、いいこと思いついた」
サオリは、目をキラキラと輝かせて僕を見た。
「すごい良いことだよ。きっと、ヨウイチも喜ぶよ」
「でも、サオリが思いつく良いことって、かなりの確率で全然良くないからなあ」
僕が言うと、サオリは頬をふくらまして抗議の意思を示す。
「そんな表情してると、顔がふぐみたいになっちゃうよ」
「ヨウイチが話聞いてくれないならふぐになったほうがいい」

「それは困るかな。じゃあ、ちゃんと聞くから気を取り直して話してよ」
「うん、あのね」
　サオリは真剣な顔で、話しはじめた。
「私はなるべく死なないよう頑張るけど、それでも、もし私が先に死んじゃって、ヨウイチが一人になっちゃって、そのときまだヨウイチが今と一緒で少しも良くならないで、悩んでたらね」
「なんか、夢も希望もない仮定だね」
「黙って聞いてよ」
「はいはい、ごめんなさい」
「そしたらね」
「うん」
「私の死体と一杯えっちしてよ」
「え……？」
「私がしてって言ってるんだから、ヨウイチは全然悪くもなんともないでしょ？　そしたら、ヨウイチも悩まなくて良くなるから、ちょっとはラクになるよ。きっと」
「馬鹿」
　僕は思わず、笑ってしまった。

「先に死んじゃうのはいけないけど、でも、もし駄目だったとしても、死んだあとにヨウイチに何か遺せるじゃん。だから、すごい良いアイデアだと思ったんだけど。……すてきだと思わない？」
「いや、すてき、とは違うと思うけれど」
「やっぱり、イヤかな」
サオリは、残念そうに俯く。
「遺そうって考えは悪くないかもしれない」
僕はその頭を軽く撫でる。
「まあ、嬉しいよ。せっかくの申し出だし、もしその状況になったら、そうするよ」
「良かった。じゃあ、約束ね」
サオリは嬉しそうに表情を輝かせると、小指を差し出した。僕はそれに自分の小指を絡めながら、
「でも、なるべく治したいな。生きてるサオリとそういうことしたいし」
冗談ぽくそう言うと、サオリの顔はあっという間に真っ赤になった。僕は彼女が照れている隙に、指切りの歌を歌いはじめ、手を振った。明るい顔で笑っているサオリは、やっぱり僕にはまぶしかった。
そして指を解くと、夕食が出来たと僕たちを呼ぶ母の声が聞こえる。

あとがき

小学生の頃、飼育委員という係をしていました。校門の近くにある飼育小屋の掃除や、餌、水の交換を行う係です。小屋にはセキセイインコだとか、ニワトリだとかが居ました。その日もだるいと言いながら掃除をしていたのですが、ニワトリの卵が巣箱からはみ出て、冷たくなってるのを見つけました。そこで僕はちょっと残酷なことを思いついたんです。卵を、ニワトリの前で少し割ってみたんですよ、ホウキの柄の先で押し潰して。親鳥は、自分の子供の可哀想な死体を見て、嫌がるんじゃないかと想像していたんです。

ところが、ニワトリはすごい勢いで、卵を食べ始めたんです。殻をばりばりと砕いて、むさぼってるんですね。赤い血の膜が表面を覆いかけている黄色い液体に嘴を突っ込んで、ときおり頭を上下させ、うなり声を上げ、狂喜しています。あっという間になくなって、ニワトリは卵が浸みた土まで食べてしまいました。その後も、名残惜しそうにずっと白い殻をつついています。僕はその光景にぞっとして、心臓がバクバクしていました。グロテスクで、恐ろしくて、その上変に神聖な気持ちでした。

この本は、同タイトルの18禁ゲームから、七年後のお話です。ゲームから引き続き書かせて頂きました。あの狭い飼育小屋の中みたいな世界だな、と思います。

CARNIVAL

2004年12月9日　初版発行

原　作　S.M.L
著　者　瀬戸口廉也
発行人　武内静夫
編集人　岡田英健
編　集　内田　佳
　　　　井上真吾
装　丁　マイクロハウス　クリエイティブ事業部
印刷所　シナノ印刷株式会社
発　行　株式会社キルタイムコミュニケーション
　　　　〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
　　　　TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

禁無断転載 4-86032-128-6 C0293